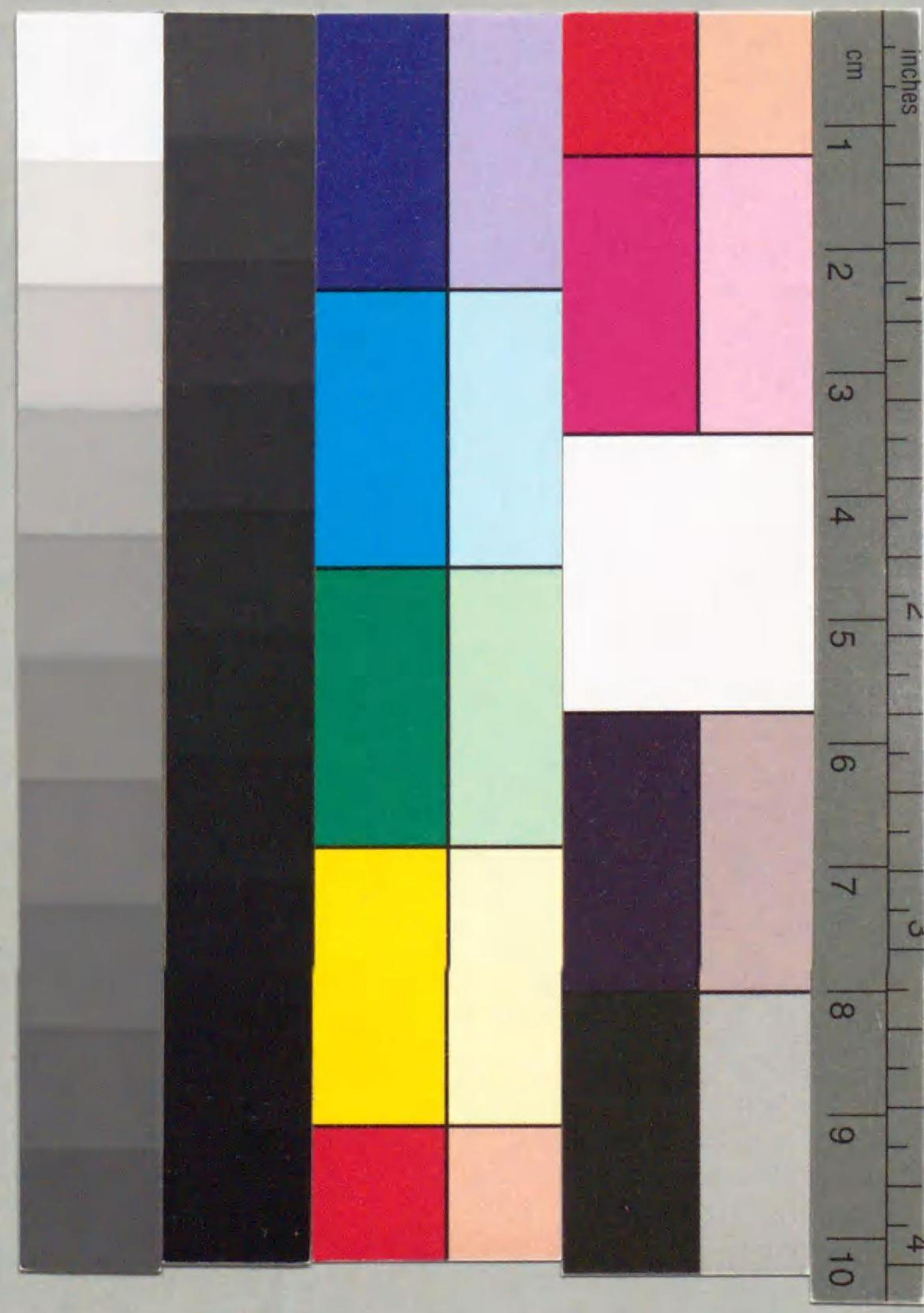


297.38  
Ka411n

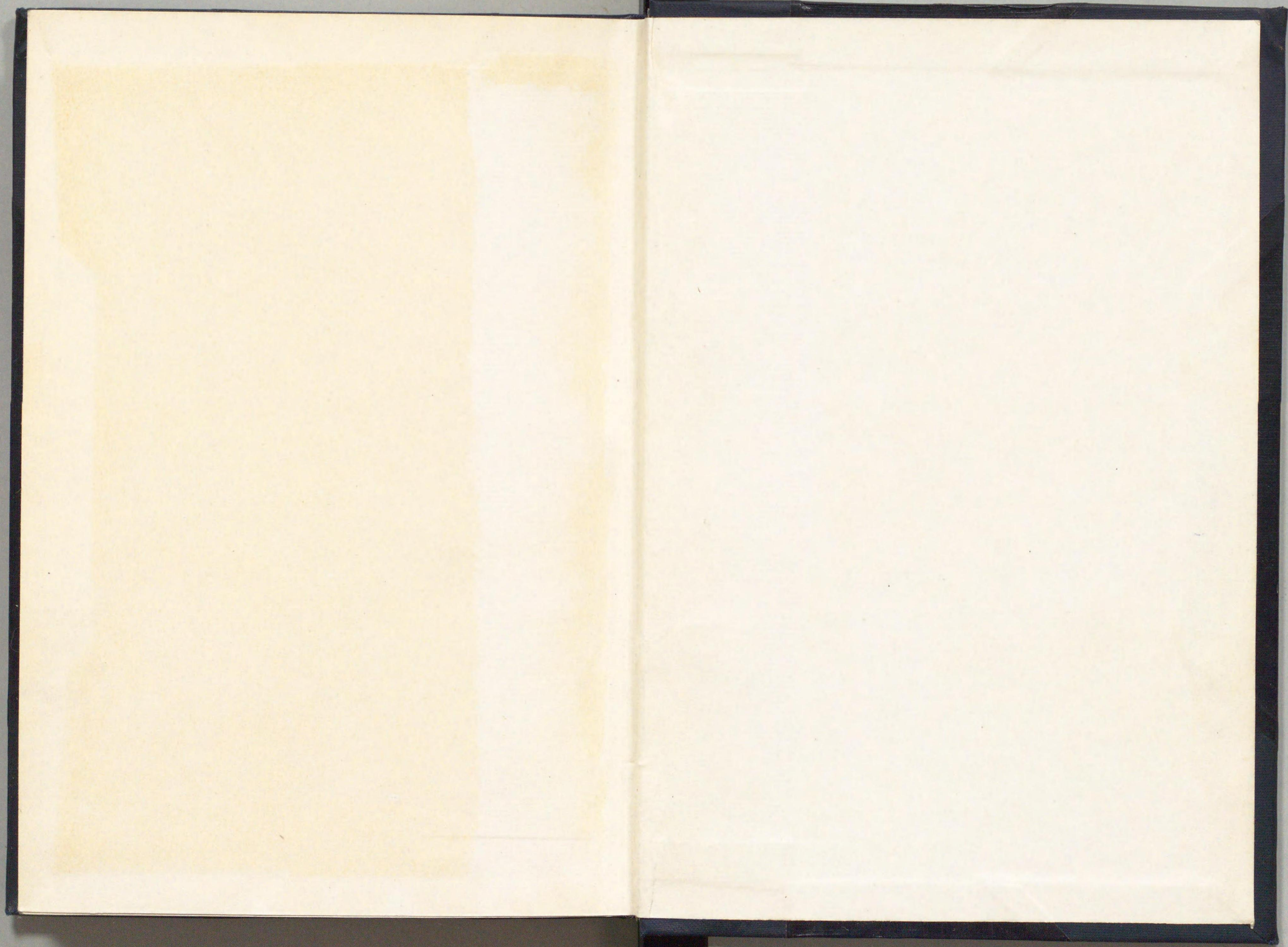


00115197

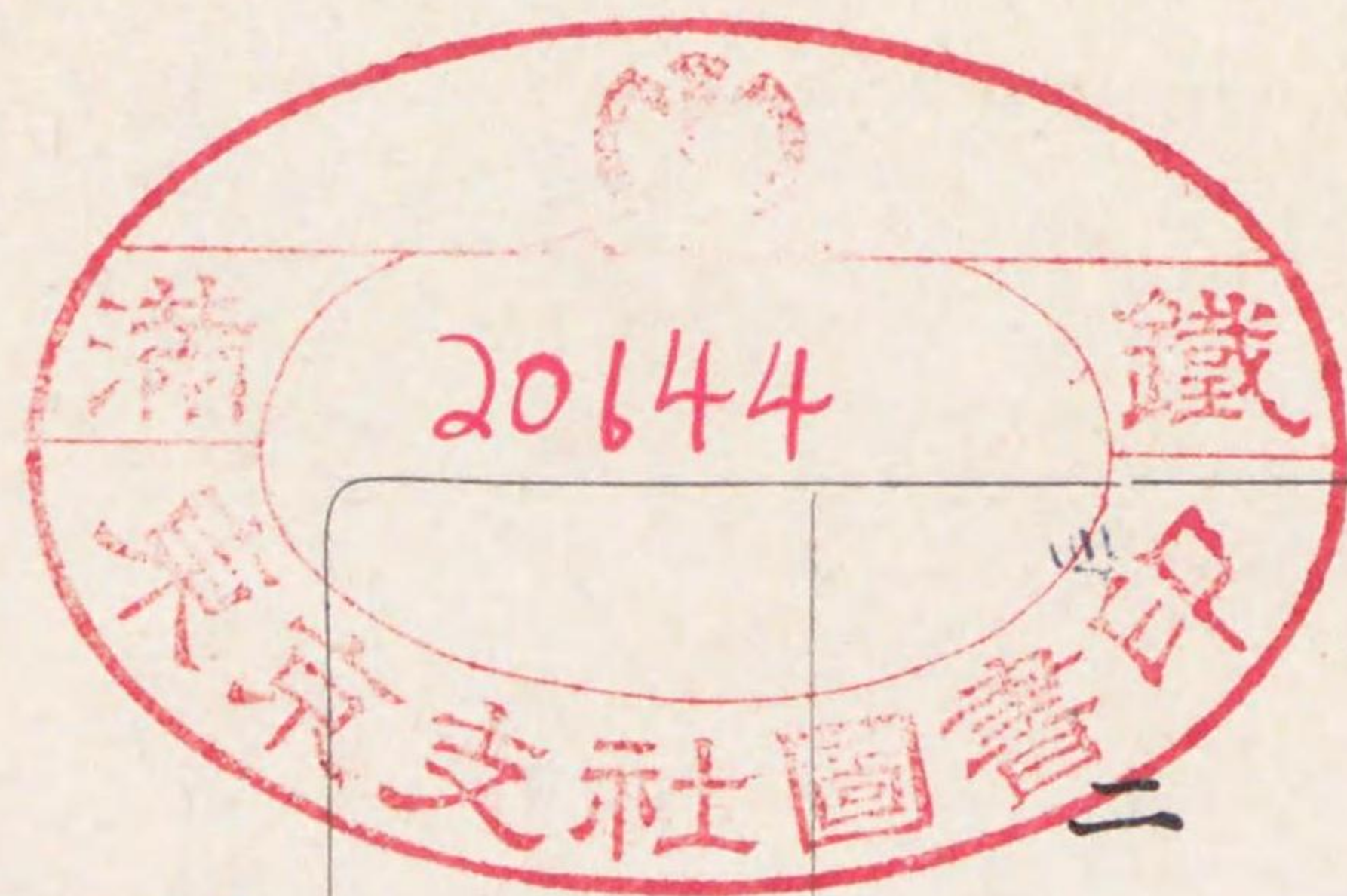
2  
K











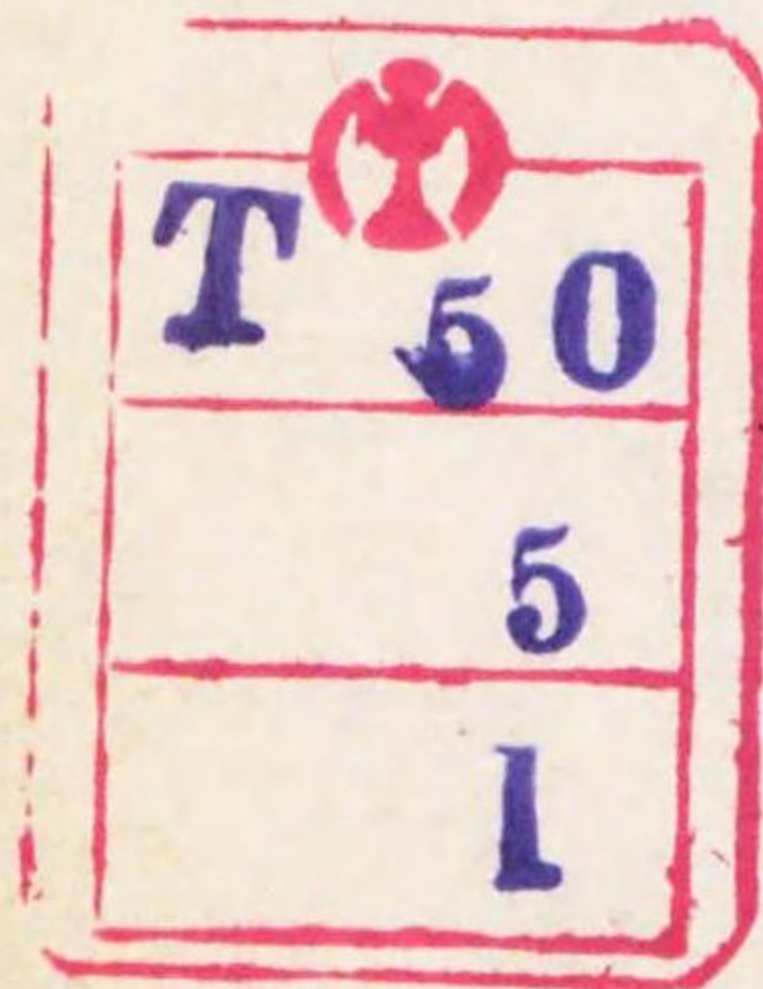
20644

印

ニ  
ユ  
ー  
ギ  
ニ  
ヤ  
探  
檢

林學博士 金平亮三 著

東京 株式會社 養賢堂發行



115



297.38  
Ka411n



115197

### はしがき

ニューギニヤは世界の「暗黒の地域」として知られて居るが、世人の想像する程危険な處ばかりでは無く、又到る處瘴癘の氣に充ちて居る譯でも無い。昔から極樂鳥の名により表徴せられる如く美しい島なのである。

私は昨年一月、日本を出立、蘭領ニューギニヤに渡航、同年五月歸朝した。その目的は研究資料の蒐集にあつた。從來未開地の探検や冒険記には、旅行者が兎角その足跡を韜晦して、根據の曖昧な事柄を誇張したり、或は獵奇的な事實のみを興味本位に傳へる傾きが無いではなかつた。然し私は旅行中の見たこと感じたことをその儘日記に書き付けた、従つて不平や不愉快なことも事實の通り記せざるを得なんだ。本書の「ニューギニヤ」の植物と「後記」とは、歸朝後匆々整理し執筆したもので、甚だ不満足ではあるが今回の探検の記録であり又その報告の一部である。



ニユーギニヤは是迄、千古の秘境として誰もが閑却して居た。然るに最近アメリカは數回に亘り大仕掛けな探検を試み學界に大きな足跡を印した。我南洋群島の南、赤道を距て、一葦帯水の地に横たはる此未開拓の一大島に、我國の學徒が何日迄も無關心たり得るであらうか。私は此「暗黒の地域」の扉を開くことは吾人の責務と考へてゐる。

世界の狀勢は刻々と一大變轉をなしつゝあるが、今回私の探検を無事に爲し遂げ得たことは、蘭印當局の好意と援助の賜であつたことを茲に附記して感謝の意を表し度い。

昭和十六年十一月廿日

金平亮三

ニユーギニヤ探検 目次

紀行

(一) 爪哇島へ 日昌丸 トラバヤ ..... 一

(二) 爪哇滞在 トラバヤ батаビヤ ボイテンヅルフ植物園 ..... 六一—二九

(三) 爪哇からニユーギニヤへ マカツサー タルナテ マヌコワリ ..... 三〇—五六

(四) マヌコワリからナビレへ モミ農場 ..... 五六—六〇

(五) ナビレ滞在とダルマンへの探検 探検準備 ダルマン探検出立 パバイヤ チヤバン パテマ ダルマン センネン アイイル・ジヤト スリーベル ブミ タンジヨ ン・パンジヤン ナビレ ..... 六一—二六

(六) 再びナビレ滞在 ..... 二六

(七) ナビレからモミへ ワシオール モミ ..... 二七—三三



(八)	モミ滞在	植物整理	マネキオン族	ランシキ・ゴム農場	ルンベルボン島	……	一三三—一四八
(九)	アング湖探検	出立	森林宿營	ギタ、ギジ湖	イライ村	キング・コンダ	ノ
			ス・ポール	極樂島の亂舞	モミ	……	一四八—一五三
(一〇)	再びモミ滞在	……	……	……	……	……	一九三
(二)	モミからマヌコワリへ	……	……	……	……	……	一九七—一九八
(三)	歸航(其一)	マヌコワリ	トコベ	バラオ	……	……	一九九—二〇三
(三)	歸航(其二)	名古屋丸	……	……	……	……	二〇三

ニューギニヤの植物

(一)	概説	(1) 発見と分割	(二五—二〇七)	(2) 地勢と氣候	(二〇七—二一〇)	(3) 探検と學術調査	(二〇—二五)
		(4) アーチボルド探検	(二五—二三三)				
(二)	植物界	(1) 植物文献	(二三—三六)	(2) 探検旅行の準備	(三七—三三)		

(三)	植物相	(1) 固有植物	(三三—三六)	(2) 植物相と森林	(三六—四三)												
(四)	探検結果	(1) 植物採集の種類	(四三—五〇)	(2) 採集地帯の植物相	(1) ナビレ地帯 (二五—二五八) — (2) アング湖地帯 (二五九—二七〇) — (3) モミ及びその附近 (二七〇—二七五)												
(五)	有用植物	(a) ダマル樹	(二七六—二七九)	(b) マツツヤ	(二七六—二七九)	(c) カユ・スネル	(二七九—二八三)	(d) ラサマラ	(二七九—二八二)	(e) カユ・ナニ	(二八二—二八三)	(f) カユ・ベシ	(二八三—二八四)	(g) サゴ椰子	(二八四—二八五)	(h) 野生甘蔗	(二八五—二八六)

後記

(一)	住民	(1) 膚色	(二八六—二八七)	(2) 頭髮	(二八八—二八九)	(3) 體格	(二八九—二九二)	(4) ニューギニヤ侏儒	(二九二—二九四)									
		(5) 頭指數	(二九二—二九四)	(6) 食物	(二九四—二九五)	(7) 家屋	(二九五—二九八)	(8) 装身具	(二九九—三〇〇)									
		(9) 宗教	(三〇〇—三〇一)	(10) 文化の浸潤	(三〇一—三〇四)													
(二)	動物	(1) 獸類	(三〇四—三〇五)	(2) 鳥類	(a) 極樂鳥	(三〇六—三〇八)	(b) 王冠鳩	(三〇八—三〇九)	(c) 鸚鵡類	(三〇九—三一〇)	(d) 犀鳥	(三一〇—三一三)	(e) 火喰鳥	(三一三—三一四)	(3) 爬虫類	(三一四—三一五)	(4) 魚類	(三一五—三一六)



- (5) 蝶類(三〇—三三)
- (三) 産業 || (1) 鑛産(三五—三三) — (2) 農産(三三—三四) — (3) 林産(三四) — (4) 海産(三四—三五) — (5) 貿易(三六—三八)
- (四) 結言 || (1) 産業開發(三八—三九) — (2) 労働問題(三九—四〇) — (3) 移民(四〇—四二) — (4) 保健と衛生(四二—四四) — (5) 探検(四四—四五) — (6) 結び(四六)

紀行

(一) 爪哇島へ



一月十八日 (日昌丸船中)  
 午前九時廿分博多驛を立つ、見送りの學生達が萬歳を三唱した。私は汽車が走り出すと、銃後を頼むと念から叫んだ、出征する人達の氣持と變りはない。曇り勝ちの空、雪がちらく降つてゐた。箱崎驛まで同車して呉れた學生達が茲でも亦最後の萬歳を唱へた。

十一時過ぎ門司驛に着く、大急ぎで税關棧橋にタキシを乗りつけ、旅券、爲替許可證、現金、旅具の検査を受けた後、特に私達を棧橋に待つて呉れたランチで沖懸りの日昌丸に乗込んだ。十二時の出帆に漸く間に合つた、私は着てゐた冬の厚い外套や帽子を見送りに來た家人に持たせて返し、見送りの人達を今度は私が船のタラップまで見送つた時、私は何げなく、「あゝ早く日本に歸り度いなあ」と呟いた。私はキャビンに入った。この日昌丸は昨年進水した新造船、調度品が新らしく如何にも爽々しい。



晝の食堂に出ると一等船客二十六人、紅一點の女性の外は商業関係の若い人達であつた。私は船長の正面に座した、見渡した處、私が一番の年長者らしい、同じ卓の人々と名刺を交換すると精陶商會M氏、爪哇にて實業を營むT氏、東京府技師O氏、ボルネオ、バンジヤルマシ、野村ゴム園のU氏であつた。

一月十九日 (船中)

朝七時、温い一杯の珈琲がベッドに運ばれた、甲板に出ると右舷、遙に屋久島が雲の間にその頂を現はし、波は相當荒いが船の動搖は少なかつた。

午後船長とデツキ・ゴルフ、甲板が米松なので滑りが悪い。夕方奄美大島が幽かに見えた。

一月廿日 (船中)

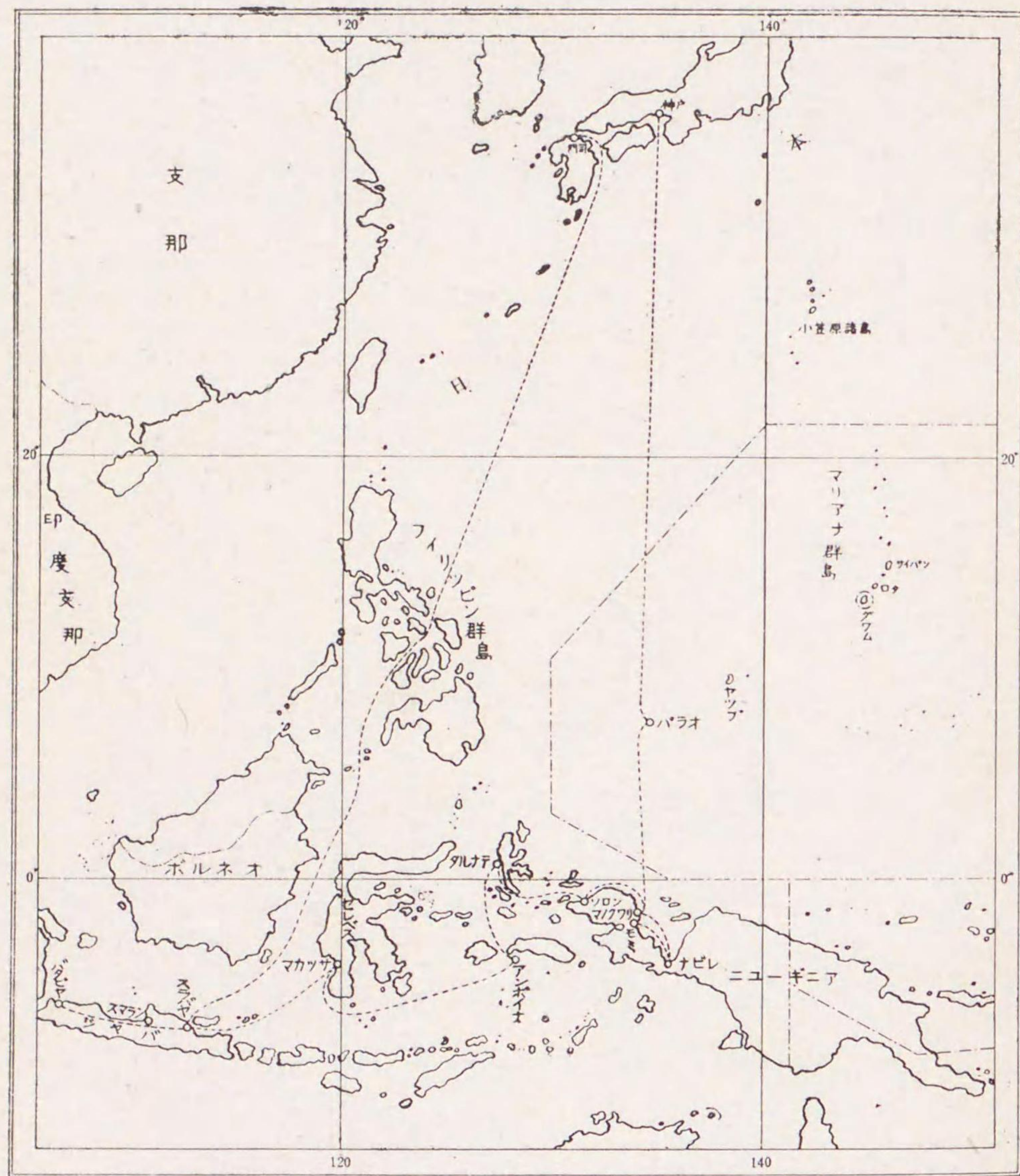
氣温が昇つて來た、夏の合服に着替へて甲板に出ると快適な微風があつた。

食事は多くは日本食、時々洋食、食後いつも果物が出るのが嬉しかつた。

正午迄の航程、三百四十二哩、北緯二十三度五十分、午後、回歸線を越した。

一月二十一日 (船中)

涼しい東北の貿易風が吹いた、朝の珈琲を濟ませてガラス張りの甲板に出た、赤い太陽が東の水平線から昇り柔い光を甲板の上に投げてゐた。海に白波が立つてゐるが今日も船の動搖がない。



No. 1 著者の旅行圖

(原圖)



正午、ヒリツピンの東北端に達したが風はなほ冷い、午後はゴルフ、夜はサルンから鳴る蓄音機を聴きながら早くベッドに入つた。

一月二十二日 (船中)

朝の陽光が私のキャビンの窓を射す頃起きた、涼しい気温、サルン備付の小説を読んだ。正午船の位置は北緯十三度十九分で、午後、ルソン島の東南、サン・ベルナデノ海峡に入り、ネグロスとセブ兩島の狭い間を進んだ。セブ島は低い丘陵地で海岸に近く古々椰子の林が続き、所々焼畑の跡地が現はれ、夕方になると海峡は愈々狭く點滅する人家の燈火が見えた、風は風ぎ、海は湖水の様で蒸し暑くなつて來た。

一月二十三日 (船中)

朝、海峡をぬけ、ミンダナオ島の西海岸に沿ふて南下、正午、北緯八度十六分、全航程の凡半ばを航行した、暑さも本格的となり室の電扇が唸つて來た。夜に入ると満月が澄んだ空に懸り海には銀波を映じてゐた。

船はザンボアングの沖に差しかゝつた。

一月二十四日 (船中)

昨夜は蒸し暑く寝苦しい夜であつた、午後から陸地を見ず、船はスルー群島の間を走つてゐる

のであらう。

一月廿五日 (船中)

朝六時、船は赤道を通過した、往時、航海の少なかつた時には赤道の通過は珍しいことであつた爲めか色々の行事があつた、和蘭船では始めて赤道を通過する者に頭から冷水をかけた。最も普通に行はれるのは赤道の神様から通過の鍵を頂く儀式である、然し最近まで、船會社は客の吸収策として赤道を通過する毎に神様から貰ふ鍵の代りに一枚の切符を發行し、それが一定の枚數になると割引券と交換する仕組みにしたこともあつた。

船はマカツサー海峡に入つた、つまりワレース線に沿ふて南下してゐる譯だ。明日から外國の領海内に入るので内地へ電報を打つた。

午後、右舷に沿ふて帯の様な低地が見えて來た、ボルネオのバリク・パパンか、サマリダ地方の石油地帯であらう、夕方から幾分涼しくなり、夜に入ると陸地の燈臺が見えて來た。

一月廿六日 (船中)

大層涼しい、船は爪哇に近づいて來た、小島がボツ／＼現はれた。

夕は送別會がガラス張りの甲板上に催された、幾つかのチャブ臺が置かれ、座布團を布き「すき焼」の御馳走、船長初め船客は浴衣がけに胡坐をかき賑やかに食事した。



## (二) 爪哇滞在

一月廿七日 (スラバヤ)

朝早くから船内がざわめいた。拂曉から起き、荷物を整理し、上陸の準備をした、パイロットが既に船橋に上がつてゐた。

間もなく移民官が來船、サロンで訊問があつた、二人の蘭人が支那人らしい二人の書記を伴ふてゐた、そのサルの入口にはピストル携帯の馬來巡査が立番をしてゐた。

査問が済みサルンから甲板に上ると船は棧橋近くまで進んでゐた、左手には爪哇島とマヅラ島とが低く海に浮び、白亜の箱を重ねた様なスラバヤの町を距て、遙に雲間に聳ゆる秀峯が見えた、爪哇最高のセメロエ山(三、六七六米)であらう。

海には又軍艦、潜航艇が見えた、日本船の入港毎に飛ぶと云ふ飛行機が今日も一臺、型の如く日昌丸の上を一、二度旋廻した後何れにか姿を沒した。

船は棧橋にピツタリ着いた、棧橋に列ぶ我南洋倉庫會社に隣接する建物が最近火事を出し、荷物はなほ散亂したまゝ無慘な残骸となつてゐた。

船に堀野ホテルの主人が來たのを幸ひ、荷物の世話を頼み手ぶらで下船した、棧橋の税關に行くと船客の荷物検査はもう始まつてゐた、スラバヤ到着の前日、船で取り上げた各自の寫眞機は茲で引渡すのだが手續が面倒らしいのでホテルの主人に頼んだまゝ外に出た。

タキンを呼び堀野氏が同乗、鳳凰木、木麻黄、ヤラボの並木道を走つた、外國の土地に初めて上陸した時に感ずる一種の情緒を味ひながら堀野ホテルに到着した。

ホテルはごみくした市街地にあるらしく、周圍はすべて支那人の街であつた。

我領事館がこのホテルから近い數分の處にあるので直ちに訪問、桑原領事に挨拶、旅行につき種々打合はせを済ませ宿に歸つた。

宿の午飯は純日本式、久し振りにマンゴスチンを味つた、今その出盛りの季節なのだ。

一月廿八日 (滞在)

爪哇の朝食ほど楽しみものはない、私は一番それを好んでゐる、香りの高い爪哇の珈琲とパン、和蘭のチーズ、濠洲のバター、アメリカ製のマーメイドやジャム、それに種々のソーセイジ、食後の熱帯果物、こんな贅澤な朝食が外にあるであらうか。

朝食後、私は爪哇で有名だと云ふ動物園を見物した、園は市街の南方にある、茲に通ずる道路の兩側には瀟洒な新しい住宅が列んでゐた。



動物園はその規模は大きいとは云へぬがその鳥類の蒐集に於て他の追従を許さぬであらう。極樂鳥が九種類も籠に居た。

ボルネオのオーラン・ウータンはよく人に馴れ柵の外に出て小供と戯れて居た、スマトラ産の猩々はその顔が盆の様に大きくその中心に目鼻が集まり、丈の低いグロテスクな動物、又アフリカ産のチンパーンジーは高い柵に寝たまゝ動かなかつた。鱈、トカゲ類が多く、爬虫類はすべて郷土の自然生活を楽しんでゐるかに見えた。園内にはなほ水族館と博物館とがあつたが中には入らなうだ。

一月廿九日 (滞在)

朝の散歩にホテルを出て市場附近を歩いた、まだ太陽が漸く地平線に上りかけた計りであつたが芋を洗ふ様な人出、この雑沓する間を道路の掃除人が帚で掃いたり、支那人の夫妻らしいのがサドに乗つて鈴を鳴らしながら人を分けて走つてゐた。熱帯では朝のうちは涼しいから早くから買物に出掛けるのであらう。

朝食後、ホテルの田中君に連れられ移民局に旅券を貰いに行く、移民官の査問は叮嚀で直ぐ旅券を返却して呉れた、歸途、日本領事館の近くにある日本實業協會の二階で催されてゐる東京市貿易業者の商品の展示會を一瞥した、陳列方法が悪い爲めか甚だ貧弱に見えた。

夕、烈しいスクオール、領事館の自動車の出迎へで桑原領事の晚餐會に招かれた。

一月卅日 (バタバヤ)

朝、スラバヤ六時九分發の急行列車でバタバヤに向ふ、車内の乗客は寥々たるものだつた、平常なら爪哇の観光客で満員勝ちなのだが歐洲大戰の結果少ないのであらう、二十年前は機關車の燃料がチーク材で煤烟は車内に吹き込み白い服は忽ち汚れ、甚だ不愉快だつた、現今はその速力や設備など我國の特急に比しても遜色がない。

爪哇の東部は降雨少く、甘蔗栽培が盛で、車窓から眺めると輪作としての稻田が一面に續き、眞夏の關東平野を思はしめた、忙しく田植をして居る田もあれば既に稔つた田もあつた、爪哇の水田はその栽培面積が日本と殆ど伯仲し、二毛作であるがその産米は日本の半分にも充たぬ。

甘蔗は不況以來、耕地も減少し工場も閉鎖した爲めかその畑も少く、所々に煙を出さぬ工場を望んだ、汽車の沿道に農家を見ることの少いのはどう云ふ譯か。

汽車は谷間を抜けて走つた、傾斜地には玩具を積み重ねた様な段々となつた水田が見えた、熱帯地で爪哇ほど土地を収約に利用する處は無いであらう。

ジョクジャを過ぎた頃かと思ふ、チーク林を所々に見た、銀合歡と交互に直播して間も無い幼齡林もある、その生育は臺灣と大差が無い様だが間伐が適當に行はれてゐることは参考とすべき



である。

西部プレアンガー高原にさしかゝると、この地方は降雨量が多くゴム林が増えた。この地一帯の高地には珈琲、茶、規那が栽培せられてゐる。

汽車の食堂ボーイが御用を聞きに來た、私は今朝、腹工合を悪くして居るので食事を座席に運ばせた、馬來人のボーイで慇懃な物腰であつた。

ゴム園が次第に増え、手入のよく行き届いてゐるのに感心した。此ゴム林の間にカポツク樹の矮林作業を見たが丈が低いのは蒨の摘果を容易にする爲めであらう。

停車場に物賣りが甚だ少い、煙草にチョコレート、然らずんば果物賣りばかりであつた、

バタバヤに近づくくと田舎に人家がポツ／＼と見え、六時、バタバヤ驛に着いた、齋藤總領事、池田副領事、香田南國産業重役の出迎へを受け、直ぐ箱根ホテルに落ちついた。

一月卅一日（滞在）

ウイルヘルミナ和蘭女王殿下の天長節で官廳は休み、商店街は午後閉店すると云ふので午前香田氏の案内でゴルフ書店に行つた、出て來た蘭人の店員は甚だ無愛想だつたが一、二の本を求めると急に態度が變つた、ニューギニヤ關係の圖書、僅に數部を求めたに過ぎなんだ。

午後、同盟通信の安藤氏に連れられ總領事官邸を訪ふ、堂々たる建物で、廣い應接間のホール

や食堂等中々立派で、此地の外國の領事館中斷然抽んで居ると云ふことだつた。

午後、總領事の好意により小津書記生の案内で市中を見物した。

先づタンジョン・プリオクを見た、坦々たる道路のドライブは快適でタマリンドの並木は往時の儘であるがその幹に白ペンキの輪が塗つてあつた、夜間、自動車のヘッド・ライトで之れを照し衝突を避ける爲めなのだ。

港内には日昌丸が横付けになり日章旗が風に翻つて居た。

市内では觀光客が必ず見物すると云ふ迷信の大砲が大道路から十數歩、樹蔭の下に横はつて居るのを見た、砲身に「我は汝の胎内より生る」と葡語で記してある文字を案内者は説明する、子寶を得んとする女はこの大砲に詣で接吻すると云ふ。

爪哇の反亂者、ピーター・エベルフェルトのコンクリート製の首は今もなほ路傍の高い塀の様な臺石に置かれ、勝は風雨に侵蝕せられて齒が剥き出で悽慘な相貌を呈し、千七百二十二年、四月に死刑となつたと記してある。此曝首を何日迄も路傍に置くことは土人の見せしめかも知れぬが旅行者の顰蹙を買つてゐる。

二月一日（滞在）

九時、池田副領事來訪、同氏の案内で市内の經濟省に農務局長を訪ふた、豫め打ち合はせてあ



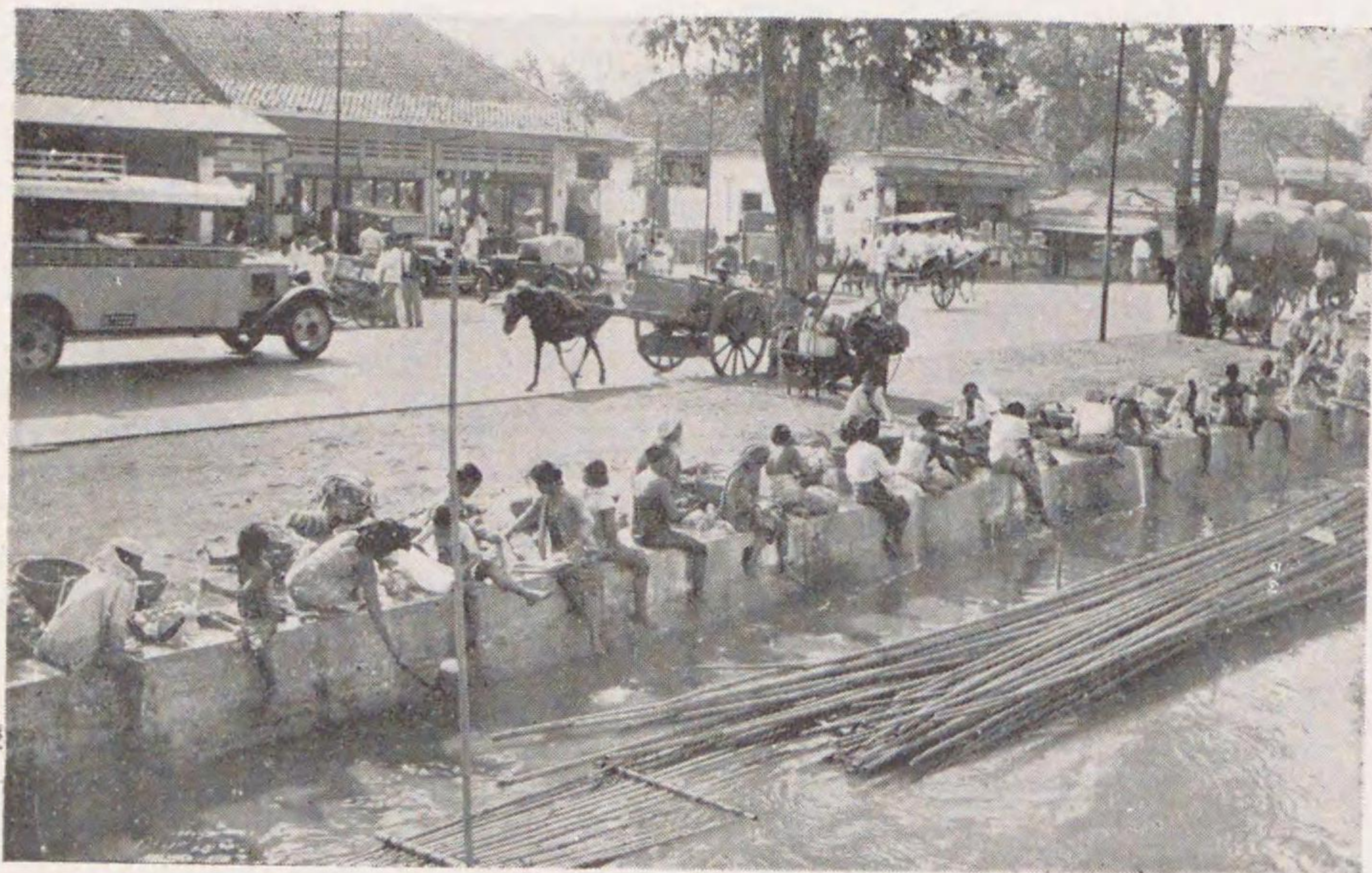
つたので直ぐ事務室に招ぜられた、ガランとしたほの暗い静な室、人の氣配が少ないお寺の様な感じは歐米の役所と同じだった、池田副領事から私達の旅行につき便宜を得度いことを依頼した、局長は壯年の精悍らしい風貌だが愛嬌のある好人物に見受けた、歸へる時役所の出口にある經濟省の次長を訪ねると、六十を越したと思はれる肥つた老紳士、用事は何でも申出よとの事だつた、辭して席を立つと玄關まで見送り、池田副領事に

「日本の領事館ではすばらしい自動車を持つて居るそうだが一度乗せて呉れないかネ」と云へば池田副領事

「今日は生憎自分の自動車でお氣の毒です」と氣輕に應答した。

時間が餘つたので博物館に入る、その蒐集品の主要部分は蘭印の土俗品で内容の豊富なることは驚くの外無かつた。博物館に近き産業博物館にも足を入れる、元ボイテンゾルフ植物園内にあつたものを茲に移轉したので建物古く、見榮えがせぬのは多少失望したが蘭印の主要産物が悉く展示せられ、ゴム、茶、珈琲、砂糖、タピオカ、カボック、規那、ガツタを始め種々の工業原料が製品になる迄の過程を巧みに陳列してあつた。

館を出て地理局の地圖販賣事務所を訪ふ、元は即賣だつたが次第にやかましくなり、今は購入



No. 2 バタビヤ市中の運河で洗濯する爪哇婦人 (繪葉書)

の目的、申込者の職業氏名を書いた願書を提出し、許可を得た上でないと求めることが出来なくなつた、然し私の購入を申込んだ廿餘枚の地圖は後に蘭印當局の好意で寄贈を受けた。

午頃ホテルに歸つた。午後は珍らしく空がからりと晴れ、二時、三時になると暑さが強く室内でも汗がとめどなく流れた。

夕方はゾット凌ぎよくなる、町を散歩して見た、市中を流れる運河の水はミルクを入れたリプトン茶と全く同じ様な色で、男女の沐浴者が一杯であつた、此川は土人の衣類、炊事具の洗ひ場であるが又土人の厠でもある。

夜、總領事官邸で私の爲め晚餐會が催せられ十數名の來客で賑であつた、私は饗應の半ばで氣分が悪くなり退座するの己む無きに至つた。爪哇に





No. 3 ポイテンズルフ總督官邸

(繪葉書)

到着以來、氣候と飲食物との調節が取れず胃腸が弱つてゐたのが原因であつた、宴會の席上、誠に相すまぬことだつた、ホテルまで附添ふて送られた、私は浴衣に着替へ、ベッドに體を横たへた。

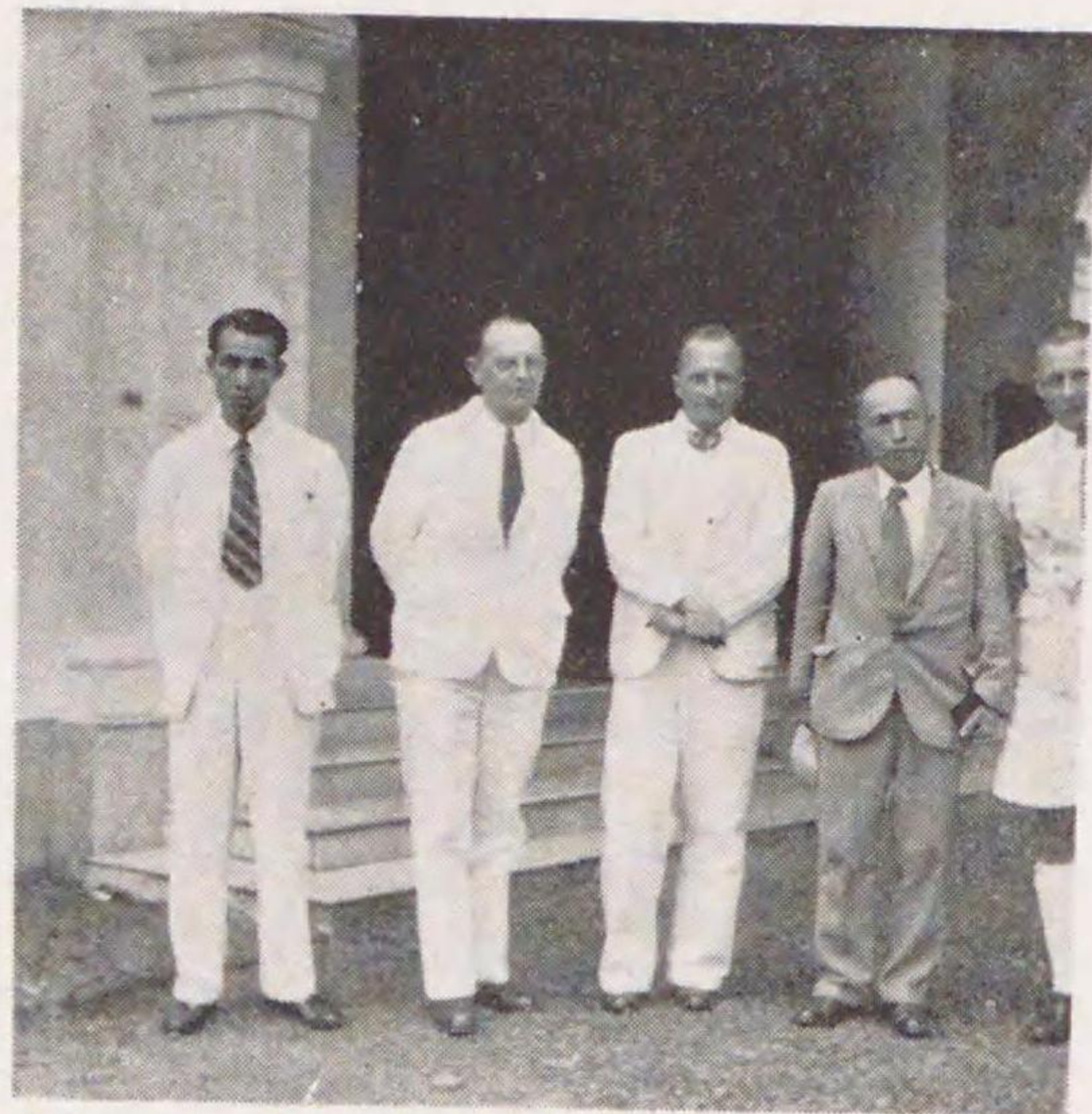
二月二日 (滞在)

終日休養、夕、安藤君に連れられ古本屋を漁つた。

二月三日 (ポイテンズルフ)

七時半、香田氏が自分の車で私を出迎へに來宿、内地から視察中の小里氏を加へポゴル即ちポイテンズルフに車を走らせた、美しい並木、坦々たる道路で、陋屋の土人街を抜けるとゴム園や果樹園があつた、田舎道は人通り少く自動車はスピードを出す、快適な涼風が顔を撫で、車の走る正面にゲーデーとサラクの山が特に美しく見えた。

一時間餘でポゴルの町に着いた、左手のパレス即ち總督官邸は往時の儘の白壁で塗られ、芝生には日本から移入したと云ふ鹿が遊んでゐた、町の模様は、往時に比べると一變し一段の繁華街となつて居た。



No. 4 中央植物園長，その右スロートン，左筆者，左端初島君 (金平)

車を植物園の正門前に待たせ園内に入る、名高いカナリヤ並木が昔の儘の姿で亭々と立つて居た、並木道を半ば進んで左に曲り、日蔭室の間を通つて園長室を訪ふた、事務所と官舎とを兼ねた粗末な一棟だが、元ポ植物園長であり蘭印の農務長官として偉業を遺したトロイブ博士の住居した記念すべき建物である、裏庭で働いて居た土人に名刺を持たせ來意を告げると園長 Dr. L. G. M. BAAS BECKING 氏が

ポーチまで來てその事務所であり又應接間でもある室に招じて呉れた、園長は五十前後の年輩、昨年一月迄園長であつたダンメルマン博士の後任としてライデン大學の教授から轉任して來た植物生理學者、米國の加州大學にも永く居たと云ふ。私がニューギニヤ植物探檢の計畫を説明すると、氏は



「凡ゆる便宜を計りますが、採集した標本の一組はボ植物へ寄贈して下さい、そして出来る事

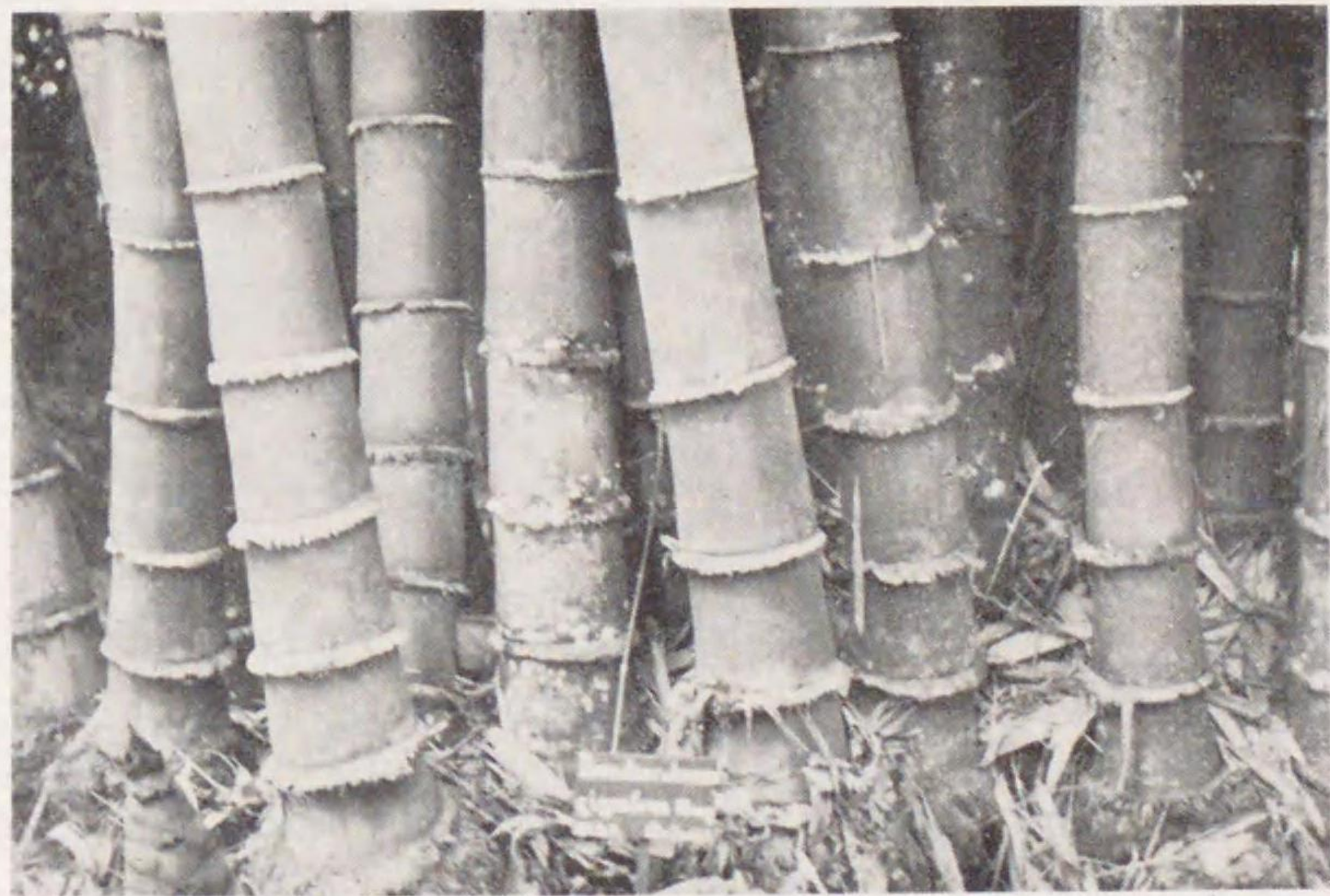
なら研究結果を植物園年報に発表して貰ひ度いものです。是迄、獨逸やアメリカからニューギニヤに探検に来たこともあるんですが標本を持ち歸へつて研究の結果はその本國だけで発表せられることがあり、政府が折角援助しても何にもならないのです。

それからあなたの探検には政府の方から案内を付けますがこれは近頃の外國の探検隊には必ず参加させることになつて居るのです。」

誠に當然のことであるから、どうか宜敷頼むと云ふより外無つた、そうしてそれは實行せられた。

園長は又

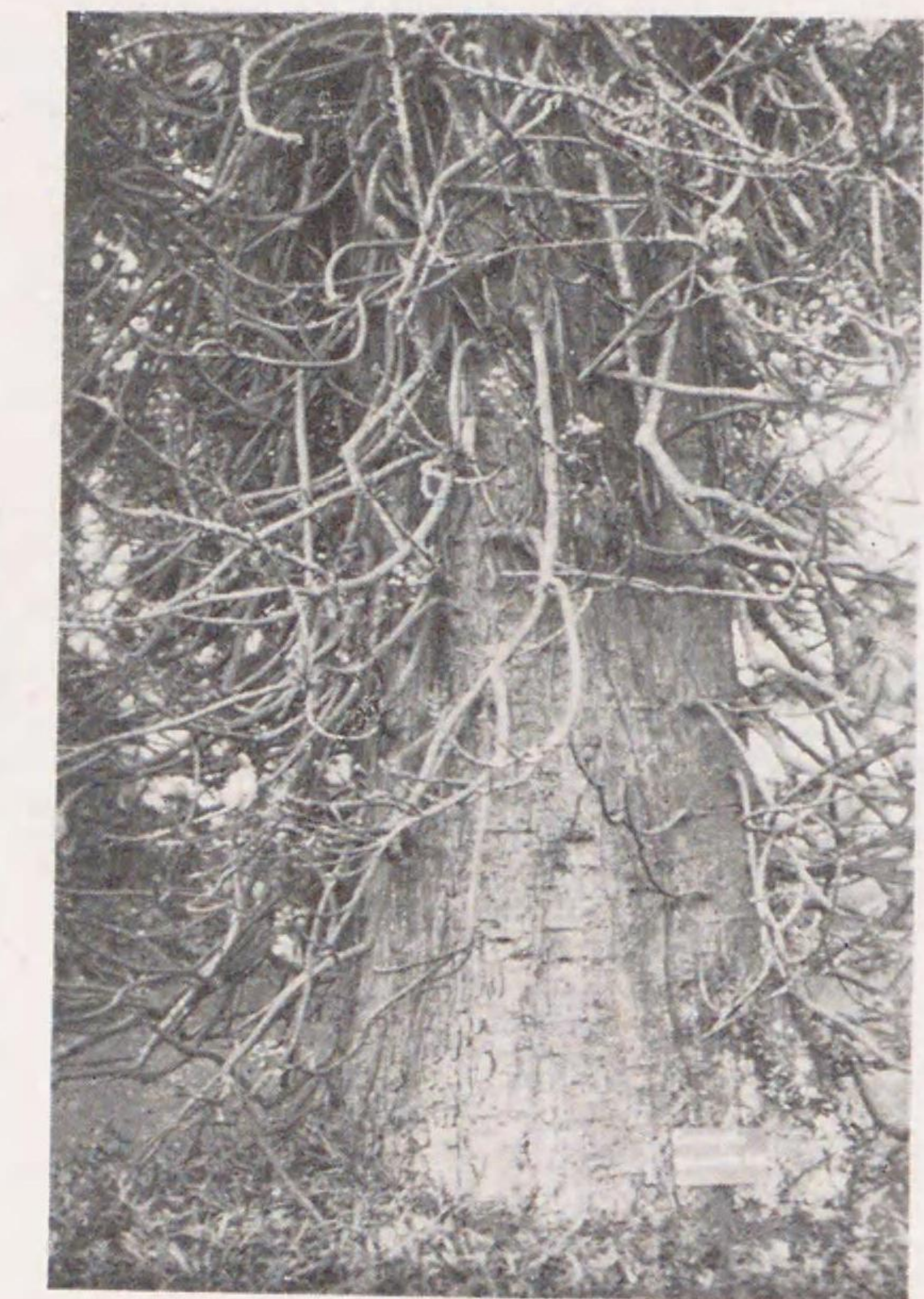
「ドクトル金平、私は昨日晝飯を一緒に食べる様に準備してゐたんですが御病氣で來られなんだのは残念でした、今日は又生憎く午後から東部



No. 5 ビルマ産大蕨竹 (ボ植物園) (金平)

へ旅行するんでお訣れせねばなりません、園内は一つこれから私が案内しましやう。」

と、着替への爲め奥へ這入つた、私は室内に列べてある標本を眺めた、園長が室に歸ると氏は棚の上から大きなヘウタンの様な實を取り上げ、「これを御存知ですか」と中から一つの種子を取



No. 6 アフリカ産「砲丸樹」、根元に近い幹から花序を出し砲丸の様な實を着ける (ボ植物園) (金平)

り出した、種子には大きな膜質の翼があつた、その種子を口元に近づけプツと吹いて手から離すと種子は見事に空中滑走した。私はこの不思議な種子は何であるかと尋ねると *Maeroua nonia macrocarpa* と云ふ大きなツルであることを教へて呉れた。

園長は自分で車を運轉し園内を案内した、園の手入れがよく行き届いて居ることは昔と變りはない。園の東にあつた藪はすっかり切り拂はれて青々とした廣い芝生となり、丘の上には氣のきいたパビリオンが出來て居た。



一巡の後、「トロイブ博士記念研究室」に案内せられた、外國研究者の爲めに出來たもので、この園で研究した學者の姓名とその年月日を記入した額が掲げてあつた。日本の學者では一八五五年の三好學博士を筆頭として最近では一九三七年の木村康一博士まで計七人の名があつた。

外に出ると庭にはトマトの水耕による速成栽培試験があり、又ブドウ科植物の氣根の生長率が空氣中の湿度に比例すると云ふ興味ある實驗装置を見た。

園長室に歸ると腊葉館長スローテン博士、園主事ダックス君が來會した、ダックス君は私が十八年前この園を訪問した時は着任したばかりだつたが私をよく記憶してゐた。一同は茲で冷い飲物を饗せられ、一時を談笑に過した後園長と別れ、私達はスローテン君の車で元の有用植物園、現在の農事試験場に案内せられた、折悪しく猛烈なスクオールで場内を見る譯に行かず、視察を他日に約し園の正門に待たせた自動車まで歸り、街の支那料理屋に入つて晝食を取つた。

雨の竭むのを待ち、香田氏の案内で同氏の監督の下に經營せられて居るポイテンゾルフの北方、十四キロにあるテムラン在の南國産業會社事務所に車を走らせた、支配人の社宅に車を止めると獨逸系の偉大な體格を持つた支配人がその若い妻君と共に何かともてなした。私達はゴム工場、製茶工場を一通り視察し、車で園内を一巡した、園は大部分ゴムの植栽地で主に芽接苗が用ひられてゐた、芽接ゴムは實生に比し凡二倍の收量がある、試みに八年生の樹をとつて比較する

と實生のものは一ヘクタール一年の平均收穫量六百五十キロなるに對し芽接のものでは千百キロ

となつてゐる。手入法も昔と次第に變つて來た、馬來地方の無草<sup>クランウイデン</sup>地方の失敗により茲では被覆作物で沃土の流失防止をしてゐた。

この園には又茶の栽培地があつた、元來、茶は海拔の高い地域に適するが、茲では庇蔭樹に喬木を用ひ日照を調節してゐた、風味の最も良いオレンジ・ペコ(即ち白毫又は白殻)も相當のものが出來るらしかつた。ペコは新葉の最先端から摘み取つたものである。

農園を視察後再び歸途に就き私はボ市のホテル・ベルビユ・デビットに逗留することにした、このホテルは昔から馴染のあつたものだが最近、移轉、新築したもので室内の設備は良いが風光は元のホテルに及ばな



No. 7 椰子園の植物園 (金平)

ホテルの室にスリツパの備付なく又ベーションに石鹼が無いのは不便で、白い大きなタオルが幾



枚も掛けてあるが私達にはさして用をなさなんだ、往時は各室の専屬ボーイが何くれとなく世話をして呉れたが現在は設備がよくなつただけで居心地は悪くなつた。

二月四日 (滞在)



No. 8 最も軽い材として知られる  
*Alstonia spathulata* (木植物園) (金平)

拂曉頃から教會の鐘の音が靜な町に鳴り響いた。  
朝食後、植物園前の動物博物館を見た、建物も古いが内部の陳列品も何となく薄汚ない感じを與へた。日曜日の爲め華僑と土人の見物で一杯だつた、此人達に揉れながら内部を一巡した、各種の極樂鳥、毒蛇、猿類、人魚などの標本

が目に着いた。

館を出て植物園に這入つた、カナリヤの並木、その右手のマチン科、センダン科、ケフチクタクウ科の各區、パレース(總督官邸)前の大鬼蓮、すべて昔の儘の姿であつた。

園内で一番美しいのは椰子園パルミーグムと之れに接續する水生植物區であらう、又此池の隅に軽い材として有名な *Alstonia spathulata* Br. や、我南洋パラオでその種名を明にすることが出来なんだ

*Hanguana malayana* Merr. があつた。タコノキ園、ソテツ園、羊齒園シダが昔の佛も無く荒れてゐたのは物足らなんだ。

夕刻、昨日視察した南國産業の上條君がホテルに來訪した、一昨年東大、農學部を卒業、單身、赴任した青年學徒である、私は試みにどんな生活をしてゐるのか尋ねて見た、すると上條君は「社宅には召使が三人居るんです、料理人の外に洗濯と掃除をする爪哇人なんです」

「それは豪勢だね、して幾らの給料をやるんだネ」

「一日、尤も半日しか働きませんが給料は十仙から十五仙です」

成る程三人の召使が居ても給料は一ヶ月拾盾で足りる、勞銀の安い爪哇、資本家が金儲するの  
は自然であらう。

上條君とホテルで夕飯を共にした、氏は九時過ぎ豪雨中をチムランに歸つて行つた。

二月五日 (滞在)

今朝九時、農事試驗場を訪問する約束なので早く朝食を済ませた。ホテルの前を通るサドに乗つた、チリン、チリンと風を切つて小刻みに走る驢馬の腹に縛ばつた二本の梶棒が心地よい振動



を私の體に傳へて呉れた。農事試験場長 Dr. O. Posthumus 氏を事務所を訪ふた、歳は五十前

後らしく大きな柔和な眼が聰明さうに輝いて居た、氏は先づ園の一般状況を説明した。

場は種藝部、病理部、土壤部及び植物部の四つに分ち學位を有する技師合計四十二名、外に三百八十人の場員がある、なほ此外にセレベス島メナドには古々椰子の栽培試験場があると云ふ、蘭印政府が如何に農事に力を入れてゐるかが窺はれる。

場長の紹介で有用植物栽培主任 Dr. W. K. HAITEMA 君が場内を案内した、元氣さうな中年の技師であつた。

と見え胡椒やデリスに力が入れてあつたのは意外だつた、私はデリス根が有望かどうかと尋ねて



No. 9 ゴム凝縮用使用する新作物コンニヤクイモ (金平)

私が感心したのは園内が實によく清掃せられ、雑草の無いことだつた、見本園の植物の説明を聞きながら歩いた、熱帯有用植物にも盛衰が循環するもの

見た、するとデリス栽培は是れから事業化させるので利益に就ては確答をせなんだ、なほデリスと同じロテノン含有すると云ふブラジル産の *Lonchocarpus niger* (荳科) の栽培が果して成功するかどうか、試験中であつた。又コンニヤク芋の一種である *Amarophyllus onchophyllus* が



No. 10 大風子樹 (Hydnocarpus anthelmintica) (金平)

ゴムのラテックスの濃縮用劑として近頃着目せられその栽培試験が行はれて居た。ゴムの芽接は試験済みとなり往年の寵兒であつた油椰子やガツタ樹が今は瘠せた勢の無い姿を園内に曝して居たのは寂しかつた。癩病の特効藥たる大風子は先年來た時には新植したばかりであつたが、それが今生長して

結實するに至つた、然しハイテナ技師の説明によると效力に疑を持つて居た、近頃布哇でも同じ様な説をなす者があるが我國では癩病の特効藥として現に盛んに用ひられてゐる。

近來爪哇の重要産業であつた砂糖、ゴム、珈琲、茶が下落大打撃を受けたので試験場が新産業



として登場せしむる栽培植物に就き、多大の努力を拂ひつゝあることは當然であらう。

農事試験場の視察は一時間餘りで終つた、私は園で世話をして呉れたタキシで約束の時間である十二時に、Dr. D. F. VAN SLOOTEN 君を腊葉館に訪ふた。ス博士は今回私の植物探検につきボ

植物園長が先日述べたと同じ様な條件で契約に同意を求めた、私は欣然喜んでその書に署名した。

スローテン博士は私を腊葉館の研究室に導き Dr. C. G. G. J. STEENS 君を紹介した、スチーニス君とは初対面であるが久しい前からの舊知であり私の來着を待つて居た、まだ歳の若い熱血兒らし



No 11 大風子の實 (金平)  
(*Taraktogenos heterophylla*)

く、一見弱々しく見えるが精悍な處もあり園内切つての研究家である、特に植物地理學が得意らしく、是迄澤山な業績の發表をしてゐる。

スチーニス君は私の爲めに豫め態々書棚からニューギニヤ植物の文献を取り出し机の上に堆高

く積んで待つて居た、ス君はそれを一々取り上げて私に説明した。

又私が園の研究報告の別刷を貰い度いと申込んだ處、目録を事務所から取り寄せ、このうちから選べと私にそれを渡した、私はホテルに歸つて調べることにした。

ス君は研究室の一隅に私を案内し目下着手中の高山植物の美事な圖を出して來た、爪哇人が描いたと云ふ見事な出來榮えであつた。次ぎにス君は私を腊葉館に案内した、標本の容器は防濕、防蟲の爲め、すべて黒く塗つたブリキ罐で側面に科と屬名とが記入してあつた、此ブリキの箱は高い天井に届くまでぎつしりと棚に並び、梯子で出し入れする様になつてゐた。ス君はこの標本のうち必要なものは何でも貸出するから申出よと云つた。

夕五時半、農事試験場長ポストフムス君から茶の招待があつた、約束の時間に新しい自動車を迎へに來た、市の郊外、川を渡つて小高い丘の上の瀟洒な住宅であつた、應接間兼書齋に招せられた、ギリシヤの彫刻の様な顔立ちの上品な若い夫人が持てなした、私は博多織のテーブル・クロスを持參した、辭する時、氏の近著「爪哇の羊齒」一冊が贈られた。

此一時間餘りの不在中、日昌丸に同船した青年實業家の一團が植物園見物の歸途、私をホテルに訪ねて呉れたが不在の爲め残念なことをした。

二月六日 (バタビヤ)



朝、腊葉館にスチーニス君を訪ね、昨日借りて歸つた別刷目録から選んだタイトル凡二百計り

書き取つた紙を渡し、あとから日本に郵送して貰ふ様に頼んだ。

ス君は私を相手に次から次に話を續けた、私は圖書館を一瞥させて貰つた。藏書は一ヶ年一回必ず青酸で燻蒸することになつて居り、毎日、幾冊部宛が順次に殺蟲せられてゐた。

私は約束に基きスローテン博士を腊葉館長室に訪ひ同博士の案内で郊外の林業試験場に連れて行かれた、三代目の場長である Dr. H. E. WOLF von WÜLFING 君は不在で代理の A. T. J. BIANCHI 君に紹介せられた、同氏は萬國木材解剖學會の會員であり私を既に知つて居た。

此試験場は凡九年前の建築にかゝり、元の舊試験場を知つて居る私には豫想に反し大規模のものであつた、蘭印政府が最近、外領の林業に力を注ぐに至つた意圖が窺はれる。



No. 12 林業試験場 (入口に立つ場長と筆者) (金平)

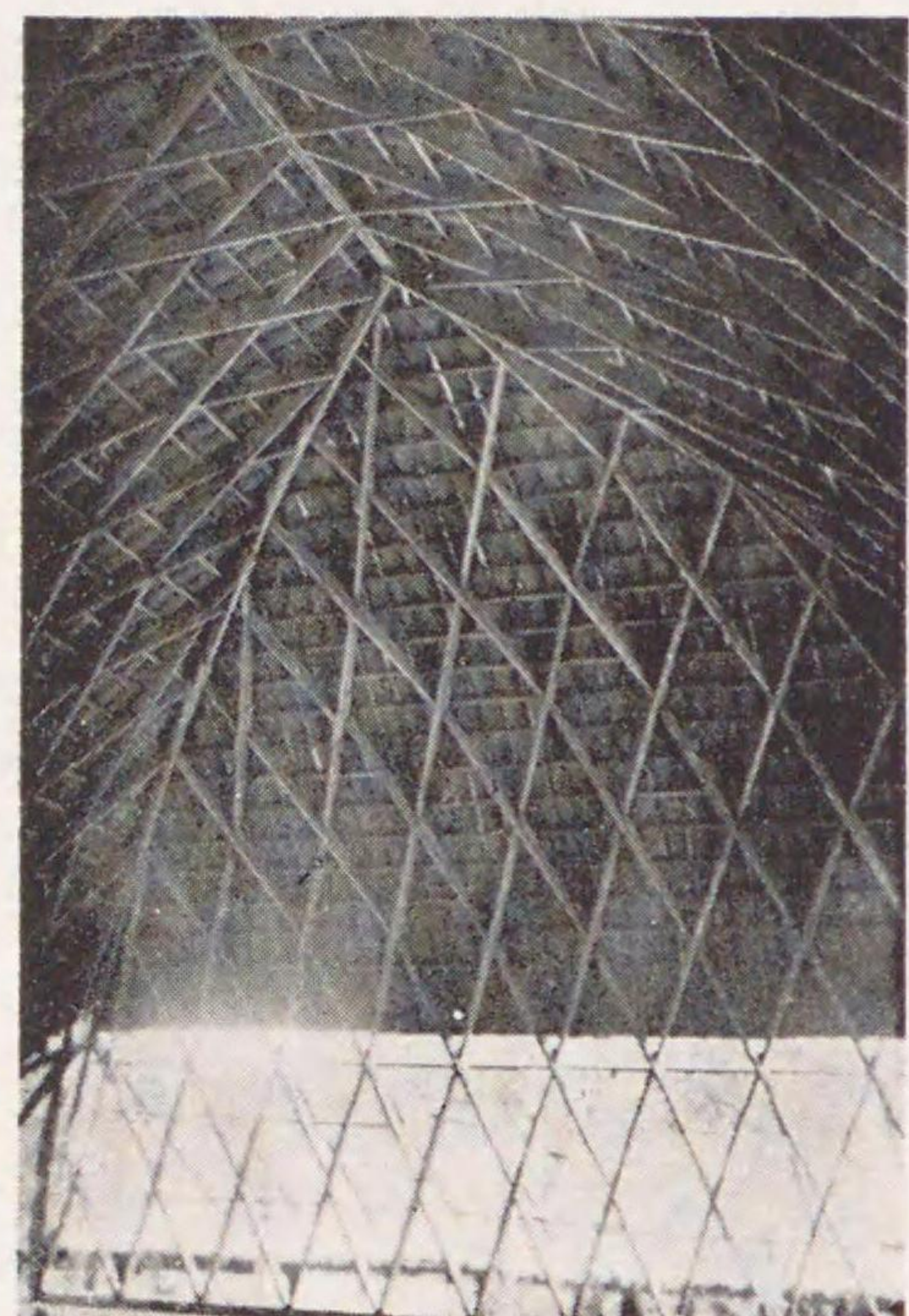
試験は造林、經理(收穫)、開發、木材工藝、水力及び宣傳の六部からなつてゐる。

ビヤネヒ技師の案内で建物の各室を一巡した、廊下に最近ニューギニヤ、ウイツセル湖の探検隊に加はつて持ち歸つた Dr. Y. EYMA 君の夥しい澤山な材鑑が列べてあつたのに一驚した、木材標本室も完備し副産物の種子類、工藝品等よく整理せられ又木材強弱試験機も中々精巧なもの

だつた。構内には又最近短材のみを用ひ、「無支柱」の可なり大きな組立家屋が出来て居た、獨逸では早くから行はれてゐると聞くが實物を見たのは始めてであつた。

試験場の視察を終へた私は一旦ホテルに戻りボ市の驛から汽車でバタバヤに歸り香田氏宅に落ちついた。

此日は華僑の大晦日で、町内が賑ふから



No. 13 短材の組立家屋 (金平)

見物せんかと勧めらるゝ儘に香田氏の案内で車を華僑街に走らせた、東京の淺草を思はせる様なシネマ館と飲食店の多い町で身動きも出来ぬ人出だつた、車を指定の場所に置き横町を歩いて見た、歩道に沿ふて夜店が並び、日用品、玩具、植木、蘭などが薄暗いカンテラの燈で客を呼んで



居た、夜の濕つぽい空気は色々の臭氣を混せて鼻をついた。更に中心街に足を運ぶと人は肩と肩とを擦り合はせながら歩いた、飯店から鳴り響く支那音楽、客を呼ぶ聲、ネオンに照らされる馬來語と支那文字の看板、そこには支那人あつて支那人なく、華僑も爪哇人も渾然融和した東亞の一民族だけだつた、我々日本人もその一要素であつて見れば誰一人指さす者も無く又振り返へる者も無かつた、そこに一人の若い華僑がブリキ製の箱を胸に懸け「救國献金」を突きつけながら泳いでゐた、私の前にも出されたが私は急に暗い氣持ちに襲はれ横を向いて避けるより外無かつた。香田氏の宅に歸つたのは夜半であつた。

二月七日 (滞在)

朝、箱根ホテルに置いた荷物を香田氏宅に運んだ、ホテルが満員、空室が無いので香田氏宅に引移つた譯、夕方、總領事館を訪問、歸途、古本屋で爪哇樹木圖譜十五卷を求めた。

二月八日 (スラバヤ)

夜の明けぬうちから豪雨、朝食を早く済ませ六時、車を命じてバタビヤ郊外、K・N・I・L・M飛行場に行つた。七時半スラバヤ行ロックヒード機の客となつた、五十米も滑走したと思ふと既に離陸、雲が低いので低空飛行が續いた、汽車から見る水田は目立たぬが空から見ると一面に廣がつてゐた。この水田の中を羊腸の様に曲がる川と直線状のカナルとがはつきり區別が出来た、

爪哇の灌溉工事は甘蔗栽培や稲作と密接な關係があり、エジプトの棉花栽培がナイル河の灌溉に依存する様に世界的に名高く又蘭印自慢の一つである。

チェリボン港に近づくとき飛行機は直線コースを取る爲め海の沖に出た、ドンヨリ濁つた海水に雲の影が浴衣の模様映つて居た、私が運轉臺に居る機關士に航空圖は無いかと尋ねたら直ぐ柵から取り出して貸して呉れた。

機はスマランに着、少憩、再び離陸、東部の丘陵地帯にはチーク林が多く傾斜地の階段畑が特に美しく見えた、やがてマヅラ島が現はれスラバヤの市街がキラ／＼と光つて來た、十一時四十分着陸、堀野ホテルの田中君が迎へて呉れた。

二月九日 (滞在)

昨夜熟睡、疲勞を恢復した。

明日爪哇を出立、ニューギニヤに向ふので終日準備に費した。



(三) 爪哇からニューギニヤへ

二月十日 (ベルランゲ號)

快晴、空氣は乾き爽快、九時、領事館に桑原領事を訪問、入口に懸つた大きな寒暖計は八十二度を示してゐた、南洋の成功者として名高い千田牟婁太郎氏が來合はせてゐた、ランゲンから飛行機で來爪したとの事。

ホテルに歸ると出立の準備に忙しかつたが會々ヴェランダでH君と名づくる一同胞に會つた、三十年近くも前、此地に來たことのある私を記憶し話は中々盡きなんだ、氏は當時海運業を営んで居たが現在は珈琲エステート百餘町を有し相當の成功を見たが最近是不況の爲め一ピクル四、五十盾もしたものが十五盾に下落し生産費が償はぬと啣つてゐた。

午後四時宿の番頭さん達に連れられ、KPM棧橋に車を走らせた、税關の荷物検査は形式だけで横付の Van Berlangue 號に乗り込むと十四個の手荷物は既に船室に持込まれてゐた。

船は三千噸位か、室は廣く清潔で眞鍮の金具がピカ／＼と磨き立てられてあつた、室にスリッパと洗面器に石鹼が備付けてないのはホテルと同じだつた。

此航路はスラバヤとマカツサーとの間、週二回の往復で別に飛行機便があるから乗客は寥々、又見送人も殆ど無かつた。船は正五時、徐々、港外に滑べる様に出た、このスラバヤ港の棧橋に横付けの豪華な船の腹に塗られた白色の太い船名と彩られた和蘭國旗とが目立つた。

マカツサーの海峡はいつもの様に静であつた、私がデツキの藤椅子に腰を掛け涼風に吹かれてゐるとダブル釦の白い上衣にサロンを着けた爪哇人のボーイが温い紅茶と菓子とを盆に乗せて持つて來た、誰しも乗船して出帆後に味ふ寛いだ一時であるが外國の船で人影の少い淋しさはそゞろに旅愁を唆るものがあつた。私が夕陽に映える斷雲をいつ迄も眺めてゐると静かな甲板に靴音高く近づく者がある、後を向くと支那人の事務長<sup>バイツァイ</sup>であつた、彼は慇懃に挨拶した後、ポケットから食卓圖を取り出して席次を相談した、私が適當に選ぶと「難有」と叮嚀に禮を云ふて去つた、これで私はこの船の待遇ぶりもわかり、安心した。

八時、夕の食堂に出ると客は十二、三人あつた、すべて和蘭人、食事も相當であつた。

二月十一日 (船中)

祖國の紀元節、六時起床、甲板に出て遙拜、東の水平線に赤い太陽が輝き、右舷に高いバリ島が見えた、船は間もなく此島のシンガラジャ港の沖に懸つた、海岸に建つKPM倉庫の赤い屋根のみ僅に目立つ寂しい町だ、島の反對側にはその主要港たるデンパサルがある。



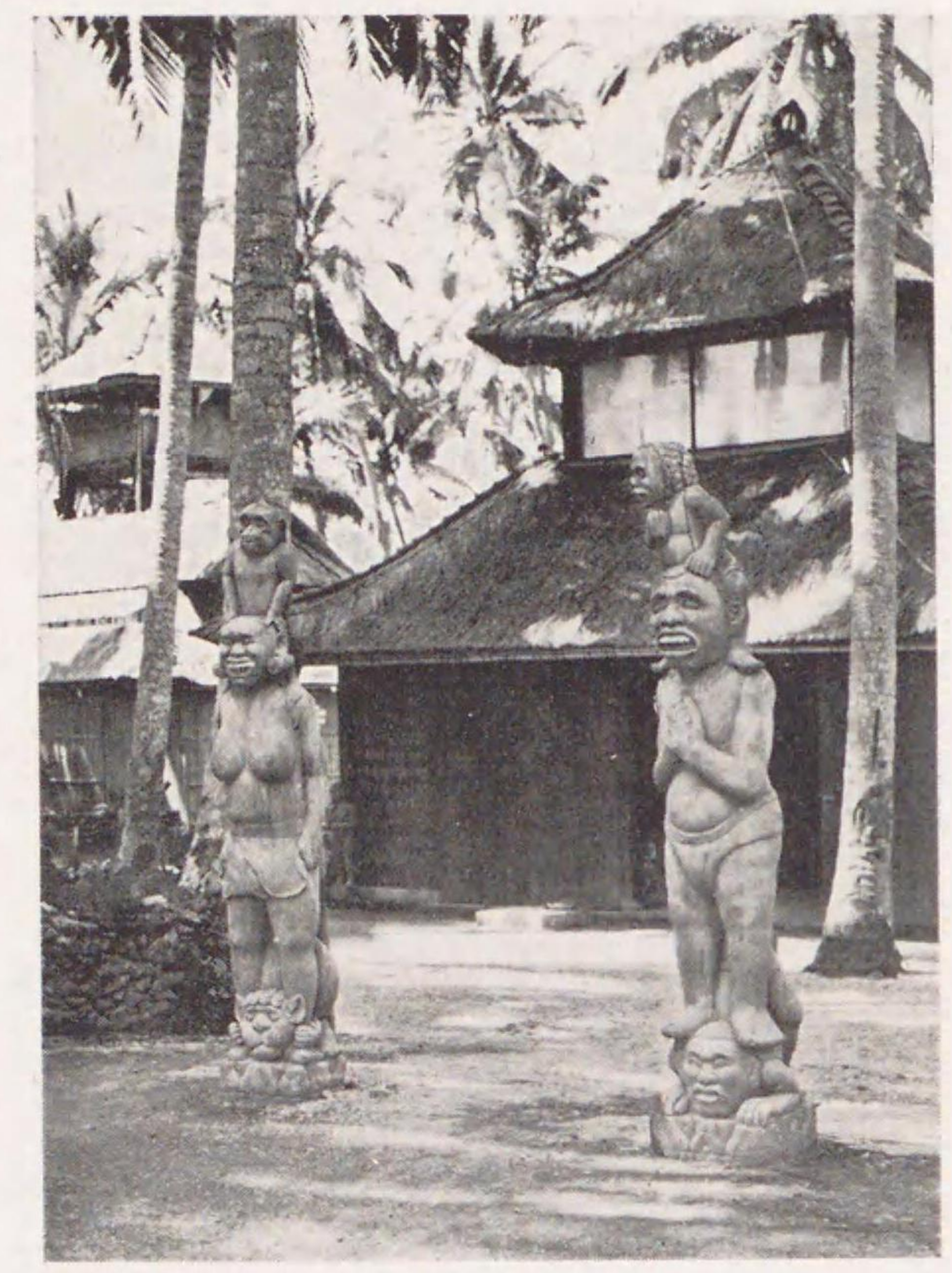
バリは傳説の島であり又迷信の島でもある、茲に蘭印唯一のヒンヅー教を信奉する土人がゐる、此土人は爪哇人に比べるとその體はズツと均齊がとれ、風貌も優れてゐる、又その膚色が白いので知られ婦人は如何に盛装しても結婚と宗教儀式の外は何時も乳房を露出し、その古典的な舞踊は名物の一つとなつてゐる。



No. 14 バリ島の踊子 (繪葉書)

東西を走る脊梁山脈は火山質からなり、頂上まで樹木が鬱蒼と茂りその裾野は一面の耕作地で椰子の間には人家が見える。コブラ、茶、煙草が出来、家畜も盛んでその灌漑工事は蘭印中この島の土人程巧みなものは無い。

村の寺院にリングムの彫刻の多いことは英領印度と同じで、その木彫は藝術品として優れ海外にも聞え又砂岩の彫刻に見るべきもの多く、織物にも一種獨特の手法がある。現今は爪哇から飛行機の便りもあり見物人が絶えぬ、今私の乗つて居る船は碇泊の時間が短いので上陸することが出来ず、甲板に賣りに來た繪葉書を求めて見物を諦めた。



No. 15 バリ島の彫刻 (繪葉書)

十時に銅羅が鳴り救命器着用の練習があつた、私の着けた救命器は小兒用であるとして一等運轉手から注意せられ、着け換へるとダブダブであつた。

正午を過ぎると全くの無風、海は油の様に蒸し暑いキャビンに入り體を横たへヂツと暑さを凌いだ。

二月十二日 (船中)

六時離床、朝の珈琲を斷はる、

今日は體の倦怠を覺える暑さ、甲板に出ると幽にセレベス島を望み小さい島があちこちに現れた、霞の間からマカツサーが浮いて見え水先案内が既に舷側から上つて來た。

キャビンの荷物を整理してゐるうち船は棧橋に横付になつた。此同じ棧橋にはニューギニヤ行



の Van Imhoff 號が黒煙を上げて出帆の準備中であつた、私は荷物の積み換へを事務長に頼んで一先づ下船した。

棧橋には南太平洋會社の戸澤氏が私を待受け一通の電報を差出された、それはスラバヤの堀野ホテルからのもので、意外にも私の宿の勘定の誤算から餘分に拂ふた返送金であつた。

私は戸澤氏に案内せられてその事務所を訪ひ少憩の後その自宅に行つた、住宅街の靜な社宅で夫人の心を罩めた午餐を供せられた、

私は食後、一時の微睡の後、この町在留の刈底氏の案内で市中を見物した、狭い町とは云へセレベス島第一の都で、殆ど華僑の商店によつて占められ物資の豊富を思はしめた。

五時、戸澤氏の宅を辭しイムホック號に乗り込んだ、本船はマカツサーを基點として蘭領ニューギニヤの東端、ホランジャを往復する月一回の定期船であり、前のベルランゲ號よりは一層大ききが船客は次第に減つて來た。

二月十三日 (船中)

朝起きがけに冷水浴を試みた、タンクの小さい汲口から眞鍮製の柄杓で水をかぶつた、別にシヤワー・バスもあるが私は好かない。

涼風の吹く洗ひたての甲板に出て朝の珈琲を飲んだ、爪哇の珈琲は日本の醬油を思はしめる黒褐色のエツキスと温い牛乳とを盆に載せて持つて來る、各自はその好む濃度に牛乳を加減して混ぜる、香りが高く亦味もよい、然しその容器が大きく一杯飲むと朝の食欲を抑制する。

島影が少しも見えぬ、海の色が次第に美しくなつて來た、小波が立ち、涼しい微風が吹く爽々しい朝だ。

私は今食堂の一隅にあるデスクで此日記を書く、スラバヤから放送の音楽が美しいメロデーを送つて來る、會々、船長が私の傍に來た、

私「お早う、船長、この船はニューギニヤ通ひの船としては立派ではないですか」

船長「いや、もう古い船なんです、廿六になつた老嬢なんです」

と答へた。私は私の乗つた船名の Van Imhoff や Van Berlange はどんな名かと訊くと

船長「蘭印總督の名をとつて付けたんですが、近頃の新しい船にはつけません」と説明して呉れた。

今日は久しぶりに家信を書く、私の傍には夫妻の乗客がその可愛い娘と戯れてゐる。和蘭人の乗客と云へば何れも偉大な體格を持つてゐるのに氣付く。二、三十年前頃は和蘭人は一般に運動、スポーツを好まず、朝は起きぬけにパジャマのままの珈琲、八時に朝食、午食後は二時頃から四時まで午睡、そうして茶をすますとヴェランダで大きな籐椅子に横はり新聞を見る、七時に食前



のアペタイザー、八時夕飯、これが一般の生活の日課であつたが今日はテニス、ゴルフ、水泳などが廣く行はれ、又運動とは云へぬも夕方のドライブ、自轉車など非常に盛んになつた。  
正午頃、船はブートン沖を通過、夕刻、空模様はドンより曇る、夕飯前の乗客はアルコール飲料をとるので何と無く陽氣になる、中に婦人達が傍若無人振りを發揮するのが苦々しい。

二月十四日（船中）

モルツカ海は波靜で朝から微風が甲板を撫で心地がよい、午後の睡から目が覺めて何氣なくキヤビンの窓から外を覗くと近くに島が見える。海岸の椰子林に沿ふて人家が點々と並び倉庫らしい大きな建物が立つてゐる、ボーイに「茲は何處だ」と訊けば「アンボンです」と云ふ、アンボンには明日着くのだと航路表（航路表）を信じて居た私には意外であつた。

甲板に出ると船はもう速力（スピード）を落して靜な灣内に弧線の波を残しながら徐々に這入つてゐた。美しい島が目の前に現はれ見覚えのある白、赤の建物、彩られた森、アンボンに違ひない、船はやがて棧橋に横付けになつた、埠頭には出迎へと、見物人で澤山な土人が群がり甲板には乗客が下船に忙しく何となく騒々しい空氣が一面に漂ふて居た、私は船室に入り荷物を整理した、何處ともなく「立てよいざ立て、主のつはもの……」の讚美歌の合唱が埠頭の群集から夕暮の空氣を流れて聞えて來た、此船に乗つてゐる救世軍の司令官を出迎へる一團であらう。

私は混雜してゐる甲板に立つて暫らくこの風景を見てゐると、六十歳に近い日本人が私を見付けて挨拶に來た、私がマカツサーを出帆する時打電してあつた北野商店主、宇津美氏だ。同氏から今夜は自分の宅で茶漬の仕度が出來てゐるから見物が下船してはどうかと勧めらるゝ儘に埠頭に降り、群衆の間を抜け夕暮の町を歩いた。道すがらアンボンの事情を聽くと私が大正二年五月、南洋巡航の軍艦に便乗して此處に寄港した時、一夜の宿をして貰つたのが今案内せられてゐる宇津美氏の宅であつたことがわかつた、其頃、氏はドボに行き不在中であつたが氏の奥さんの芳子さんは何呉れとなく親切にして呉れたことを覚えてゐる、私が同氏の店の入口に這入ると宇津美氏はそこに待ち受けて居た芳子さんに、

「矢張りあの金平さんであつた」

と云ふ。

芳子さんは私を一瞥するなり、

「あゝさうだつたか、矢張り……まあ歳をとんなさつた」

と嘆聲を上げる、

主人は

「何んだ、自分の年を忘れて」



と寤める、今私は前に立つて居る背の低いヅングリ肥つたサロン、カバヤを着けた芳子さんの顔を見入る。

思へば今からもう廿八年も昔のことだ、私は軍艦淀の薄暗い隅に、毎夜水兵が吊して呉れるハ



No. 16 津久美一家と筆者 (金平)

ンモツクに寝たが朝起きると背中から出た汗は此ハンモツクをじつくり濡らして居た。それ故軍艦から陸に上つて寝る事は沙漠のオアシスであつた。當時軍艦淀に便乗を許されて居た者は農商務省囑託井上雅二氏、陸軍參謀本部歩兵大尉谷壽夫君（今は中將）そうして臺灣總督府技師であつた私の三人で谷君と私とが宇津美氏宅の二階に泊つた、莫産を敷いた駄々広い室で芳子さんの料理したおいしいライスカレーの御馳走を谷君と一緒に食べ二人は同じ蚊張の中に寝た。翌日、同氏の宅を辭して去る時芳子さんから緋色の玉極樂鳥の剝製を二羽宛土産に貰つた、この鳥は今もなほ私の家に飾つてある。

私は今店の裏の居間でもあり食堂でもある廣い室に案内せられた、そこには卓子や椅子の外に幾つかの戸棚があり、熱帯魚の泳ぐガラス張りの大きな水槽もあつた、この室に接して臺所が見える、私は久し振りに親類の家にでも來た様な寛いだ気持ちで寝椅子に體を横たへた、天井から長く吊した一つの電燈は甲斐々々しく働く芳子さんの顔を色々の角度から照した、私は椅子に寝たまゝ當時廿四歳で愛くるしかつたその面影を偲んだ、芳子さんは、

「もう齒は抜け、髪は薄うなりました」

と啣つ。やがて夕飯の準備が出来、芳子さんの御給仕で丸卓子を囲み、往時を語りながら食事をした、簡素な御惣菜なのが何より嬉しく青い漬物を食べる様に食べた。一休みして主人の案内で市内を散歩がてら見物した、薄暗い町で、こゝでも華僑の店が並んでゐた。氏の宅に歸ると日本からの放送、九時四十分の時報、ニュースを内地と同じ氣分で聴く。十時船に歸り冷水浴の後、床に入ると酒を飲んで歸船したらしい男女の船客の痛高い會話が甲板の上で何時迄も續けられ安眠を妨げた（「文藝春秋」昭和十五年五月號登載）。

二月十五日（船中）

碇泊中の船は何か物足りない感じで却つて安眠が出来ぬものだ、五時半目が覺めた、曇つた空は太陽が高く上ぼるに従つて晴れて來た。





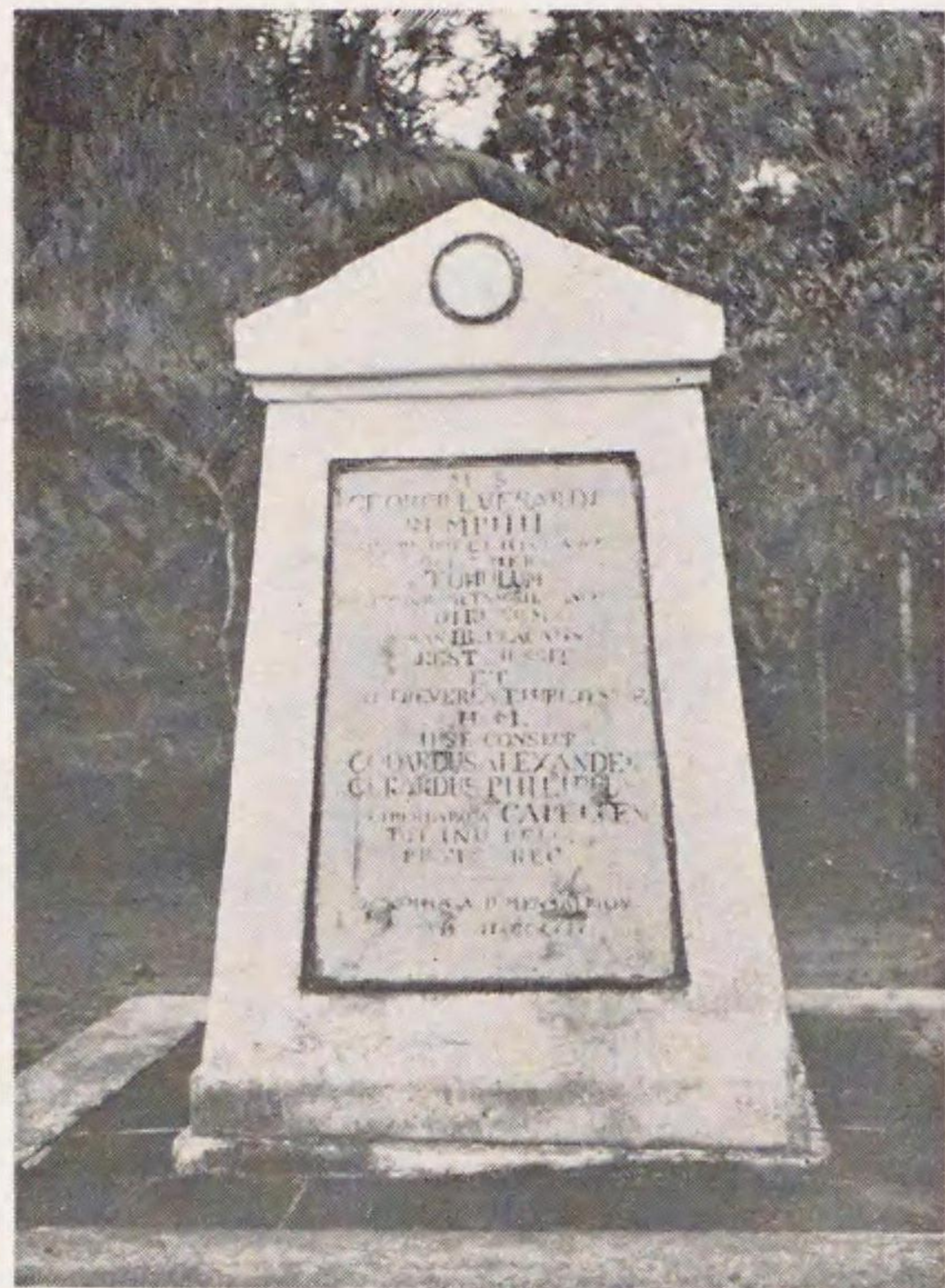
No. 17

盲目のランヒュス

(或版畫)

六時半、朝食を済ますと宇津美氏が船まで出迎へに來た、一旦同氏の宅に落ちついた後、私は氏の案内で先づランヒュス (G. E. RUMPHIUS) の墓に詣でた。

ランヒュスの一生は餘りにも悲惨であつた、彼は一六二七年獨逸に生れ、蘭印會社の社員とな



No. 18

ランヒュスの墓

(金平)

り廿七歳の時アンボンに來り動植物の採集に従事し、晩年「アンボン植物本草誌」の著述に着手した。不幸にしてその完成を見る間際に失明し、間もなくその夫人と忠實なる助手との死別あり、しかもその原稿は一六八七年の大いに圖書と共に焼失した、然し彼は再び稿を改めて遂に之れを完成し、一七〇二年六月十五日、此地に歿した。

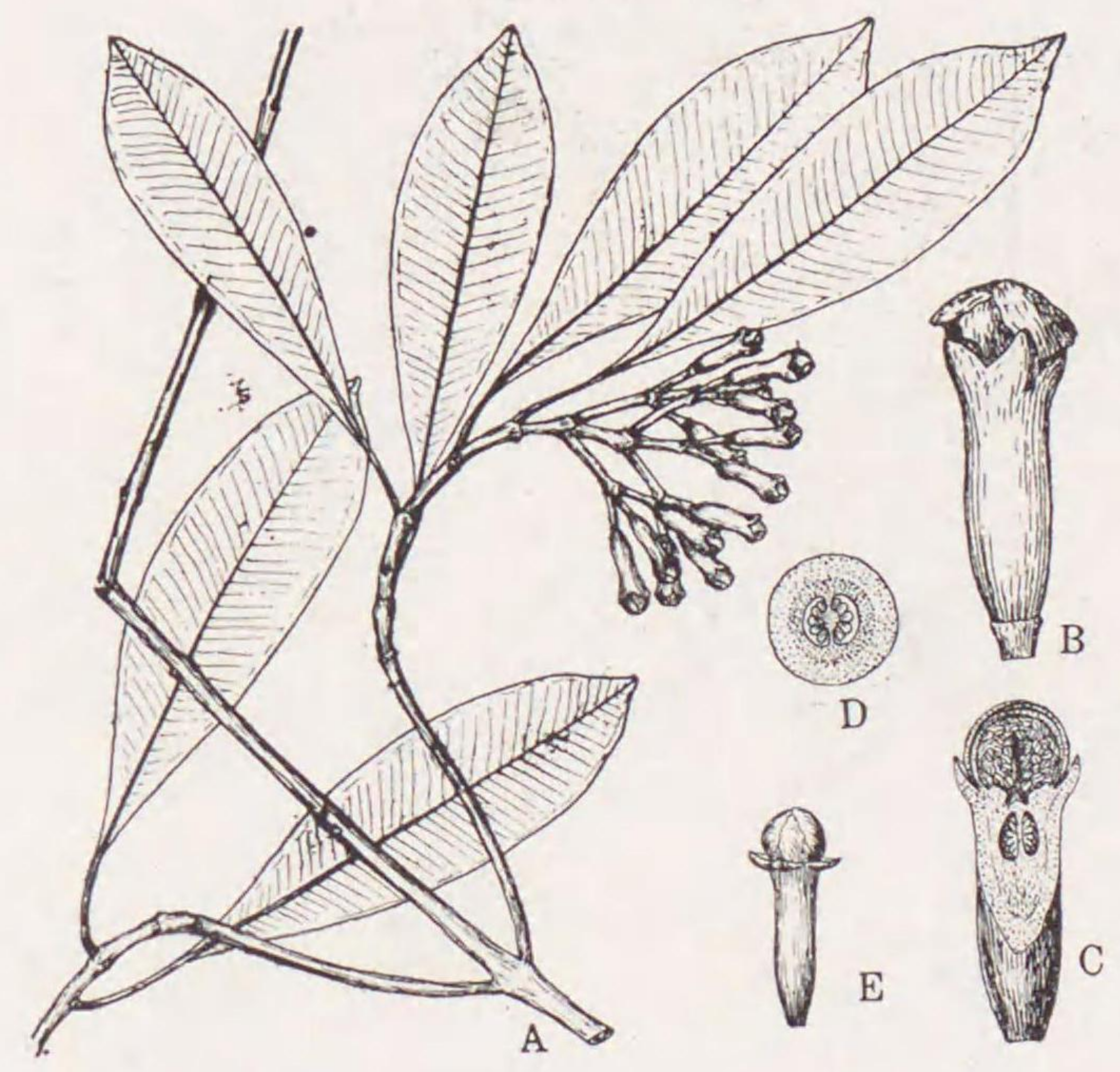
先年、私がこの地に來航した時にもこの墓を訪れたが今もなほ私人の邸内にある、家人の許可を得て門を入ると右手の庭の樹の下に將棊の駒の様な形で白く塗つた墓標が立つてゐた、この墓はランヒュスが居住した邸宅内にあるが今建つてゐる家は新しい別のものである、又その位置は



實際遺骸を埋めてある處から多少離れてゐると云はれる。此墓の出來たのは十九世紀の始めでその碑に刻んだ奇妙なラテン文は心ある人から惜まれてゐる。

私はこゝで記念の寫眞を撮り門前に待たせた自動車でアンボン理事官々邸を訪ふた、廣々とした前庭のある平家造りの静かな邸内には美しい鉢植が並んで居た、理事官はニューギニヤへ出張不在中で夫人に面會した。私は更に官廳に副理事官を訪ねたが是れ亦不在であつた。

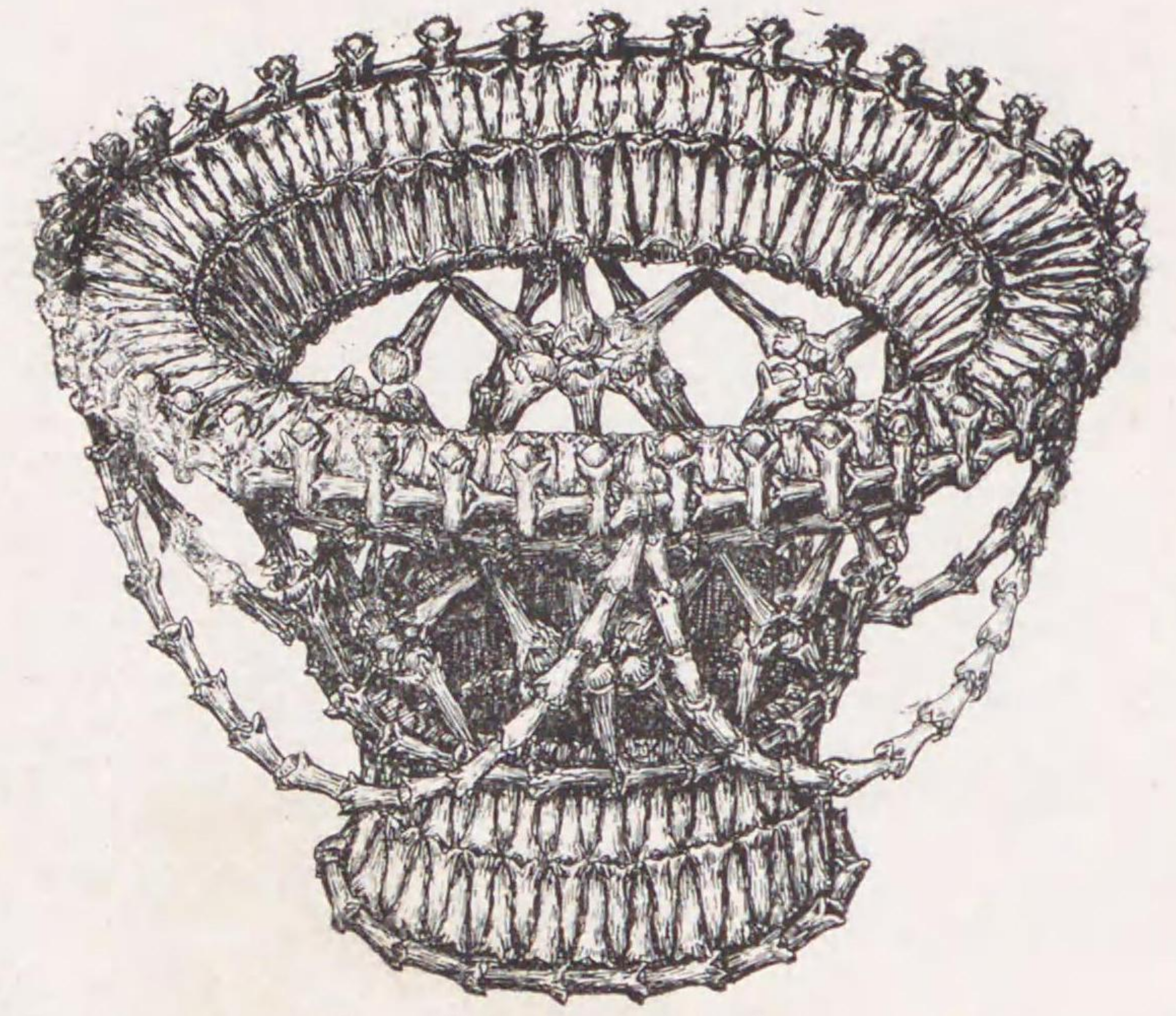
私はアンボンの市街をぬけ郊外にドライブを試みた。アンボンは永い間、モルツカ群島の首府として榮えたが今



No. 19 丁香 (原圖)  
A枝 $\frac{1}{2}$  B丁香なる蕾 $\times 1$  C同縦斷 D同横斷  
E丁香 $\times \frac{2}{3}$

は活氣の無い寂しい町に過ぎぬ、町はづれの椰子林が害虫の爲めであらう一面に枯れて居たのが一層哀れを感じさせた。

この島は肉豆蔻ニッケツグを産するバンドラ島と共に丁香チロウユウサの産地として古くから知られてゐたが、現今その主産地はアフリカの東海岸ペンバ、ザンヂバルの兩島に移り、此島ではその産業は成立たず只



No. 20 丁字細工の花籠 (原圖)

衰退の一途を辿るのみとなつた。だがモルツカ島産の丁香は支那では紀元前から知られ歐洲に紹介せられたのは八世紀である、マルコ・ポーロの見聞記にはその原産地を爪哇とした。丁香はこの島の外にタルナテ、チドール、バチヤン、マチヤン等にも産するが始めてその正確な産地を知つたのはヴェニスの一商人ニコロ・コンチで十五世紀中葉の頃である。一五〇九年、喜望峯を巡航して印度カルカッタに來たワスコ・ダガマは一五一一年、その部將アントニオ・アブリユを特に此島に派遣した、十六、七世紀の頃丁香の聲價の高かつたことが想像せられる。私は嘗て正倉院御物中にもこの丁香を拜觀したことがある、これは支





No. 22 葡領時代のタルナテ港(クロフトン氏(「香料島より」)

「昨夜あの婦人が晩くまで甲板の上で大きな聲で談したり、笑つたりしたんで安眠が出来なんだ」  
と告げた、すると船長はその紅い着物の婦人に近づき何か話した様だつた、婦人は直ぐシガレットを持った手をさし上げ私を見ながら爆笑する、私も手を振つた、この紅服の婦人はタルナテ副理事官夫人で本國に休暇を取り今歸路にあることを後に知つた。  
日が暮れるとサルンでピアノが弾ぜられ、ダンスが始まつたらしい。十時ベツトに入る、夜中烈しいスクオールでその飛沫が屢々窓の中に這入り、安眠を妨げた。

二月十六日 (船中)

船は未明にスピードを落した、窓外を覗く



No. 21 イムホツフ船上の乗客、左から二番目タルナテ副理事官夫人(金平)

目が覺むれば烈しいスクオール、船は今ブルーとセーラム島の間を北上してゐる。

私はデツキの椅子で讀書して居ると船長が近くやつて來た、私は甲板の隅に置いた卓上ラグビーの遊戯をしてゐる紅い着物の婦人を顎で指しながら、

那を經由して舶來したものであらう。

丁香又は丁字はテウジノキ (*Eugenia caryophyllata* THUNB.) の花の蕾を乾燥したもので、その形が釘に似てゐる所から佛語の釘から轉訛した *cloue* が用ひられ、日本の丁字もその形から來た名稱に外ならぬ。現今は丁香を蒸溜して丁香油を取りヴァニリンの製造に用ひその用途は中々廣い、日本では刀の錆止めとして廣く用ひられてゐる。又丁字細工はアンボンの名産である。

私は宇津美氏宅に戻り芳子夫人から數々の土産物を貰つて船に歸つた。今私はサロンに腰を掛け、日記を書く、窓外のアンボン港が畫の様に見える(宇津美夫人の名を逸す、芳子は假名)。

午餐の食堂に出ると乗客が變つてゐた、午睡から



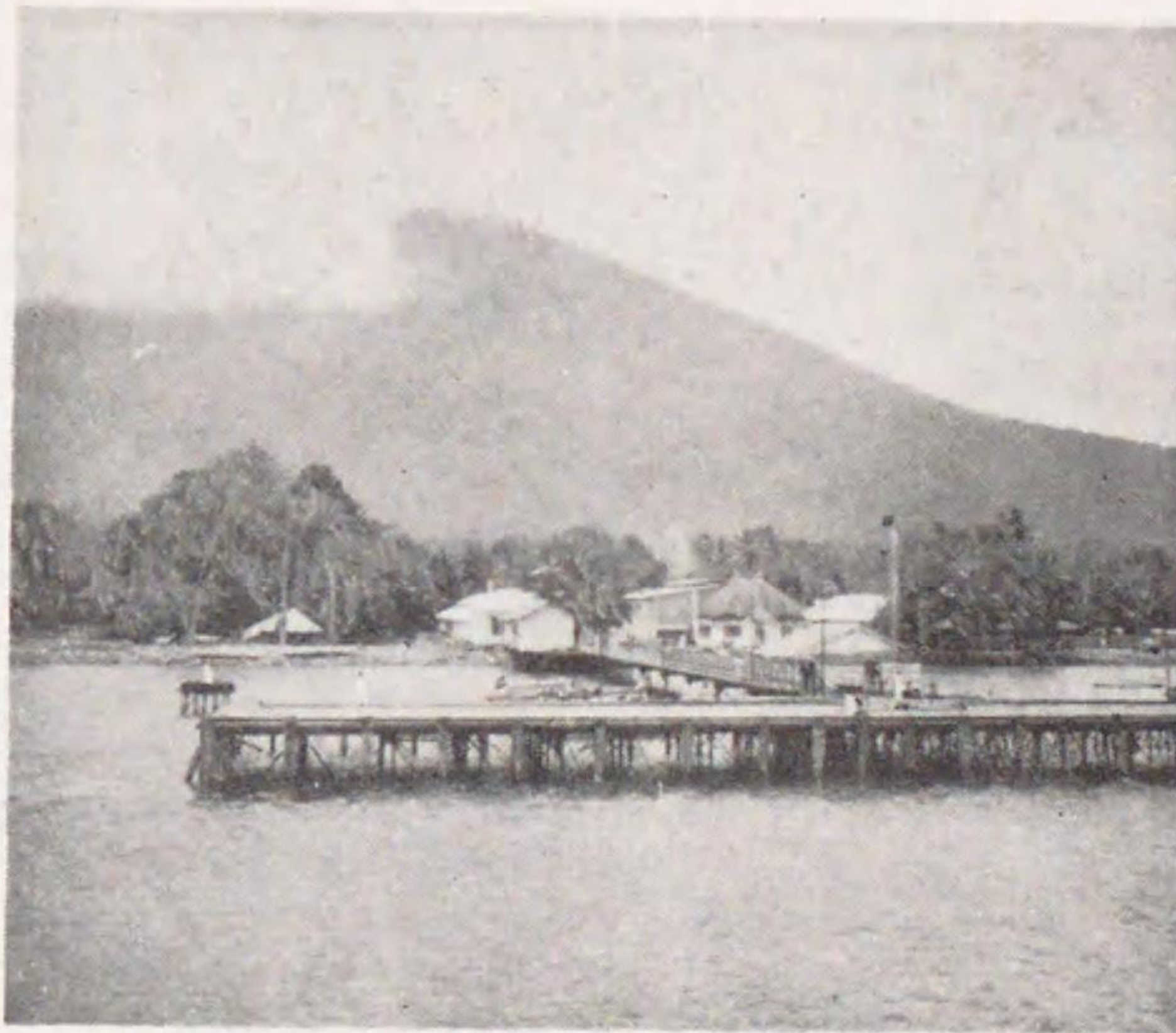
と島が近く、静な海に丸木舟が右往、左往に走つて居た、バチヤン島に着いたのだ、海岸の椰子の葉蔭に人家が間ばらに見える。

私は朝食後ランチで上陸して見た、海岸通りに點々列ぶ人家の大部分は華僑の商店であつた、

風の無い蒸し暑い天候で附近だけを散歩した、道路がよく清掃せられてゐた外何の印象もなかつた、ワレースが茲に上陸したのは一八五八年、十月であつた。元は丁香の産地として有名であつたが、現今はどうであらうか。

八時過ぎバチヤン島を出帆、左右に全部密林で覆はれた小島が続いた、十一時頃、船は又停まつた、ボートが卸され附近の島から出るコプラを積み取つて來た、土人が丸木船で積み取つて歸つた荷物に TOYO COTTON と捺した綿布の幾巻かが目に就

く、綿布は彼等の必需品とは云へ僻陬にある未開の一小島にも日本品が浸潤してゐるのを見てその根強さを考へさせられた。



Nö. 23 タルナテ港棧橋. タルナテ火山は(金平)雲に隠れてゐる

二月十七日 (船中)

船がタルナテ港に近づくと、この附近の小さな島々に寄港しつゝコプラを積み取つた。

秀麗な高い圓錐形をした名高いタルナテ山(一、七一五米)とチドル山(一、七三〇米)とが



No. 24 肉豆蔻の實を採るには損傷を防ぐため竹程の先を採るに(金平)

見えて來た、頂上まで鬱蒼たる森林らしい、タルナテ山は一昨年五月爆發して灰を降らせた、チドルは一時ニューギニヤを支配したサルタンの居た處である。此二つの同じ形の島は船が迂廻にするにつれて左右に互に現はれ、屢々取り違へた。

船は狭い間を何時迄も進んだ、沖に

かゝつた二、三の官船に近づいた後、愈々港に這入り棧橋に横付けとなつた。

船から下りると田山、加藤、長谷川の三君が私達を迎へた、一同は二臺のベンリ(サド)に乗り、港から近い江川俊治君の宅に落ち付いた。同君の南洋に於ける長い奮闘の生活は餘りにも有名であり、又屢々紙上にも記載せられたのでこゝに紹介することを省略する。



椰子林を抜け山坂を走ること凡半時間、タルテナ舊火山の池を迂廻してその栽培園に着いた、



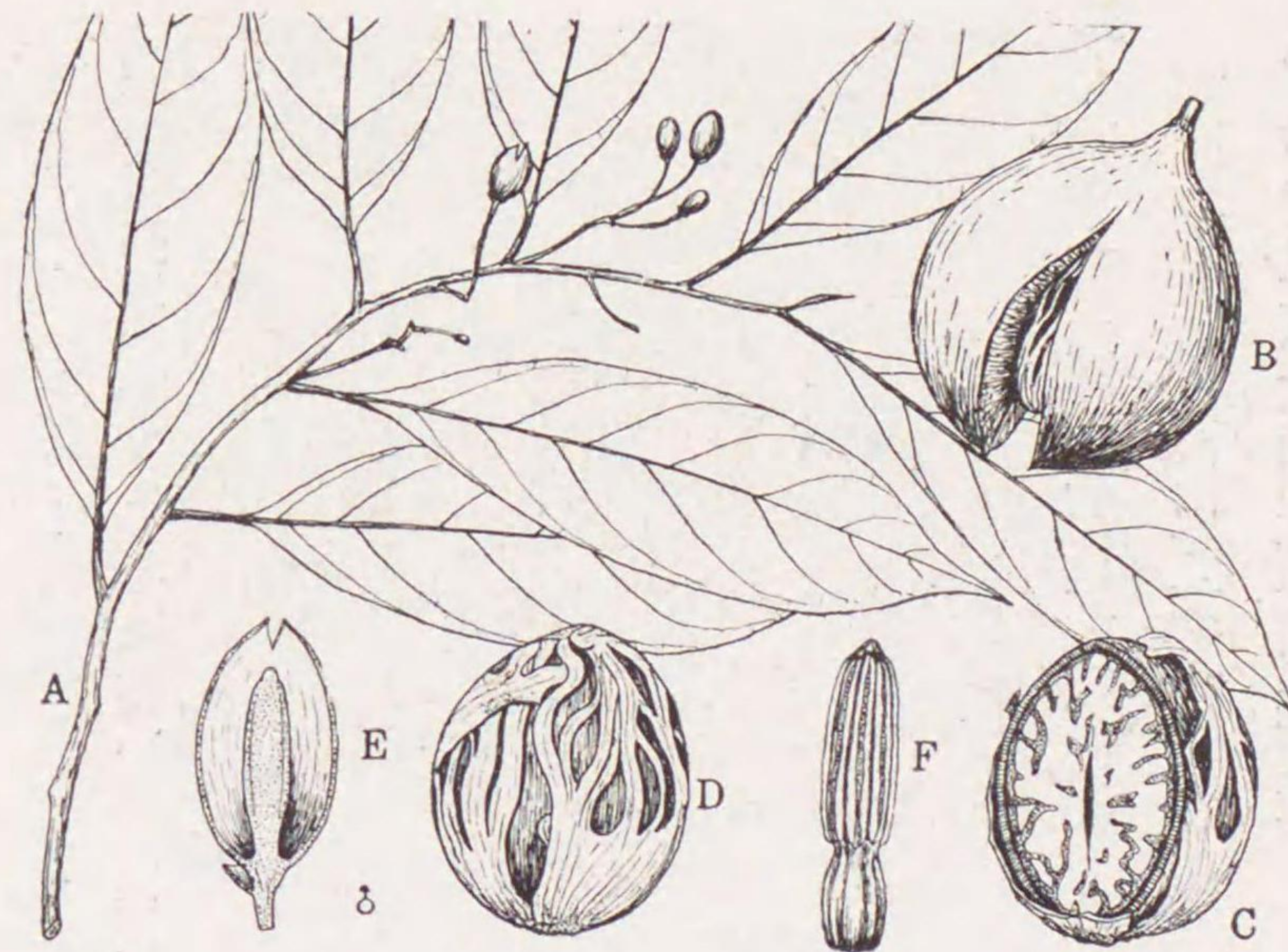
No. 26 肉豆蔻園 (金平)



No. 27 肉豆蔻花の陽乾 (金平)

私は江川君の案内で肉豆蔻の栽培園を見る爲め車を郊外に走らせた。

れ、種子と共に香味料、薬用に使はれてゐる。



No. 25 肉豆蔻 (原圖)  
A 雄花の枝 B 實×1/2 C 外果皮を去り縦断 D 外果皮を去りたる肉豆蔻とメース E 雄花×2 F 雄蕊

タルテナ島の産物は丁香と肉豆蔻である、後者は前に述べた様にバンド島がその原産地であり、歐洲に紹介せられたのは丁香よりも三、四百年遅れて居た、蘭領となつてから一時専賣制が布かれたが種子は何時の間にか密輸出せられその制度は成功するに至らなんだ、肉豆蔻は種子の胚乳と假種被メイスとに芳香があり、假種被は肉豆蔻花と呼ば

タルテナ港は十六世紀、葡領時代には一時榮え、ニューギニヤから出る極樂鳥、ダマル、マツソヤ樹皮の集散地として又香味料たる丁香の産地として繁榮を誇つたが今は寂荒れ、市内と郊外とに残る砲壘が當時の佛を遺すのみで貿易港としても亦政治の中心としても大なる價値は無い。

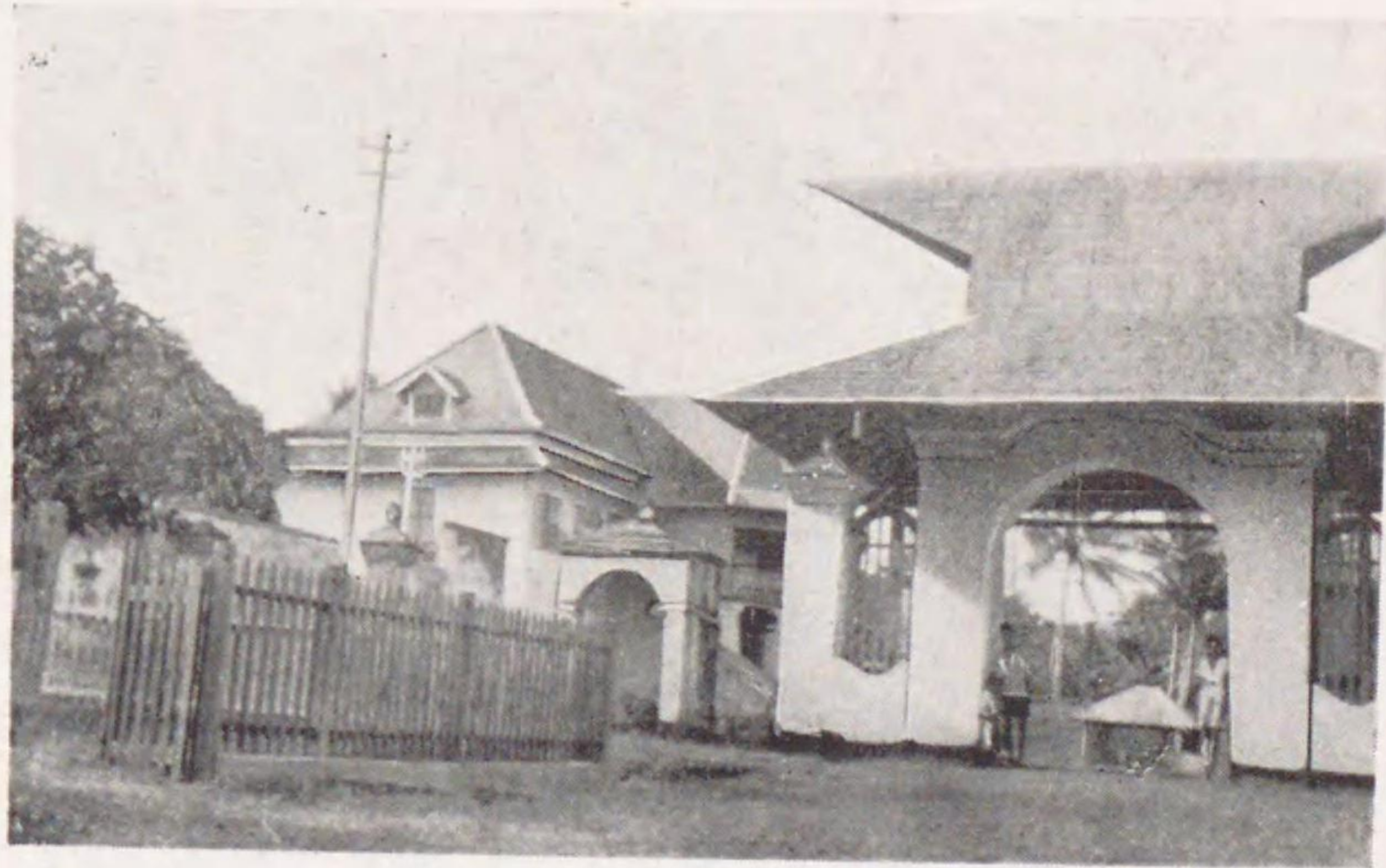


通直な大きな肉豆蔻林が海岸に沿ひ、前面にはチドル山が聳え立つ勝景の地であつた。

園主は不在で代理の者が肉豆蔻花の乾燥室に導き火力と天日乾燥とを見せて呉れた、又肉豆蔻の摘果には竹程の端に籠を付けたものを使用し地上に落下して傷まぬ様にしてゐた。

歸途は市街地を迂廻した、兵舎は舊城の中につくられ、小高い丘にはサルタンの王城が見え、不相應に大きな門の前には番兵が銃を持つて立つてゐた、この王城の下に並ぶ土人の家は昔の旗本屋敷でサルタンのみは今も猶、蘭印政府から貰ふ年金で有福に生活してゐると云ふ。

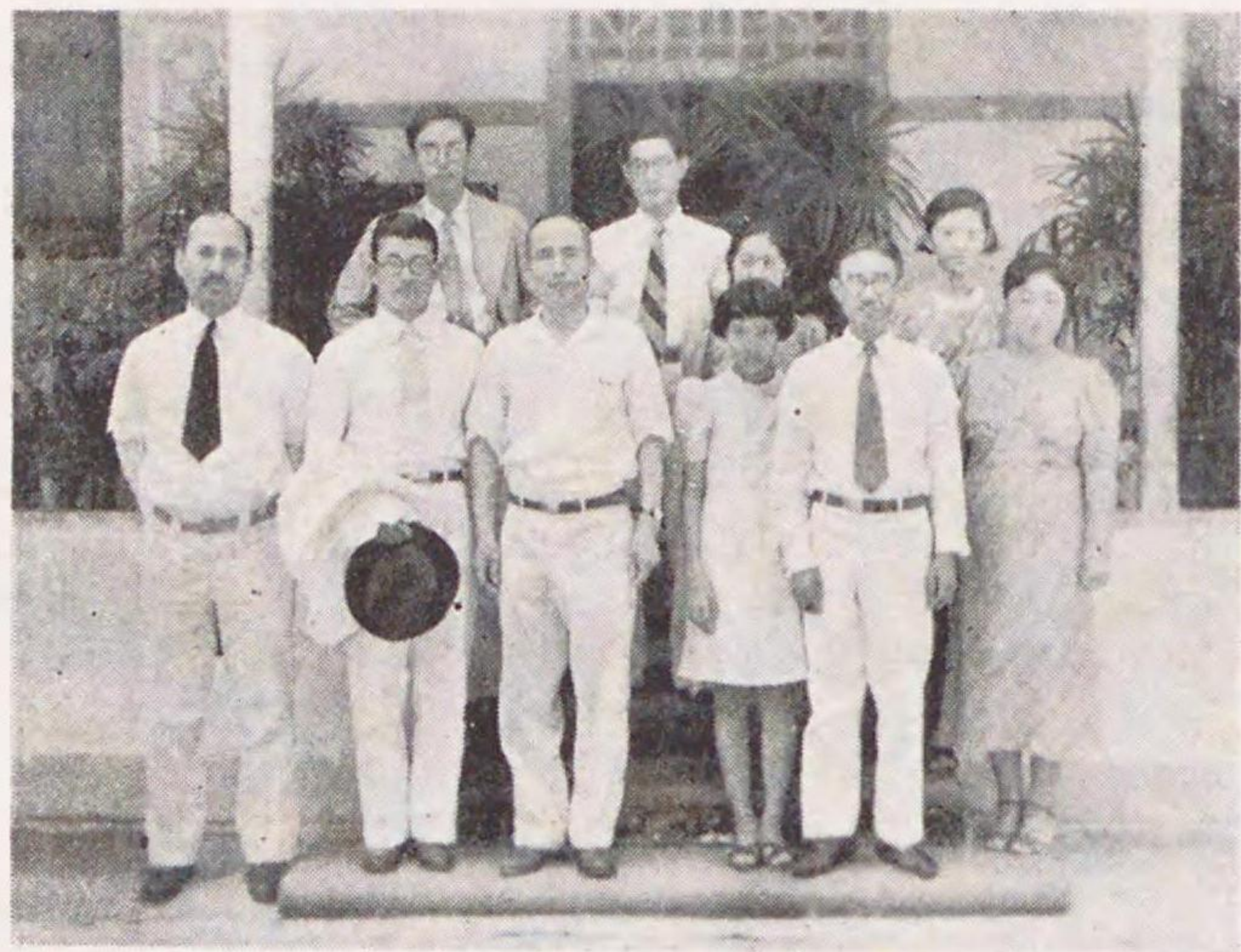
ワレースは一八五八年、一月茲に來島し、王宮、王座の華麗と驚くべき多くの黄金が使用せられてゐるのは何れもサルタンの獨占した香料貿易により獲得したものと「馬來群島」に書いてゐる。



No. 28 タルナテ、サルタンの王宮 (金平)

私達は江川君夫妻、令嬢達から色々の款待を受けた、夕五時出帆に間もないので急いで記念の

寫眞を撮つて車を棧橋に走らせた、夫人が特に體を大切にして下さいと、自動車の窓から挨拶した言葉は長く耳に残つた。



No. 29 江川氏一家と一行 (金平)

船はタルナテ出帆後、ハルマヘイラ島を左舷に見て南下した、冷い風が吹き快適であつた。

二月十八日 (船中)

昨夜は熟睡、朝食後、甲板の椅子で昨日同船した三君を加へて圓卓會議、旅行の打ち合せをした。

風波高く、船が動揺した、スラバヤ出發以來始めての經驗であつた、乗客もタルナテで下船し甲板は益々寂しくなつた。

午後、船はダンピール海峡に入つた、兩側の島の森が間近に見え、風がパツタリと止み急に暑くなつた。

夕飯前の一時、船客が甲板の椅子で涼を入れて居ると

汽笛が突然、夕暮の空に高く響き

「ソロン！ソロン！」



の聲が聞えた、

欄干に倚り、暗い海上を見詰めると遙か遠くの森に燈火が微に見えた、船はスピードを落して更らに第二、第三回の汽笛を鳴した、森蔭の燈火が増した。間も無くランチが銀波を蹴立て、霧進して来た、何時の間にか丸木船が蝟集し出迎人がドヤ／＼と甲板に上り感激の挨拶が交はされて居た、ふと舷側の丸木舟を見下ろすとそこには馬來土人と全く異つた、色の黒い頭の髪の縮れた土人が電燈に照らされてゐた、愈々ニューギニヤに來たのだ。

ソロンは近頃開發せられた油田バブに至る重要港で急激に發展をした、ニューギニヤの鳥頭フオーヘルコップの北部にある開港であつたが昭和十一年閉鎖せられた、ソロンと反對側の海に面したバブまではソロンから定期船と飛行機の便とがあり、船によると三日、飛行機なれば三時間で達することが出来る。

船は晩くまで荷役を続け、一晚碇泊することになつた。

二月十九日 (船中)

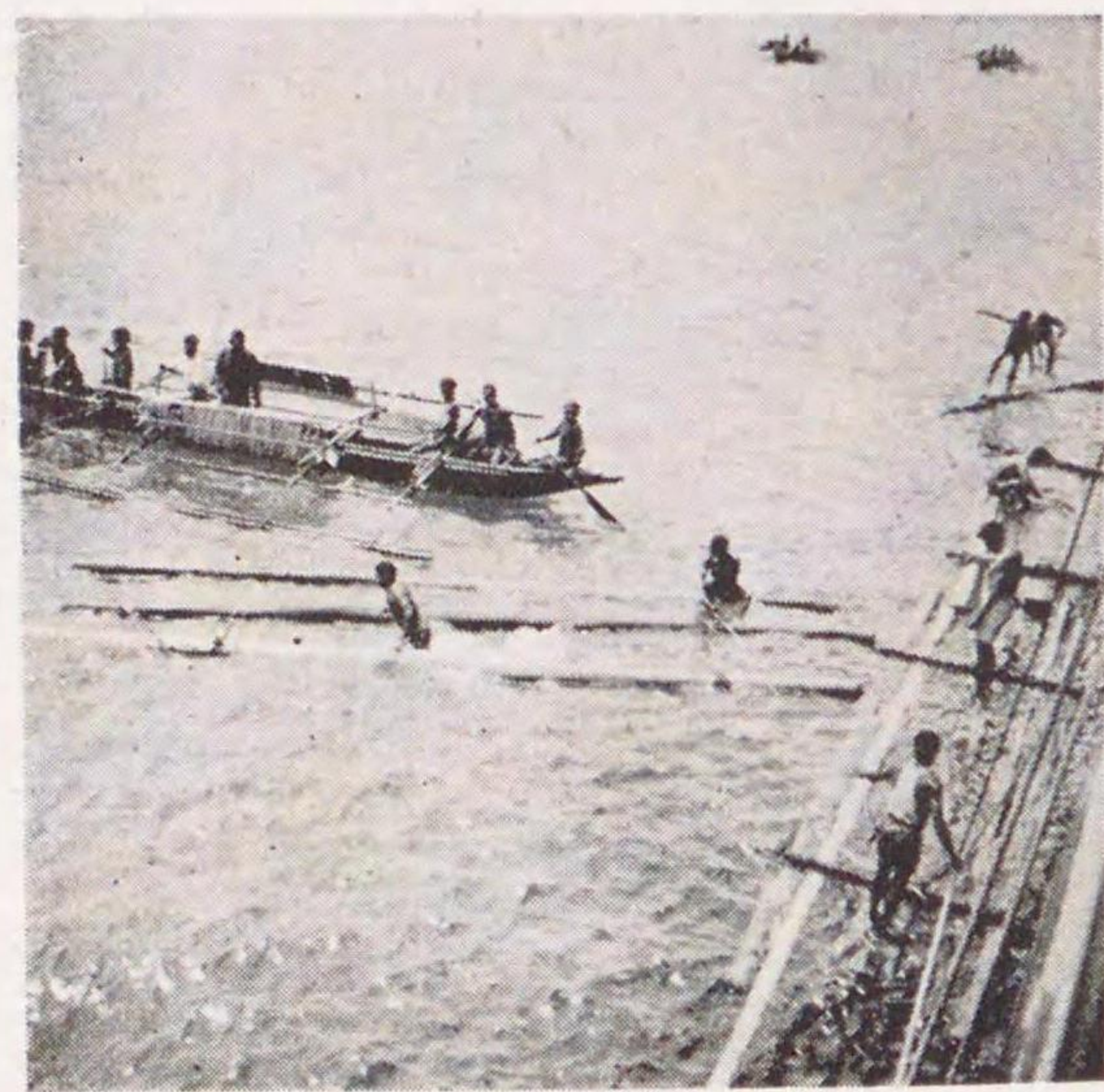
朝、甲板に出てソロン港を眺めると海は波一つ無い鏡の様な静けさであつた。灣内には三色旗を翻へした小汽船が碇泊して居た、多分官船であらう。

海岸に立ち並ぶトタン屋根が強い太陽の光を斜に受けて光つてゐた。

何處からとも無く大きな丸木舟三艘に二、三十人もの縮毛の黒い土人が大聲で何か叫びながら太鼓を鳴し、櫂を揃へて水を掻き波を蹴て船の周圍を廻つた。ソロンに新任したコントリールを歓迎し敬意を表するのだとわかつた。



No. 30 ソロン港内、新任のコントリールを迎へるバブア (金平)



No. 31 鐵木の積み込み (金平)

船は七時半拔錨、密林で茂る無人の低い島々の間を通つた、空は晴れ、微風あり、快適であつた。

一時間も航海したと思ふ頃エフ・カペルと云ふ島の沖にかゝる、低濕地らしい島で人家一つ



見えぬがどこから持つて来たものか、大きな重い丸太を筏に浮べ、小蟻が物を引づる様に幾本も舷側まで運んで来た、この丸太は太平洋鐵木、即ちミラボウ (*Ursea bijuga*) で土人の税金の代納となる、ウインチで船に積み込みマヌコワリに運び、同地の官營製材所で板となし建築材に使用するのだ。

船は夕方、大陸の對岸、ワイジヨウ島のサオネツク島に着いた、若い和蘭人官吏の夫妻が七、八歳の双生兒を連れて乗つた来た、マヌコワリ支廳長に轉任したコントリールで、私が後にアングに上ぼつた時案内として同行して呉れたムルダー君その人であつた。

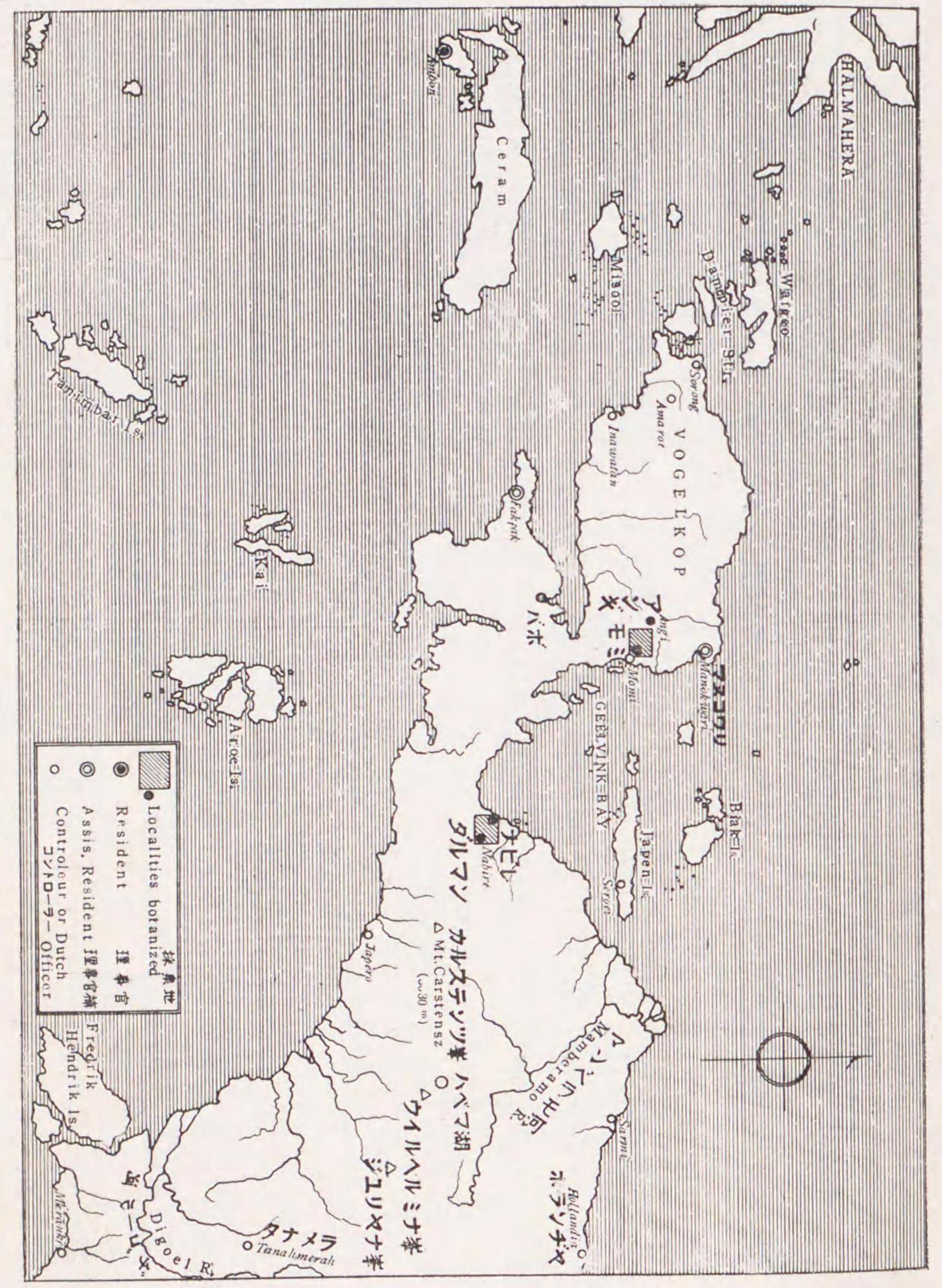
二月廿日 (船中)

昨夜は風が強く窓から冷い風が吹き込んだ爲め夜中に目が覺め、窓を閉めて毛布を掛けた。朝、甲板に出ると船はニューギニヤ大陸を右舷間近く進んで居た。

海拔三、四百米の丘陵が海岸に沿ふて幾重にも立ち列び、人家の氣配無く、斷崖に寄せる波は白い飛沫を上げてゐた、谷間に白銀の絲の如く見ゆるのは瀧であらう。

甲板の乗客は此神祕的な風光を一様に眺め、話聲一つない静けさで、只聞えるのは機關と波の音だけであつた。

午後、船は陸から次第に遠ざかつた、山の頂に雲が懸つて来た、鳥頭ホイ(ル)コップの北部を迂廻して五時半、





待望のドレー湾に入りマヌコワリ港に投錨した。

マヌコワリは北部ニューギニアの首府、副理事官が駐在してゐる、私は昭和七年、此地に來たことがある、船から望む市街はその當時に比べると幾分家も増した様だがその裏手の森は今もなほ原生林その儘で少しも斧鉞が這入つて居らぬ。

#### (四) マヌコワリからナビレへ

スラバヤ出帆以來、船上生活十日間、私にはよき保養であつた。港内に安着した此の船の甲板で、南洋興發會社の事業部長小杉方也氏を初め井上、牧田、泉川諸氏の出迎を受けた。

甲板でコントリールから旅行につき口頭訊問があり、旅券の査證を受けた後、興發社員に導かれ上陸した。

日は既に西に入り雨さへ降つて來た、棧橋を渡るとすぐ左手の海岸に沿ふた處に事業事務所がある、電燈が煌々と輝く裏手のパピリオンに招ぜられ、一同は今回の探檢のプランを協議した、地理と便船の交通に暗い私には意見の出し様がなく結局、旅行期間と睨み合はせて探檢箇所としてナビレの奥地とアンギ湖とを選ぶことにした。

夕飯後、私達が雨の烈しく降る中を棧橋に出て、ポートで沖懸りのイムホッフ號に歸つた時は夜も大分更けてゐた。

二月廿一日 (モミ農場)

夜半に出帆した船は今朝七時、目的地ワーレンに着く、ワーレンは南洋興發會社モミ農場の所在地、綿花とジュートの栽培が行はるゝ處、ヘルフィンクの灣の西側にある寒村、海が浅いので天馬船で砂濱に上陸する、岸邊には此農場に働く一千人に近い苦力達の小屋が並び窓から覗いたり入口に立つたりして見守る縮毛の黒いパアの一群、無氣味の感を與へた。この海邊から奥地五キロ迄の渺茫たる平野がこの農場で私達は主任の堀江氏に案内せられ事務所に着いた、あちこちに散在する椰子の葉で葺いた小屋は事務所、社員宿舍、倉庫、日用品販賣所で私達は一先づ事業部長の社宅であ



No. 33 モミ農場社宅 (井上氏)

の葉で葺いた小屋は事務所、社員宿舍、

倉庫、日用品販賣所で私達は一先づ事業部長の社宅であ



り又客室でもある自家に案内せられた、この社宅は事業地唯一の本式の建物で、床高く、すべて鉄木からなる堅牢のものであつた。



No. 34 モミ農場社宅に着いた一行  
(金平)

私達は先づかねて日本から送附して置いた荷物を整理しニューギニア大陸上陸後の最初の夜を迎へた、この社宅のベランダには二百燭光の石油ガス・ランプが吊され、卓を圍んで社員達のニューギニア談を聞き、深更に及んだ。冷気が次第に加はりベッドでは二枚の毛布を掛けてもなほ寒さを感じた。

二月二十二日 (大東丸船中)

昨夜は久しぶりに陸上のベッドに安眠した。早朝、裏のヴェランダに出る、空は曇天模様、山々には白雲が低く垂れてゐたが、この大陸に足をつけ初めて眺めるその景色は一段と美しかつた。

朝食後、私達は井上君に案内せられ農場員の見送りを受け海岸に出た、パプアの家族の一群が砂濱に立ち出て物見高く私達を見送つた、私達は茲で大東丸に乗りナビレに行くのだ、海面は鏡の様で小波一つないが大きなウネリが濱に打ち寄せ、荷物を積んだ天馬船は木の葉の如く翻弄せ

られ、轉覆するのではないかと度々心配した。

私は土人の肩に擔つがれたまゝ天馬船に乗せられ、沖がかりの大東丸に乗り移つた、大東丸は僅に八十トン、南洋興發會社の所有船でその船籍は蘭印にあるから船尾には三色旗が翻つてゐ

た。船長も機關長も日本人そつくりだが日本語が通ぜぬ、メナド人なることが後でわかる、水夫はすべてパプア人、仕事もすつかり板についたゐた。

私達の探検隊に加はるパプア苦力三十人ばかりが甲板乗客として乗り込んだ、甲板の上は彼等の寝具や食料が處狭き迄積み込まれた。

私はブリツヂの一隅の狭い空所に籐椅子を運ばせ涼を入れながらニューギニアの低い山々を遠く望んだ。

船は速力六節、海岸傳ひに東南に進んだ、瀬戸内海と名づけられた小島の多い海峡をぬけた、一時の中食には流し針で釣り上げた新らしい鱒の御馳走が出た。



No. 35 モミ農場の海岸で大東丸を待つ堀江氏と筆者  
(井上氏)





No. 36 ニューギニアの海岸山脈。頂には雲がかゝつて  
ある (金平)

私は船長の室が供せられたので日本から持参した書物をベ  
ツドに横たはつたまゝ讀んだ、夜に入ると激しいストー  
ル、窓を閉めた蒸し暑い室で眠りに入つた。

### (五) ナビレ滞在とダルマンへの探検

二月二十三日 (ナビレ)

モミから百八十哩を走つた大東丸は朝九時ナビレに着く、一面原始林の續く人の氣配の無い淋  
しい海岸であつた、迎へのボートで岸邊に着くと磯には大きな波があつた。私達は一人宛、土人  
の肩に乗せられ陸に上がった、脊中から沁つて砂の上に立つと足に心地よい感觸を與へたが私  
の脚は何故か少しく震へた。そこには井上、津久土兩氏夫人の出迎があつた、こんな寂寥たる地  
域に日本婦人が雄々しく進出してゐるのを見て心強く感ぜざるを得なんだ。

海岸の砂地に立つてゐる椰子の葉蔭の下にはダマルの貯藏倉庫、事務所、幾棟かの苦力小屋が  
建つて居た。暫く雨を事務所に避け荷物の陸揚げを待ちカポツクの並木道を少しく歩むと、小河  
に沿ふ林を切り開き花木と生垣に囲まれた數軒の宿舍があつた。

私の案内せられた室は床も高く壁と屋根とはニツパ椰子の葉で造られてゐた。室の一隅にある  
ベツドは白いシートに巻かれ、枕と長枕とが添へられ純白の蚊帳も吊つてあつた、私は広いベラ  
ンダに大きな机を置き仕事場とした。



初島君は日本出立以來の採集欲が制し切れず、午後パプア苦力三人を連れ周囲の森に採集に出掛けた、私が午睡から覚めると同君は樹木標本、四十餘種を持ち歸つてゐた、何れも目新しいものばかりでこの調子なれば採集は有望であらうと考へた。

夕はレモンを入れた湯で行水した、温浴は久しぶりである、夜に入ると空は晴れ満月が既に頭上に昇つてゐた。家信と電報を認めた後ベッドに入った。

二月二十四日（滞在）

朝、窓のカーテンが仄々と白くなる頃からリズムカルな鳥の鳴聲に目を覺した、夜が明けけるに連れて色々の鳥の鳴聲が續いた、そのうちでも最も音の高いのは雨鳥フロン・ウツヤンであることがわかつた、太陽が樹の間から射し込み始める頃その聲は最も喧しく高潮に達し陽が森の上に出ると鳥は或は高く或は低く飛んだ。黒い羽で鳥の二倍位あるが、嘴は不調和に大きなグロテスクな鳥を、フロン・ウツヤン歳鳥と云ひ、嘴の根元に年々階段状の凸起が出来るので名付けられたと云はれる、十數羽の群をなし大きな羽搏を響かせながら空を横ぎつた、スラバヤの動物園でこの鳥が如何にも傲岸な様子を見物人に與へてゐた、その同じ鳥が間近に飛んでゐるのに先づ一驚した、後でこの鳥が犀鳥なることがわかつた。又かねて深山にのみ棲息すると聞いた極樂鳥はその美しい姿を連想するには餘りに遠いクワーツ・クワ・クワ・クワーツと叫ぶ様な聲が森の間から聞えた。又高い枯木の枝に止まつてゐた大きな白鸚鵡は太陽の光を受け始めると大きな聲で鳴きながら左右の森に飛んだ。

やがて日が更に高くなると宿舍の前のレモンの樹には美しい蜂鳥が蜜を求めて遊びに來た、又色彩の濃い名も知らぬ色々の蝶が咲きほこるボーゲンヰイラ（イカダカヅラ）の花を慕つて集つた。

私はこの日ほど印象の深い朝を迎へたことは無い、動物園で見る禽鳥をこのニューギニヤの自然の中に、有るが儘の姿で眺めることの出来るのを感謝した。

それにしても私は爪哇に滞在中、標本用として珍らしい種類の鳥類を採集する許可を得て來なかつたことを残念に思つた。

今日はニューギニヤに來て始めての採集に出掛けた。何年か着古したシャツとツボン、久し振りに着ける編上げ靴と革ゲートル、臺灣製の古い大甲蘭の帽子を取出して身仕度した、又腰に野帳や鋏を入れる革のバッグを下げ、肩にカメラ、手に採集棒を携へた。何年振りの採集であらうか。



No. 37 ナビレの宿舍に着いた一行（金平）



私と初島君二人、外に通譯の高橋君、それにパプアの人夫四人を連れて出掛けた。

宿舎を出て右に曲がると田舎に不似合な立派な道路があつた、此道路は興發會社の前經營者がダマル樹脂の採集地ダルマンまで自動車道路開鑿の目的でナビレ川沿岸の氾濫地帯に凡五キロを完成して中止したその一部なのである。

私達は今、此廣い道路をゆつくり進んだ、兩側には巨大な樹木が高く聳え密林をなしてゐる、下木が極めて少いのは日光が射入せぬ爲めであらう、籐や月桃が林縁に多く、幹に着生した非常に大きな葉のコセウが目に着いた。

樹木に幹生果が多く、又葉や花の形態がづばぬけて大きいので採集袋は忽ち一杯になり、その都度新しい袋を出させた。

植物を採集しつゝ二キロも歩んだらうか、道の左側に柵を圍らした牧場に出た、牧場の周圍の森は陽を受けて花や實のある植物が多く、或は伐り或は上ぼつて採集した、何れも始めての植物、従つて手當り次第に大童となつて採集した、又この牧場の周圍に蝶類が多く、澤山捕へることが出来た。

朝から好晴で採集には申分の無い日和、只蟻類が樹木一面に棲息してゐるので時々不用意に刺されたが段々これを避けるコツもわかつて來た、終り頃には餘り惱まされることが無い様になつた。

宿に歸る途中、向ふからパプアの婦達がこちらに向つて歩いてゐたが橋の前まで來ると急に後に振り返り逃げ出した、多分日本人に怯へをなしたのであらうと想像したが、そうではなく毒蛇が道路に居たせいであることがわかつた。

宿に歸つて標本の整理をすると木本は五十餘種に過ぎなんだ。

夕方、私達は井上さんの案内でこの地の巡警派出所長とも云ふべきビスチュールを訪問した、海岸に近い道路に面したこざつぱりとした家で、手土産に日本から持參した食料品二、三を届けた、若いアンボン人のセイド君が如才なく私達を迎へ、タルナテ生れの夫人が手製の菓子やカカオを勧めた。

この役所の前面、海に近くハツバキ (*Cynometra*) の大木が一本立つてゐる、歐洲戦争が始まるとこの大木の頂に見張所の足場をつくり長い梯子が取り付けられた。どんな船を監視し又何處へ通信するのであらう。

海が急にどす黒い色に變り、スクオールの襲來を豫知したので急いで宿舎に歸つた、果して土砂降りとなつた。

二月二十五日 (滞在)



鳥の鳴聲で目が覚める、床に横たはつた儘、暫の間聴き入る。

ベッドから起き戸を排してヴェランダに出ると空は澄んだ好晴。日曜日で苦力が得られぬので高橋、山内兩君を伴ひ海岸に採集した、植物よりも美しい蝶に心が惹かれた、特にモルツカ、ニユーギニヤ地方の特産、*Troides priamus poseidon* が多く數羽を捕へた、この蝶はワレースの記事にもある通り往時歐洲で珍重せられたものであり、アンボンにも多く、その光澤のある厚ぼつたい青と黄との翅はこの種類のうちで最も美しいものゝ一つである。

私達は海岸の砂濱に出た、ヤドカリが無數にゐた、此林の中で珍らしいと思はれる樹には附近の土人を呼んで登らせ採集した。

夜に入るとスクオールが來た。

二月二十六日 (滞在)

明日、愈々入山することになった、早朝、探検隊に同行する苦力を召集して點呼し、各自の擔送する荷物の振合を調べて持分を決めた。

吾等の探検に携帯すべき必要品は左の通り。

#### 寢具類

折疊ベッド(三個)。キャンプ用敷蒲團(四枚)。莫産(五枚)。毛布(五枚)。枕(六個)。金巾製蚊帳(六

張)。下駄及スリッパ(若干)。

#### 食料品

白米、味噌、醬油、塩、砂糖、各種罐詰(ハム、コーン、ビーフ、大和煮、鰻、貝類、カマボコ、鰯、サルモン、アスパラガス、野菜類、ミルク、福神漬、梅干、バター、蜜豆、ゆであびき)、瓶類(ラッキョ)、乾素麵、魚干物(苦力用)。

#### 嗜好品

酒類、珈琲、紅茶、カカオ、菓子、煙草、煙草レンペン(苦力用嚙煙草)。

#### 炊事具

鍋、釜、フライパン、茶碗、皿、飯盒、庖丁類、コップ、ナイフ、フォーク、スプーン類、カンバス・バケツ、水筒、箸、マッチ。

#### 採集用具その他

古新聞紙、ブリキ製箱(一〇個)。アルコール罐、プレス及び細引、採集棒、鋸、手斧、剪定鋏、捕虫



No. 38 出立の勢揃した苦力の一行 (井上氏)



網、毒蟻、野帳、荷札及び番號札、採集袋、胴亂。  
 キャンプ用ランプ、石油罐、蠟燭、懷中電燈、救急藥、キナ鹽、アテアリン、繃帶、檢溫器、メンソラ

類、蚊取線香。

寫真器類(シネコダック共)、フィルム、最高最低寒暖計、  
 磁石、防水布。

着替の下着、シャツ、靴下及び毎日使用する化粧具  
 類は一纏めにしてブリキ罐に入れた。

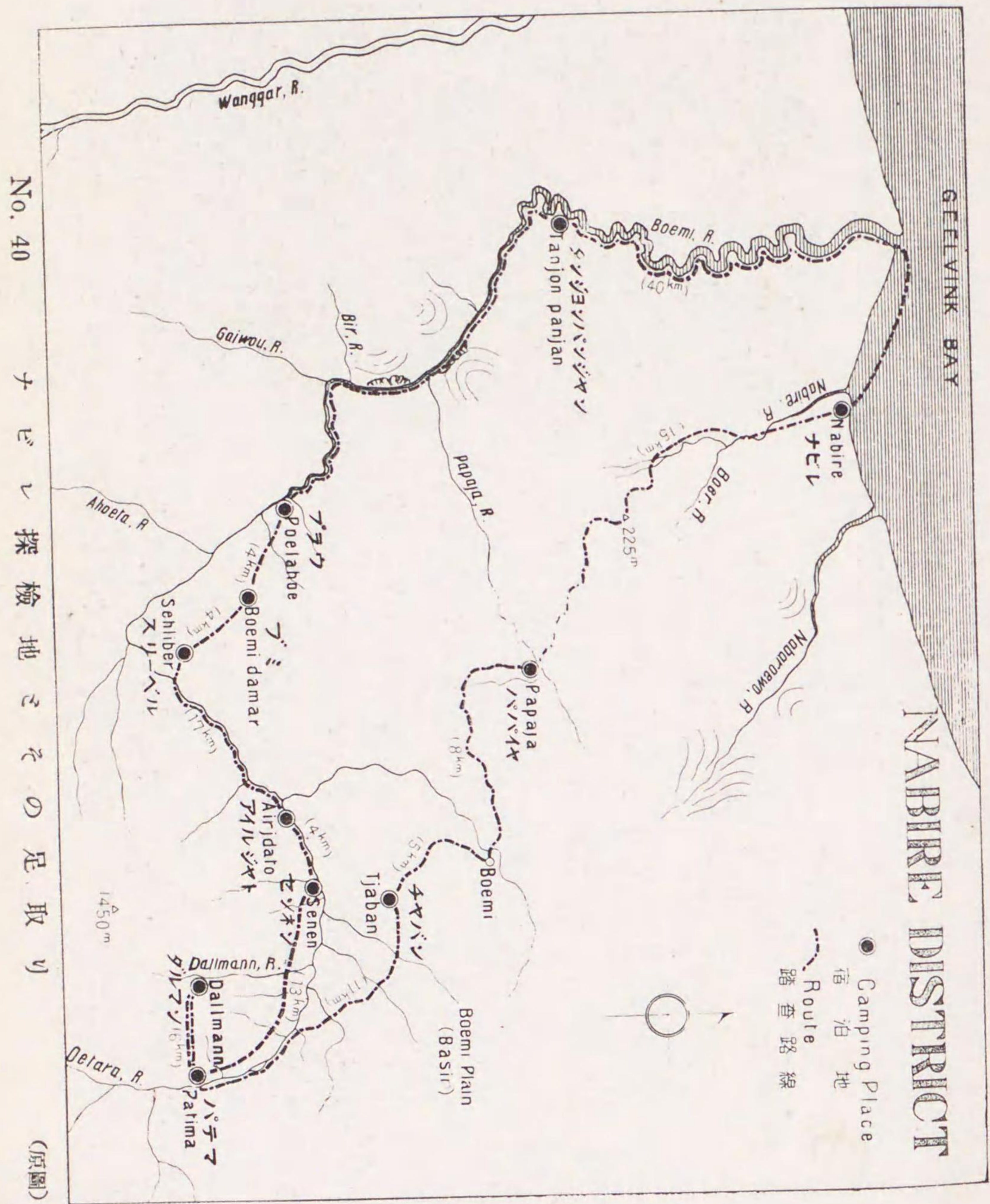
これ等の荷物はその大きさと重さを參酌して分配  
 し苦力の持分を決定した後は、探檢中終始、當がはれ  
 た荷物を忠實に運搬することに決めた。

出立前、苦力の荷物を分配した後、豫行の爲め各自  
 の荷物を擔いで歩かせて見た、その結果、多少の加減  
 をなしつゝ不公平の無い様にした。



No. 39 擔送の準備なり、進發せんとする  
 苦力達 (井上氏)

私達一行の一番心配したのは雨であつた。熱帯地の豪雨は想像も出来ぬ位烈しく降る、防水布  
 など直接雨に當つては何にも役立たぬ、着替類や白米、新聞紙その他濡れて困るものはブリキ罐





に入れ、食料の罐詰はリツクに詰めた。アルコールの罐入は失敗した、苦力が坂道を上下すると必ず岩や樹の根に罐を打ち當てるから直ぐ穴を穿つ、罐の四隅に竹を割つて當るか、或は寧ろ空堀に詰めて運搬した方がよい。



No. 41 ダルマン出立の朝の一行 (井上氏)

午後、初島君は附近の採集に出掛け、私は宿舎に止まつて明日の準備を了し、夕は充分の睡眠と休養を取る爲め早くベッドに入つた。

#### ダルマンへの探検

二月二十七日 (パイヤ)

愈々ダルマンに出立する日を迎へた、往復十六日間の豫定で計畫が進められ、その日程が出来た。

朝、雨鳥の鳴聲が森から聞えて來た、五時半起床、パンと珈琲の朝食を済ませ、宿舎の前に集合した、四十七人の苦力達も隊を揃へて吾等と一所に進發する筈であつたが何時の間にか出立して仕舞つた、途中で落合ふのであらう。私達の採集道具は小供達に持たせた、此の小供達の母親が見送りに來て何かと注意をしたり、世話をしてゐる様はいぢらしく

人情に變りはないと思つた。



No. 42 ナビレ河を進む一行 (井上氏)

記念の撮影後、井上夫人、津久土夫妻の見送りを受け一行が宿舎を出たのは七時半であつた。

苦力の監督、炊事、その他の世話は井上さんが宰配を振ることになり私達はその命を守ることにした、私達は先づ井上さんからナビレ川に出る迄は採集せざることを申渡された、それは今日の行程が相當長く、豫定の宿泊所に行き着く爲めには他日採集し得る地域を見送くるより外ないからだつた。

今、進みつゝある道路は前日採集した所なのでづんづん進んだ、どこまでも密林が續き、鳥の聲は引き切りなしに聞えて來た。行くこと四キロでナビレ川に出た、川の幅は百米、清流が片側の岸に沿ふて流れてゐた。

この川の深さはどの位あつたらうか、私は他の人達が何うして渡るのかとヂット見てゐた、す



ると巻ゲートルに地下足袋或はカンバス靴を履いた五人の人達はザブザブと川に這入て行つた。

私は革ゲートル、靴履なので一寸躊躇した、多分土人が肩を貸して呉れ、水に濡れずに渡るのであらうと、づるい年寄根性を出してゐた、然し誰しも私を構ふ氣配も無い、私は仕方無しに川に這入つた、水は靴から靴下に達した、が、冷い水に脚を入れたその瞬間とても良い氣持ちであつた。

か様な川の渡渉は何回も繰り返へされた、その時は屢々手の平で水を掬ひ、渴を醫した。河原は長く續き、兩岸の植物に花や實が多く、手を拱ぬいで通り過すことが出来るものでは無い、手早く採集して一行に遅れぬ様に進んだ、河原をかなり歩んだ頃支流に達した、苦力達は河原で汗を流し食事をしてゐた、私達は茲で先づ數枚の寫眞を撮つた。



No. 43 見付かつた！瞬間の一行 (井上氏)

河原を出立すると道は山に入つた、滑り易い泥土で森にはツルが茂り特に籐が蔓つてゐた、極

樂鳥の聲は頻りに聞えたが姿は見る事が出来ず、白鸚鵡があちらこちらに飛んでゐた。

小川を度々渡りつゝ進む、左手の川に水の音が轟々と鳴るので樹の間から覗くと大きな岩を越えて落ちる瀧であつた。

森林中に濕氣が多くなると山蛭が出て來た。出立の時、山蛭を防ぐには巻脚絆がよいと注意せられ、私は革のゲートルで工合が悪いなと考へたがそれは杞憂であつた、然し手首や頸に小さい蛭が這入つて血を吸ふた。

道は波の様に起伏した丘陵を上下した、第三期層で所々に石灰岩が露出し泥土の道がどこ迄も續いた。森の中では花や實が少く僅に着生した植物を採集するに過ぎなんだ。

正午に近く空が曇つて來た、小高い丘に建つ半ば



No. 44 中食の一休みに寛いだ苦力達 (井上氏)

朽ちかゝつた小屋で中食をした。



此小屋を立つと道は暫く下る、然し泥土の道に變りは無かつた。グマン・レモンで一休みした、大きなレモン樹が數本茂り、風の涼しい樹蔭で苦力連と休んだ、頭上になつてゐる大きなレモン



No. 45 レモン山で一休みする一行 (金平)

を採集棒で叩き落し、試みに口に入れると香氣は高いがその酸味はとても強くて吐き出さざるを得なんだ、この休憩時に數種の蝶を捕り毒壘に入れた。

レモン山を出立すると道は灌木の生えた草原を抜けた、採集植物が増え、段々遅れ勝ちとなつた。

大きな木性羊齒が出て來た、又幹生果で、果序の長さが二、三米もあるシダレイヌビハ (*Ficus myriocarpa* Miq.) が茲にも蔓り、又メウガ科のホザキアヤメ (*Cosmos*) は長さ五十糎もある深紅色の花房を抽出してゐた。苦力の落伍者が二、三出來たらしい、

海岸から來た苦力は荷物の擔ひ方が下手で肩に擦り傷をつくつたり、豆を出かしたりした、會々私の前に進んでゐた苦力に追ひ付くと何か私に訴へるらしい、多分荷物が重くて苦しいことを繰りかへすのであらう。

暑さと戦ひつゝ山道を上下するので相當疲れたが、段々目的地に近づきつゝあることは苦力達の様子で感得せられた。

坂を下ると再びナビレ川に出た、岸から川に飛び込むと水は案外深く腰を没した、川を斜に涉



No. 46 シダレイヌビハ (金平)



No. 47 ホザキアヤメ (同上)

つて對岸に着き、草叢を掻き分けて少しく上ぼると目的のパイヤの小屋があつた、丸太で出來た吹き曝しで屋根にはラバロイドが用ひられ雨を凌ぐには充分であつた、床の高さは一間もあつたらうか、汗にぐつしより濡れたシャツや下着を脱ぎ、下駄を引懸け、來がけに渡つた川に下



り冷水浴をした、その途中草叢の中を下駄履の裸足で歩くことは毒蛇の咬傷を心配させた。  
川から小屋に歸ると折疊式のベッドが擴げられ毛布と枕とが添へてあつた、温い珈琲を大きな  
茶碗で持つて來て呉れた。私と初島君とは直ぐ標本の整理と野帳の記入に手をつけ、井上さんは



No. 48 王冠鳩 (金平)

苦力相手に夕飯の料理に餘念が無かつた。此時殆ど  
時を同うして三つの獲物が小屋に運ばれた、一つは  
王冠鳩であつた。此鳥はニューギニヤの特産で四、  
五種を數へる。大きな鶏に匹敵する大きさで羽毛は  
はな色、羽の根元に白い斑點があり、羽冠にはみづ  
色の小羽毛が扇子を廣げた様に美しく並んでゐる、  
保護鳥であるが食用に捕獲するには差支へ無い。

第二は火喰鳥であつた、是は山で射止めたがあん  
まり重いので二つにぶつた切つて持つて歸つた、肉  
は硬く吾々の口には合はぬが土人には無上の御馳走である、第三は大きな川鰻であつた、然し夜  
の食膳に上ぼつたのは王冠鳩の「水たき」だけであつた。  
此森林中に蚊が居ないのは不思議であつたが私達のベッドには金巾の蚊帳が吊られた、この金

巾を用ゆるのは夜明け頃、飽和状態に達する空氣中の濕氣を避ける爲めなのだ。

ベッドに入り蚊帳を排して壁の隙間から空を仰ぐと月が皎々と輝き、森に飛ぶ螢の光が明滅し  
て居た、毛布二枚をかけたが適温であつた。然し寢就きが悪く夜半を過ぎる頃から雷鳴が續き目  
はだんだん冴えて來た。

二月二十八日 (チャバン)

昨夜、寢就かれなかつたのは私だけでは無かつた、「私もそうであつた」と五人がすべて同様な  
ことを云ふ。昨日小屋に着いた時、喉が乾くまゝに珈琲を餘りに澤山飲んだ爲めであることがわ  
かつた、以後、午後からは珈琲を飲まぬことに決めた。

簡単な朝飯を済ませて出立の準備をする迄相當の手敷を要し、出立したのは八時であつた、ど  
うした間違ひであつたか高橋君の靴を提げて先發した苦力のあることが後でわかり、同君をいた  
く困らせた。

今日の道は密林の低濕地で、行けども行けども泥濘から抜け出ることが出來ず、靴は勿論、デ  
ートル迄も没した、それに度々泥土に隠れた樹の根に躓き、昨夜の睡眠不足と相俟つて一層疲勞  
に拍車をかけた。

此山地一帯は隆起した珊瑚礁からなり、土地は瘠悪だが樹木は最大限度の生長とも見るべき密



林であつた。この密林中で高い樹の梢に止まつた一羽の雌の極樂鳥を初めて目撃した、雄の華麗な羽毛に反し雌は鳩を見る様な平凡な鳥であつた。

密林中の平坦な道が暫く續いた後、正午頃ブミ川の支流に出た、川の幅五十米計り、水は浅い

が清く澄み、川一面に擴がる小石の上を涼々と流れてゐた、私達は汗に漬つたシャツを脱ぎ、この川の中にザブザブと進んで上半身を洗ひ、幾度も掌で水を掬ひ渴を醫した。

この岸邊で意外にも先發したバス君が射止めた火喰鳥を運んで吾等の到着を待つて居た、私は數枚の寫眞を撮つた後、此珍らしい鳥を前に横たへて凝視した、厚い鳥冠、喉元の桃色がかつた附着物、遠方から見ると火を食べた様に赤く見えると云ふその肉塊、退化した翅は軸のみ残り箸の如く



No. 49 火喰鳥が捕れた (金平)

細く、太い脚は樹の枝に似てゐる、私は此不思議な動物を出来るなら剝製にして日本に持ち歸り度いものだと考へた。

私達はブミ川を渡り岸を登つた、そこには古い壊れた小屋があつた、元の古い小屋で私達はその屋根の下で中食した、川の上を吹いて來る風は涼しく暫くの間暑さを忘れることが出來た、美しい色々の蝶が川の面を傳ふて私達の前を飛んだ、或時は捕へ或時は逃した。

この小屋から道は密林に入つた、道は平坦だが苦力の中にも段々落伍者を出した、山蛭が特に多く、道ばたの草や、落葉の上に頭を上げて獲物の近づくのを待機してゐる中を進んだ、手と云はず頸と云はず襲撃して來た、前行く人の背中、臀部、ゲートルにも何疋か附着し頭を上げてゐた、自分の體も恐らくは同じであるに違ひ無い。

午後二時頃の太陽はその日盛りで、空に一點の雲も無い晴天でも密林中では矢を射つた様な美しい光芒に過ぎなんだ、この密林中で私は昨年猪熊農學士が發見したタコノキの一新種 *Pandanus pseudosyncarpus* KANEH. を始めて見付けた、私は寫眞を撮る爲め後から持つて來る筈の苦力の到着を待つたが、佇立してゐる間に無数の蛭が靴の上からゲートルに這ひ上がつて來るのに氣が付いた、それでも暫くは我慢したが遂に斷念せざるを得なんだ。

此密林では火喰鳥に出會つた、犬に追はれて森林中を彈丸の様な速さで逃場を探す物凄い音に驚かされた、又ある處では枯葉を山の様に残んだツカツクリ鳥の巢を見た、この巢に生んだ卵は地下の自然熱で孵化するのだ、此巢のある處には赤虫が最も多いと云はれる、私達は逃げる様に



急いで通過した。

此密林一帯の平地はその面積五萬町歩と推定せられ、一度はゴム園として開墾する計畫もあつた、將來の栽培地としては有力な候補地の一つであらう。

森が少しく明るくなつたと思つたら狭い打開けた處に出た、今宵の宿泊地チャバンである、チャバンは枝の意、近くに河の支流があるので名づけられてゐる。

小屋の裏手は密林に續き、この密林を流れる小川は幅五米、チヨロチヨロと流れ入る淀んだ川水に過ぎなんだが私は茲で今日の汗を洗ひ流した。

今日は誰しもいたく疲れたらしい、仄暗いランプで植物の整理を済ませベッドに入る、話聲一つ聞えぬ静けさで皆深い眠りに入つた。

二月二十九日 (パテマ)

昨夜は熟睡して前夜の睡眠不足を補ふた、苦力達のうちには昨日の強行軍に恐れをなしてか、ある部落から來た。パプアの苦力八人は結束して歸して呉れと申出た、然し結局、宥めたり賺かしたりして連れて行くことになつた。

簡単な朝食後、八時十五分出立した、今日の道路は平坦で昨日に比べると餘つぽど樂であつた、それに昨日から晴天が續き空氣も乾燥し氣持も爽やかで森林を観察する餘裕も出來た。樹木の高

さは目測によると高きは五、六十米にも達するが直徑僅に六、七纏で樹高二十米位のものもあつた。板根は樹種によりて發生するものと、しないものがあるが立地の關係だけでは無い。森林中立ち枯れの樹が殆ど無いのは淺根性の爲めに自然に倒れる爲めらしい、道ばたに倒れた主根の無い淺根性の巨木を屢々目撃した。

今日は蝶類が甚だ尠かつた、山蛭は二、三種を區別することが出來た、大はマツチの軸木大、茶色の縦線があつた、小はピンの太さに過ぎない、此細い種類が附着したタオルで顔の汗でも拭くと、目の中に這入ることがあると注意せられた。

鳥の鳴聲が絶え間無く聞えた、時々歳鳥が空を掠めて通つた。

やがてお午になつた頃、樹林の根の上に莫蔭を敷き、持參の飯盒と水筒とを取り出し中食した、遅れ

て到着した初島君は初めてホンゴウサウを發見したと報告した。

食後、間もなく出立した、幾度か小川を横ぎり又深い溝を飛び越えた、平地に流れる川は羊腸の



No. 50 パテマ川を渡る (田山氏)



様に曲がり、一度、道を見失ふと迷路に這入つて仕舞ふ、この林の中で珍らしくもソテツを見た。暫く進んだと思ふ頃、後の方で喧しい聲が聞えた、何かと私は後に引返して見た、山内君が何か地上のものを採集せんと體を屈めたところ、倒れた丸太の下に毒蛇を発見した、豫ねてニユ一ギニヤの毒蛇には猛毒があると聞いて居たので一同は緊張した、私はドレ／＼何處に居るのだと捜した時には蛇はその頭を丸太の下に隠しかけてゐた、私は直ぐ寫眞のレンズを向けた、蛇は段々丸太の下に逃げ込むので、逃してはならぬと私は遂に採集棒で叩いた、蛇は體に一撃を食つたが未だ鎌首を上げるので更に二回、三回と撃つた、私は蛇が全く死んだことを確認したので附近から一本の小さい樹の棒を切り地面に置き、そうして今殺した蛇の尾を掴んでその體を棒に沿ふて列べた、この光景を遠方から見て居たパプアは逆も驚いたらしい。

「先生！ 土人を御覽なさい、あんなに怖がつて居ますよ」

と傍から私に告げる者が居た、然しどんなに毒のある蛇でも死んだら害は無い筈、私は棒と一所に置いた蛇を眺めた、蛇はその白い腹を現はし、奇妙にもその尾は腹の中程から急に細まりスボイトの様な形をして居た、私はポケットから麻紐を取り出し、蛇と棒とを一所に三個所ばかり縛らせた、この棒を苦力に持つて行けと差出すと彼等は飛ぶ様に逃げた、仕方なく私自身で擔いだ、是を見たパプアの苦力は流石に驚いたらしく私が近づくと恐れて逃げた。この毒蛇は土名を

ウラル・ピサと云ひ、その咬傷には痛みが無いが三十分位で落命すると云ふ、この蛇の血清の研究が出来てゐるかどうか疑はしい。

平地を過ぎると丘陵地帯に入つたらしく度々坂を上下し、再びナビレ川の支流に出た、この支

流は珍らしくも紺碧の水が淵に淀み兩岸の樹木はその蔭を水に投じてゐた、道は此川の岸の斷崖にも近い危険な傾斜面を沿ふて上ぼる、例の瑠璃色の美しい蝶が茲でも川の上を高く飛んでゐた、不思議な位、鳥の鳴聲がピッタリと止んだ。道に沿ふた谷には所々に清水が湧出してゐる、この冷い水で私達は渴を醫した。

この岸邊を暫く進むと川の支流に出来た中洲に出た、玉砂利が一面に擴がりその中洲を廻ぐる清流には涼しい樹蔭があつた、先發の苦力達も茲に荷物を



No. 51 樹蔭に憩ふ一行 (金平)

下し寛いで休んで居た。

中洲を出て反對の岸に上がると道はナビレ川の右岸に沿ふ叢林を抜ける、間もなく開墾跡地で



もあらうか、日蔭の全く無い草原に出た時は強い直射の日光と焼けつく様な地熱で酷しい暑さを  
覚えた、だが最後の進撃に汗を絞りつゝ進むこと二キロで再びナビレ川の上流に出る、對岸の森



No. 52 待望のパテマの小屋に到着。水は水晶  
の如く澄む。掬つて渴を醫す (金平)

の蔭に今宵の宿となるパテマの小屋が見え  
た時、唯れ云ふとなく、  
「来た！ 来た！」  
の聲が聞えた。

今、私達の目の前には澄んだ清い流れが  
横はり、その水は玉石や小砂利の上を嘯ら  
ぎつゝ岸邊の狭い淵に流れ込むと、そこに  
は大きな渦巻を残して居た。

私達は脛を没する川を渡つて向側の岸に上  
がった、風通しのよい、まだ建て、間も無  
い小屋がある、今宵の一夜を明かす處で、

周圍は一度も斧鉞の入らぬ密林で圍まれてゐた。

今朝先發した鐵砲の名手、バス君は今日既に火喰鳥の雛を生捕つた外に王冠鳩を射止めたので

川に裕々と水浴し久しぶりに鬚を剃つて居た、山内君は茲に着くとレモン茶を準備し、又取つて  
置き信州産栗羊羹を出して吾々の元氣を恢復させて呉れた。

私は汗となつた下着類全部の洗濯を苦力に頼み、小屋のすぐ下を流れる川に下つた、そこには

土人達がもう洗濯したり水浴したりしてゐた。私は  
猿又一个の眞裸になつて川の中へドンブリと體を浸  
した、流水は案外に早く渦巻さへある、私は用心し  
ながら岸邊に沿うて泳いだ、この清流に漬りながら  
數刻の間、暑さも疲れも忘れたことは今でも愉しい  
思出の一つである。

今夜の食事は王冠鳩のスープ、又その肉にジャガ  
芋とタマネギとを入れた「水たき」であつた。

今日の行程は十一キロ、案外樂な道で、土人達の



No. 53 狩りの名手バス君の鬚剃 (金平)

顔にも嬉色が見え、夜に入ると彼等は床に横になつた儘、讚美歌を次ぎ次ぎに歌つた。空には雲  
なく、銀粉を吹いた様な星が現はれ南十字の星が輝いてゐた。

三月一日 (ダルマン)



六時起床、興亞奉公日、一同は黙禱した、軽い朝食の後出立した、荷物が日々少し宛減るので苦力も段々楽になつた、小屋を出ると坂道にかゝる、昨日までは道とは云へ、單に踏跡を辿つて來たがパテマとダルマンとの間はダマルの運搬が頻繁なため立派な道が出来てゐた。海拔が上ほ



No. 54 木性羊齒 (金平)



No. 55 パプアがコツブに使用する  
ウツボカヅラ (金平)

るにつれ林相も變化し、植物の種類が段々變つて來た、椰子類、木性羊齒、タコノキ、ツルタコノキ類が出現して來た、蝶は甚だ少いが只瑠璃色の美しい翅を持つてゐるのが茲でも二、三飛ん

でゐた、迎も速くて捕れそうにもなかつた。



No. 56 ダマル森林(眞直な樹木がダマルノキ) (井上氏)

土壌が赤褐色となつた、ラテライトであらう、蛇紋岩、閃綠岩などの母岩の露頭が現はれ、風化した赤鐵礦や褐鐵礦が出て來た、又大きな葉の竹やツル性の竹が目につき、球状の壺を持つてゐるウツボカヅラ(ネペンテス)が地面に群生してゐるのも珍しい、又アリノスダマの種類が多く、乾燥地にはコシダが蔓つてゐた。

海拔三百米附近で始めてダマル樹が出て來た、此樹は幹が眞直で高く、深緑色の葉を有するから直ちに見分けが出来る、又トリバマキ、*Daerydium elatum* (ROXB.) WALL. も現はれて來た。實をつけたツルタコ二種を始めて採集した。

城氏が我等を迎へる爲め峠の樹蔭で待つて居た、この附近からダマル樹がポツポツと見え、ダマ



ルを運搬する女苦力に屢々出會つた。



No. 57 ダルマンの小屋、右端が宿泊所 (井上氏)

を敷いて座つた。

道は下り坂となり、歩き易いのでドンドン進んだ、両側の珍しい植物はダルマン滞在中に採集することにして見送り、谷に沿ふて歩き続け、この旅行の最終地、ダルマンに着いたのは正午過ぎであった。

此附近には平地が無い爲めか、小さな宿舎がダルマン川の岸に沿ふて可なり急な傾斜地に建つてゐた、建物と云へばこの宿舎の裏手に細長いダマル倉庫があり、下の河原の縁に苦力の小屋があるだけであつた。

私達の宿舎に當てられたダルマン唯一の小屋は一間しか無い室だが床が高く廣いヴェランダがあり、此ヴェランダは見晴がよく、食事の時には茲に英産

眼下に流れる清き川の水を見ると早速冷水浴をせざるを得なんだ、眞裸になり腰にタオルを巻き水に漬つた、大きな玉石がゴロゴロと多く、降雨期の急流を思はしめた。

川から宿に歸へると中食の仕度が出来てゐた、食後私は窓の脇にしつらへたベッドに座し日記を認めた。

宿舎の下を流れる溪流はツツト山奥から眞直ぐに白い奔流を見せ、川の兩岸の密林には水際立つて美しい深緑色の樹冠を持つたダマルの樹が林の間からぬつと聳え、この密林の續く高い山々には白雲が去來してゐた。

夕方になると西日の太陽が小屋の低い屋根を直射し一時ではあるが堪え難き迄の暑さとなつた。

飯後に出掛けた初島君が四つの袋に標本を膨らして歸つて來た、直ちに取り出して整理し、プレスにかけ、又昨日、一日中プレスにかけた標本は各シート毎にアルコールを振りかけブリキ罐



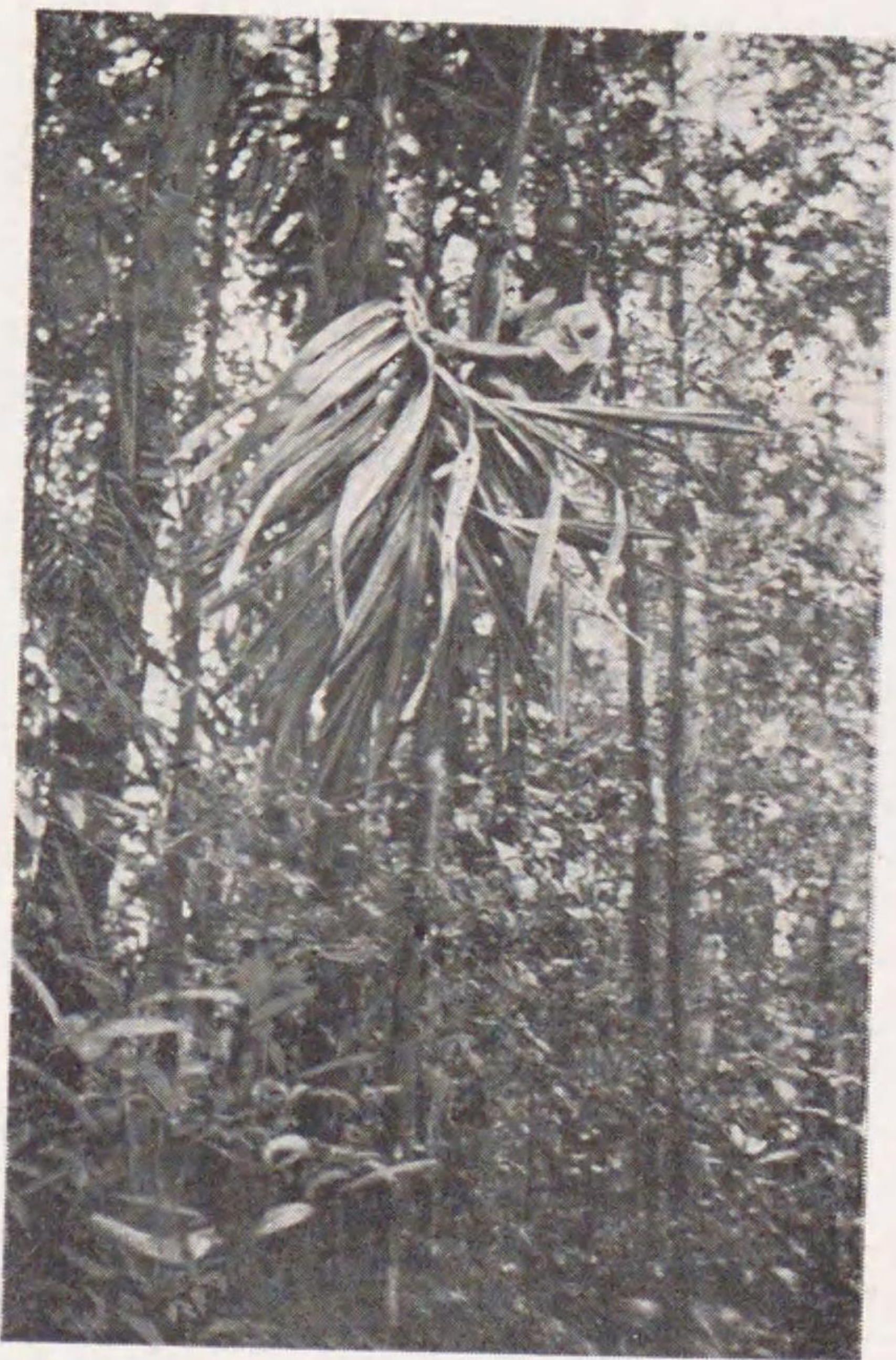
No. 58 ダルマン宿舎から採集に出立する一行 (金平)



に入れて密封した。

今日の行程は朝から好晴に恵まれ、空気も乾き爽快を覺えた、山蛭の攻撃は無かつたが赤虫に喰はれたらしく足、頸の邊りに頻りに痒みを感じた。

三月二日 (滞在)



No. 59 樹に登つてツルタコを採集するフランシス (井上氏)

採集に出掛けた。小屋の下を流れる川に入り、河原に沿ふて暫く下り、間も無く左岸の森に這入つた、この森の入口を少しく進んで大きな樹の幹に深紅色な、とても大きな美しい實を持つたツルタコを發見したのは嬉しかつた、早速苦力を呼んで樹に登らせ採集した、このツルタコは内地

六時起床、下の川で口を漱ぐとまだ仄暗かつたが太陽が山の端から直角に昇るから空は直ぐに明くなつた。今日はダルマン滞在で荷物をつくる必要が無い、氣持も自然ゆつくりした、八時半、苦力五名を連れ、ダルマン採集作業の視察を兼ね植物

に歸つて調べると *Freyinetia pseudo-insignis* WARB. なることがわかり、新種では無かつた。

山を登ること一キロばかりでダマルの林に達した、徑百五十糎位のもものが少くなく、幹は通直で柱の様な圓筒形、恐ろしく丈が高い。この樹の分布状態は場所により一様ではない、ダルマンの



No. 60 同採集した標本

(井上氏)



No. 61 ダマル樹の林 (金平)

事業地は一萬町歩で、樹脂採集可能のものが一萬本を算するから一町歩平均一本の割合となる。

ダマルを採るには先づ樹幹に刺戟を與へる豫備のタツピングを毎月一回宛、四回續ける、その



横幅は大體四十糎、縦幅即ちタツピングの幅は小指の直径を標準とする、小指を標準としたのは苦力にタツピングを教へる時用ひた爲であらう、樹脂の分泌はゴムの様に液體が直に浸出する譯ではない、徐々に分泌して空氣に曝されると次第に凝固する、此凝固したものがダマルで大概タツピング後四十五日目に大きな山刀で切口に凝固したダマルを削つて取る、このダマルは乾くと脆弱になるから採集の際には圖に示した様な御幣椰子の葉で作つた漏斗オセータに受けてとる。又採集と同時に舊い採集口の下部に出来るだけ狭い幅で傷をつけ次ぎの分泌を促して置く。

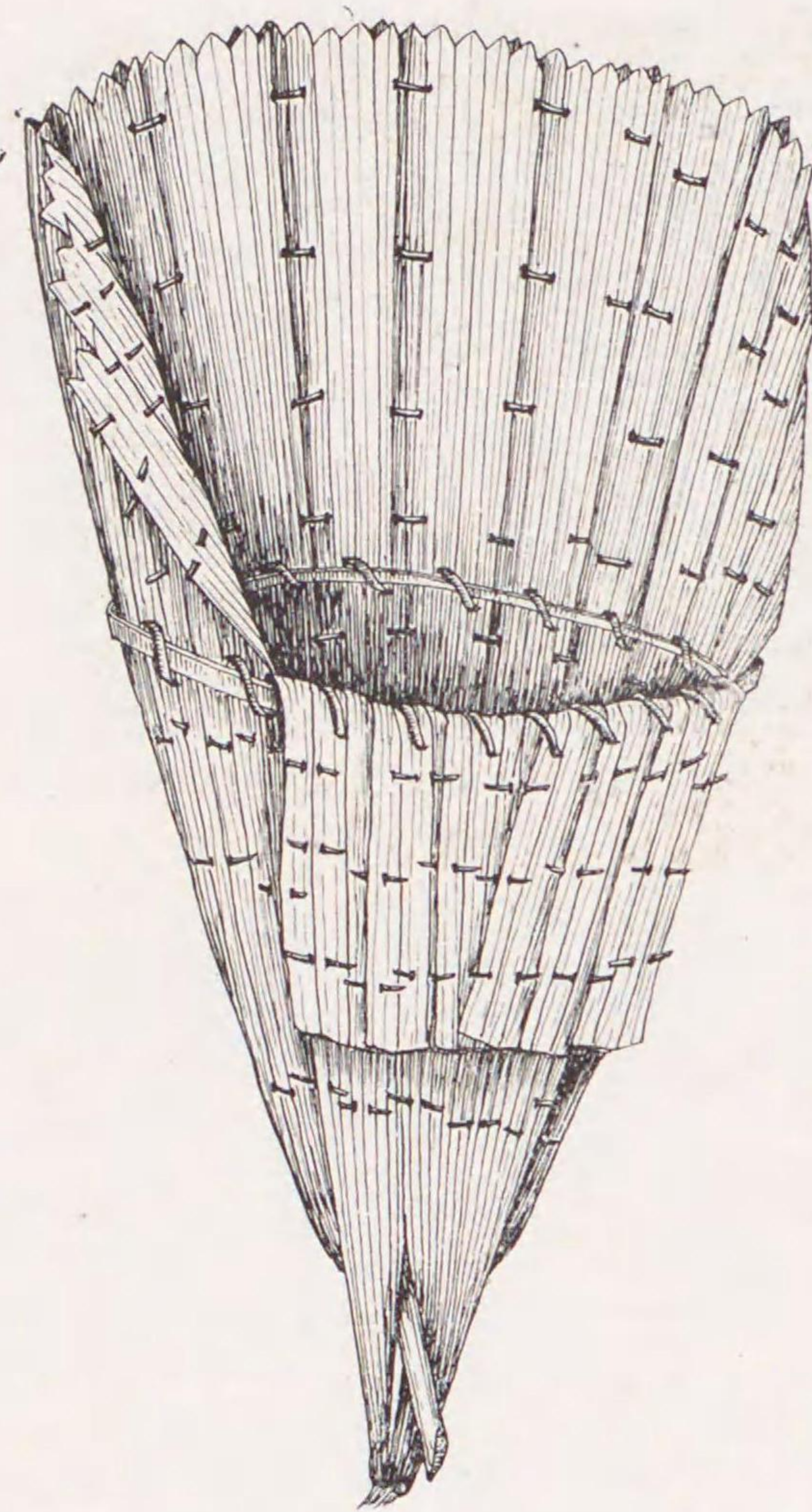


No. 62 ダマルの採集 (金平)

充分乾燥が出来たら粒の大きさに従つて分類し商品として輸出する。

ダマルの需要は年々増加する一方、その供給は天然林に依存するので採集が合理的に行はれぬ

限り産額は減少する、然るに従來の採集法は掠奪的で枯損木を生じ易く、到底保續的の經營は出来ない、茲に於て興發會社はダマル樹の毎木調査を行ひ、採集を開始すべき樹齡に制限を設ける外、採集方法の改善、幼樹の保護増殖に乗り出すことになり今其方針の元に着々實行に移つてゐる。



No. 63 椰子の葉で作つたオセータ (原圖)

ダマル樹には樹脂を分泌すること普通の樹木と變りは無いが空氣に觸れても凝固しない品種がある、これをダマル・ポペダ (ポペダは粥の意) と云ふ、ダ

マル樹の一割内外の歩合で現はれる、現今このダマル・ポペダは利用せられてゐないが、何とか化學的作用で凝固させることは出来ぬものか、又この儘でも利用する途は無いものか、研究の



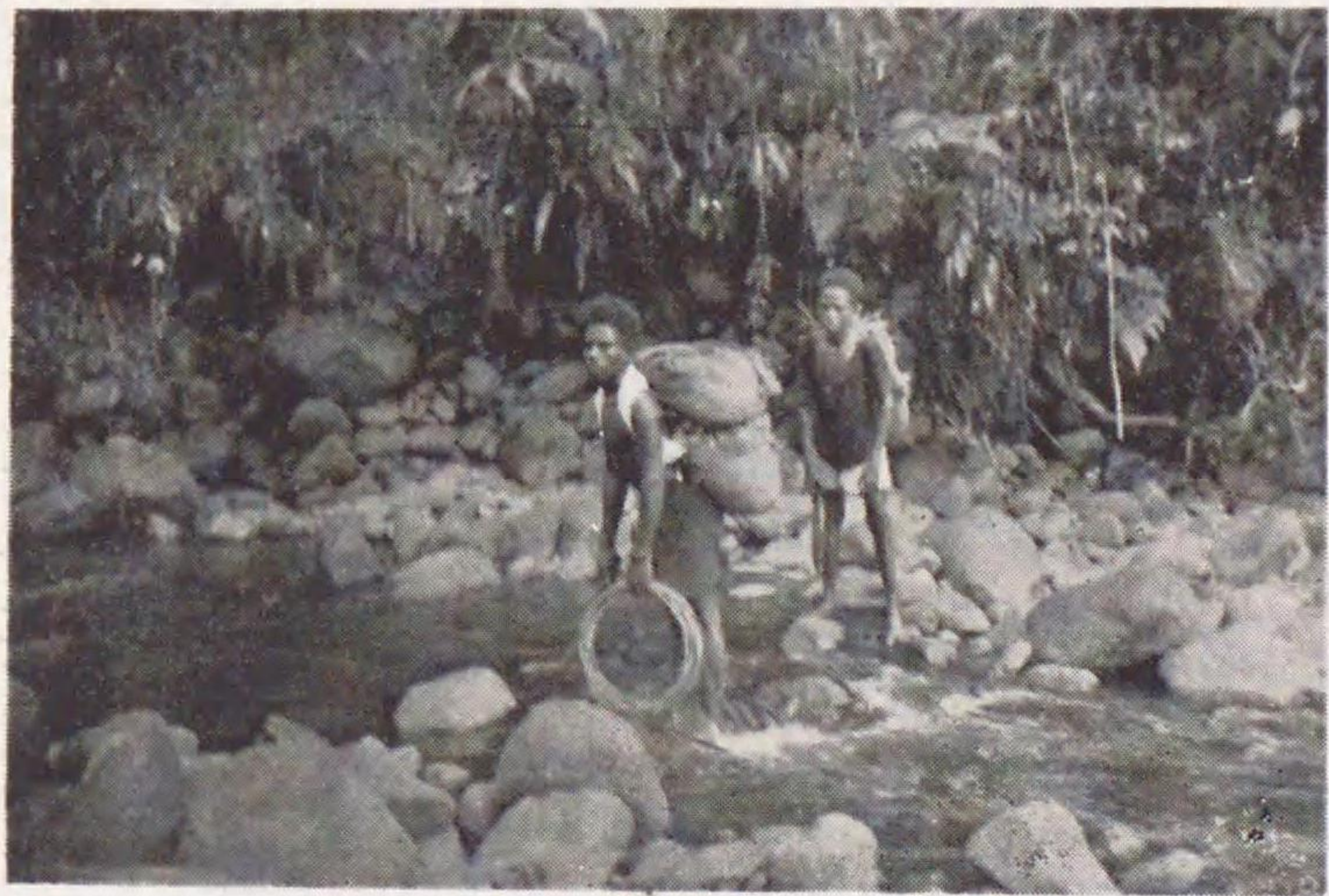
價値がある。

ダマルの採集状態を視察した私達は尾根と思はれる森林中を採集した。特に注意を惹いたのは

椰子類の多かつたこと  
とで十數種の完全な  
標本を得たがこの附  
近だけでも數十種を  
産するであらう。

私達は尾根から谷  
に下り小さい溪流の  
岸邊に腰を下ろし持  
參の辨當を聞いた、  
食事中、井上さんが  
何氣なく樹上を仰い  
だ機會に高い幹の上

*Freycinetia tagenicarpa*



No. 64 袋に入れたダマルの運搬 (井上氏)



No. 65 ダマルの乾燥 (井上氏)

に着生する形の變つたツルタコノキを見付けて呉れた、これは後で

WARB. なることがわかつた。



No. 66 溪流で中食中、ふこ上を仰ぐと珍種があつた (井上氏)



No. 67 樹木を伐採して標本を取る (金平)

・朝、晴れた天候が次第に變つて來た、烈しいスク  
オールが襲來するに違ひ無い、急いで小屋に歸つ

た、果してやつて來た。

バス君は今日も王冠鳩と名を知らぬ大きな川魚を

捕つて歸り私達を待つて居た。



夕餉には今日捕った鳥や魚の外に、パプアが野菜として食べるゲネモ (*Gnetum* sp. の葉)、サ

ヨリ・パク (*Dryopteris* sp. の幼芽)が出た、結構食べられると云ふよりは之れを賞味した。

夜になると空は晴れ星が輝いた。ベッドに入ると苦力の小屋で合唱する歌が聞えて来た。

三月三日 (滞在)

今朝も爽々しい朝を迎へた、日曜日、苦力の休日である。

私は茲に土人即ちパプアに就き少しく説明して置かねばならぬ。

今私達の採集してゐるナビレ地方は全くの無人境であり、一番近い土人部落でも南方直巨離、五十キロ以上山地に這入らねばならぬ、その山奥に居るパプアは



No. 68 ダルマン宿舎にて夕餉の準備をする  
山内君 (井上氏)

ヤビと呼ぶ種族で、時たま隊を組んでナビレに來り、持つて來た鳥や獸皮を鹽とか布地に換へて歸ることがある。

ヤビ族は文化に全く接したことの無い種族で山野に狩獵して食物を得る外、何一つ生活上の自由を感じる事が無い、殆ど衣服を用ひず、ペニス・ケースで陽物を陰蔽し一本の細い帯を締むれば足りる。只彼等の盛装には鳥を型どつたと思はれる位に羽毛で體を飾ることはある、又貨幣の必要が無いから備ふて労働させる事も無い、

従つて我々と彼等と接觸する機會は殆ど無いと云つてよい。

今私達の使役してゐる土人はニューギニヤ本土の海岸ワールン地方(ヘルフィンク灣)や、その對岸のボスニツク、ヤツペン等の島々から來た者で大部分はキリスト教會に屬してゐる、人種的には島内に於ける種々の種族の血が混じて居るに違ひない。



No. 69 パプアの妻君が川に炊事  
具を洗ふ (金平)

一見彼等は如何にも劣等人種の感じを與へるが従順であり、理解もある、軽い労働よりも重い労働に堪へる。いつも跣足でシャツとパンツを着けてゐる、體は冷水で屢々洗ふから見かけ程不潔では無い、決して眞裸の姿を見せず、立小便をしてゐるのを私は目撃したことが無かつた、又



敢て絶無とは云はぬが、品物を盗むことが殆どない。食物は海岸地帯の者はサゴに對する執着が強烈であり、米も無論嗜好する、鹽魚、鮭鱒は最も好む所で煙草はシガレットを愛好するが値段が高いから平常は嚼み煙草を銜へてゐる。

婦も海岸地方の者は乳の上からサロンを着け、水浴にはそのまま水に浸り、水から上がると濡れた上に新しいサロンを頭から被ぶり取り替へる、爪哇の婦と同様である。

私が何時も連れてゐる苦力にフランスとアナニヤスと云ふ二人のパパアがゐる、共にワンダメン生れで、蔭日向は多分にあるらしいが中々惻口者で伐木と木登りには否な顔一つせず、何時も勇んでやつて呉れた、特にアナニヤスは植物をよく識り、自分一人で採集に出掛け屢々珍種を持ち歸つた、そうしてこの二人は最後の採集まで私達を助けて呉れた。

今日は苦力達の休日なので午前中軽い採集を試みるべく小屋の下を流れる川底（ダルマン川と吾々が名づけて居た）を登つた、

大きな轉石の上を飛びつゝ、或は川の水にザブザブと這入りながら進んだ、兩岸の樹木を何本となく伐つて標本を採集した、採集の袋は間もなく一杯になり次ぎ次ぎと新しい袋に換へた。

午後、私は休養し、初島君は又採集に出かけた、午前よく晴れてゐた空は何時の間に間にか黒雲に覆はれ、二時頃から猛烈なスクオールとなつて襲來し、遂に土砂振りとなつたが又忽ち雲の一

角に時間を見せた、採集に出た連中は濡鼠となつて宿に歸つた。

私はベッドに座して井上さんと雑談中、何氣無く窓の外を眺めると一羽の黄色の美しい極樂鳥が川の上をサツト横ぎつて小屋の横手の高い樹の枝に止まつたのを認めた、私は思はず、

「あつ極樂鳥！ 極樂鳥」

と叫んだ、一度は自然の極樂鳥を見度もものだと思つて居たので私は直ぐ外に出て此鳥を眺めた、鳥は枝から枝に飛び忽ち小屋の上を掠めて又別の樹に止まつた、私達は暫くこの行動を見守つたが又何れへか遠く飛び去つた。

夕餉は珍しくもウドンの御馳走が出た、一同はランプの下で夜の更る迄雑談した。

三月四日（パテマ）

昨夜は烈しい雷鳴を聞いたが雨は來なかつた。未明に窓の押戸を上げると空は曇つて居る、朝食を済ませて引上げの準備にとりかゝつた、準備は直ぐ出来上つた、私達が苦力の仕度の終るのを待ちながら雑談中、ヴェランダから川の向ふ岸に立つてゐる大きな針葉樹が目についた、まだ時間があるのでフランススと呼んで標本をとりやつた、彼は斧を携へて出掛け、直ぐ樹を伐り倒し間もなく枝を持つて歸つて來た、立派な完全な標本であつた、これは後で *Podocarpus*

*nerifolius* Don なることがわかつた。



今日の行程はハテマまでは僅に六キロ、八時出立した、一度歩んだ道は妙に感興が少かつたが、それでも新しい標本を相當に採つた。  
 正午にパテマの小屋に着き、川で水浴を済ませ中食をたべた、ジャガ芋と牛罐の煮付、トマトスープに炊き立ての飯が出た。



No. 70 捕へたカンガルー (金平)

人さし指を入れた、指は袋の中一杯に張り切つた乳房に觸れ、更に指を深く入れるとその底には別な感觸を持つてゐるものがあつた、之れを取り出すと一疋の幼児なのだ、然し此幼児はその大



No. 71 カンガルーの兒 (原圖)

午後、型の如きスクオールが來た、一睡するとバス君父子は王冠鳩と、小犬大の一疋のカンガルー(土名ラウラウ)を獲つて來た。

私はカンガルーの胸を探ぐつて小さい袋を見付け

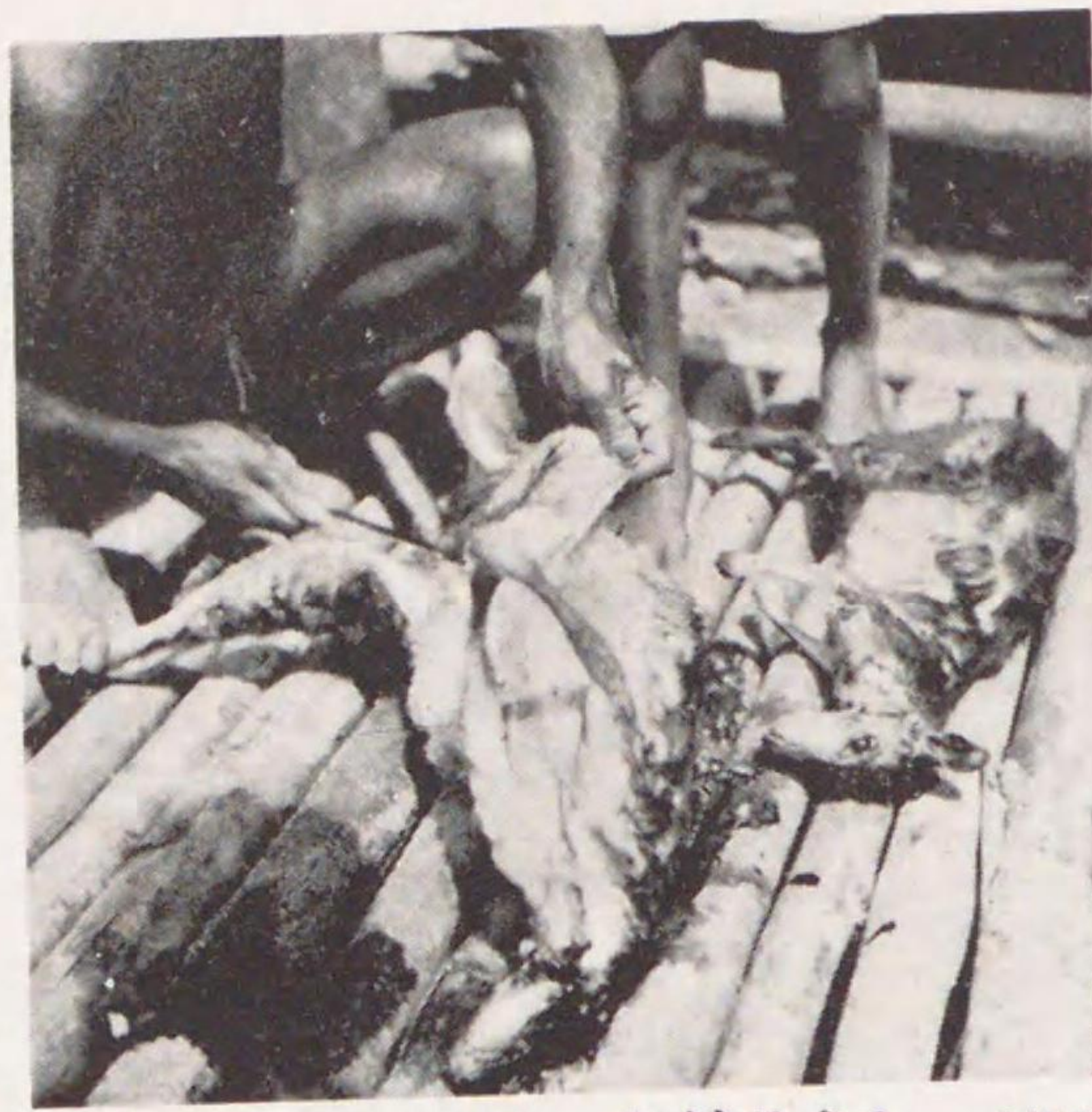
きさ母指より少し大きい位で全身無毛、眼を閉ぢ胎兒と何等變りが無い、生んだばかりのこの子をその親が如何にして安全にこの袋の中に入れたものか、私は今もなほ不思議に考へてゐる。

料理したカンガルーの皮は鹽漬とし王冠鳩の羽毛と共に持ち歸ることにした。カンガルーの肉は一種の臭氣があり、私達には到底、口にすることが出来なんだ。

夜は黒雲が天を覆ひ、甚だ蒸し暑い、螢が飛んで來たので捕へた。

三月五日 (滞在)

昨夜晩くから降り出した豪雨は今朝もなほ續き、晴れそうな氣配も無い、今日の一日を茲に滞在することにした、狭い小屋には私達の外、多勢の苦力が雨を避けてゐるので混雜し身動きも出来ない、私は丸太で出來た吹曝らしの小屋の床の上に置いたベッドに胡坐をかいたまゝ、雨に濡れる目の前の森をボンヤリと何時迄も眺めた、名を知らぬ色々の小鳥が右往左往に森の樹から樹に飛んでゐた。森の下を見ると昨日迄の清流は濁流に變り、岸邊の草木の根を洗ひ出して滔々と流れてゐた。この雨の中を炊事の



No. 72 カンガルーを料理する (金平)

115197



苦力はタコノキの葉で造つた敷物を頭から被ぶつて雨を除け、手にはキャンバス製のバケツを携へて水を汲みに出掛けた、又室の隅の僅かな狭い場所では米を磨ぎ、湯を沸す者もあり暇の者は投網の修理に餘念が無かつた。

今私がベツドの上でこの日記を書いてゐると一人のパパアがやつて来て不思議さうに文字を覗き込む、私が「雨だね」と云ふと「大丈夫やみます」と答へる、この雨が果して止むであらうか。十時を過ぎる頃小降りとなつた、小屋の周圍に蝶が澤山飛んで來た、捕虫網を苦力に貸して之れを捕らせた。

昨日からの雨で標本が濡めつた、私は苦力に命じて石油の空罐を切つて一枚に廣げ、之を地面に立てた四本の丸太の上に置き、下から焚火をしながらブリキ板の上には乾きにくい種子、果實を列べて乾燥させた、この方法は探検中泊つた何れの小屋でも時間のある毎に實行を續けた。午後は休養、針と糸とを取り出し、シャツやツボンの修理、又釦を着けたり、採集袋の綻を縫つたりした。

夕、バス君は五羽目の王冠鳩を射止めて歸つた、空は幾分晴れたが夜に入るも星は出なかつた。  
三月六日 (センネン)

昨夜は熟睡して疲勞を恢復した、まだ仄暗いうちに目を覺した、朝方、小供が一疋の小さいコ

ウモリを持つて來た、アルコール漬とした。

今日の日程は二組に分れることになり。私と井上、高橋の兩君は丸木舟でセンネンに行き、田山、初島、山内の三君は陸行して同地で落ち合ふことにした。



No. 73 プレンチ!(止れ!)舟を岸邊に寄せ  
て採集する(ブミ川を下る) (金平)

陸上組は七時半に出立した、我々川下り組は三艘の丸木舟に荷を積み、この荷物の上には座を占めた。曇り勝ちの天候で雨が降らねばよいがと心配しつゝ出立した。この川の上流で川幅は狭い處は二十米、廣い處では五十米を超えた、水流は概して淺く河底は丸石や小石からなり、所々の急湍には倒木が水に隠れて横たはり、舟行が屢々妨げられた。

舟が淺い川底に觸れたり、或は餘り速い流れの爲め、その操縦が困難な場合には苦力は川の中に飛び込み舟を擔いで進んだ。



こんな難儀を幾度も繰り返して居るの知らぬ顔に、私達は兩岸の植物に珍しいものがあると

進行中の舟に「止れ<sup>ブレンド</sup>」と命令を下す、舟は惰力で數間も十數間も下流に押しやられるが苦力は黙々と遡江してその植物のある岸邊に舟を寄せて呉れた。

兩岸の森にはムクロジ科、アヲギリ科、ニクヅク科、アカネ科、センダン科など多く、オホバセンダン (*Chisocheton*) の赤い實のなる樹木が多かつた、又川の中の砂礫の洲には邦人がカハシヤクナゲと呼んでゐる *Ficus* 屬が屢々一面に密生してゐるのが目に着いた、又川の水に漬かる岸邊には灌木性の

*Boerhagiodendron* が美しい花をつけてゐた。

舟を、とある小石原の洲に寄せて上陸した、苦力是一種の大きな野生の椰子の樹を伐り倒した、これは土人がその頂の芽を切り取り野菜の代用にする爲めなのだ、この河で暫く休んでゐると白い鸚鵡が、ギヤ、ギヤ、と無氣味な鳴聲を立てなが



No. 74

密林を縫ふ、ブミ川を下る一行

(井上氏)

ら川を横ぎつて森から森に飛び、又何日も聞き慣れてゐる旋律的な雨鳥の鳴聲が蟬の聲と共に川の面に響いた。此川邊には蚊は居らぬが蟻が足と云はず、手と云はず這ひ上つた。連れの小供達が川の中で泳いでゐるが羨しかつた。

少憩後、丸木舟は出立した、少し下つたと思ふ頃、他の舟で二疋のカンガルーを捕へて來た、川の岸で犬を喚かけて捜し出し、川の水際まで追詰めた處を生捕つたもの、丸木舟の上ではどうにもならず、殺して仕舞つた、可愛相なことをしたものだ。

岸邊で私は満開のオホバセンダン (*Chisocheton*) 屬の樹木を見付け、舟を寄せると、それは既に採集済みのものであることがわかつたので私が「スダ、アビス」(もう済んだ) と告げた、その瞬間、苦力は

「蛇! 蛇!」

と叫んだ。

私「何處?」

苦力「サナ」(あそこ)

と答へた、よく見ると今私が採集すべく舟を寄せたその樹の枝の付け根に一疋の蛇が巻きついてゐる、井上さんは是れを見るや携帯の實弾を込めた單發の小銃を取り出し、丸木舟の上に立ち



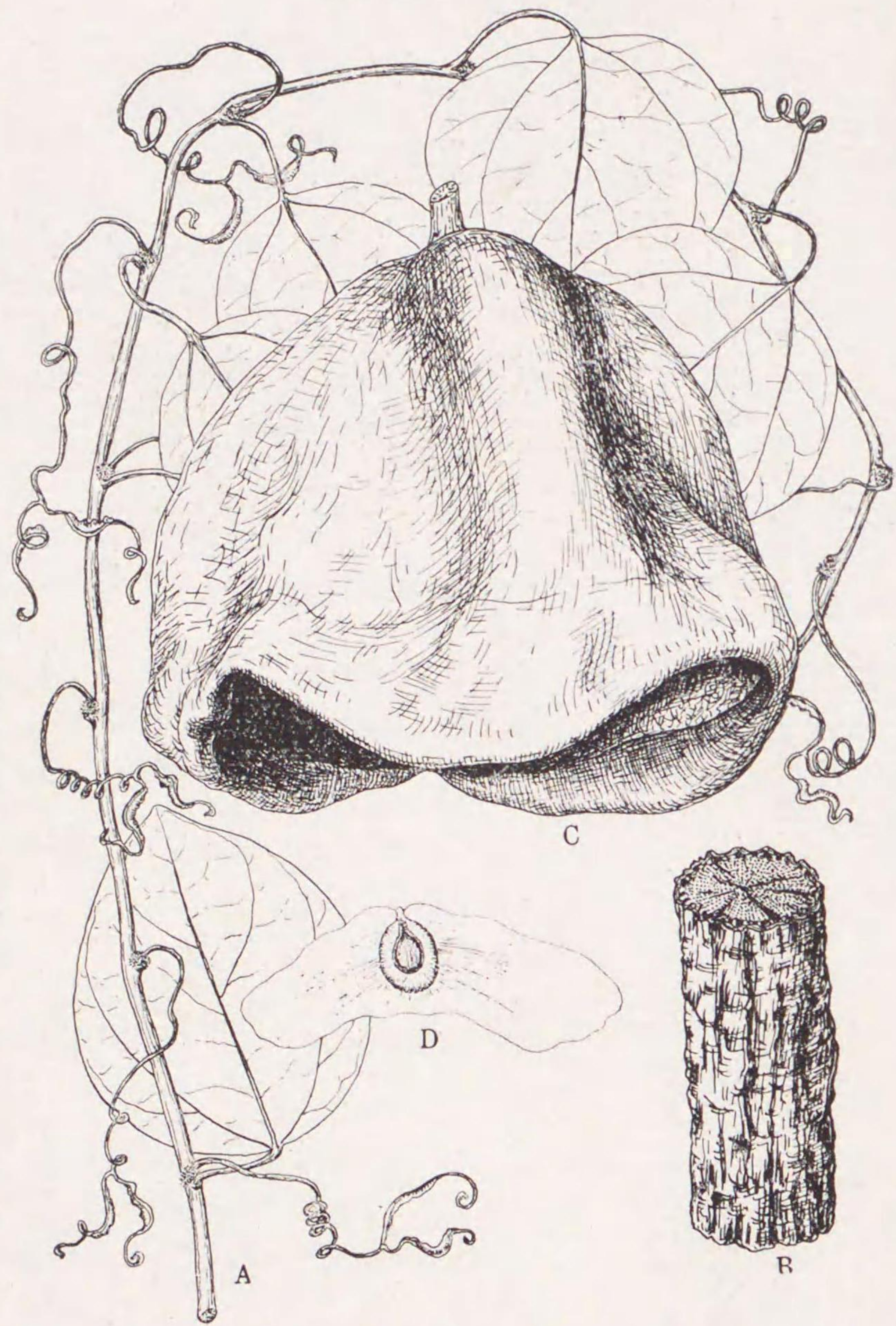


No. 75 プミ川兩岸の樹林に絡まる蔓莖  
前面は野生の甘蔗 (金平)

上がったまゝヂツと狙を定めパンと發砲した、蛇はその長い體を枝からだらりと垂れたと思ふと直ぐツルツルと長く延び川の中に落ちた、舟を寄せ、採集棒で水中から引き上げると何んと其彈丸は不思議にも頭と腹の眞中に貫通して居た、蛇は長さ六尺にも近い細長い形をしてゐるが毒蛇では無かつた、私はこの蛇を丸木舟の横木に巻き付け持ち歸ることにした。

兩岸の疎開した森林の巨木には蔓莖植物が樹冠に絡まり、その蔓の一つには人頭大の實を垂れたヘウタンカヅラ *Macrozamia macrocarpa* (Br.) Cogn. があつた。ヘウタンカヅラはスンダ地方に廣く分布するが到る處にある譯では無い、然るにニューギニヤの河岸には非常に多い。この實は熟すると先端が三裂して中から膜質の翼を附けた數千の種子を徐々に脱落、飛散する、翼の長さ十種計りで、空中に飛び出るとよく平衡を保ち滑走する。適風に遭ふと數哩の遠方に飛び屢々海に出ることがあると爪哇のボ植物園長に會つた時の説明を思ひ出した。この種子は飛行機の研究上にも有名で雲母で同型の翼をつくと一層、飛行に適し一時グライダーの研究にも用ひられたと云はれる。

*Macrozamia macrocarpa*



No. 76

ヘウタンカヅラ  
A, B, 莖. C  $\times \frac{1}{3}$  果  $\times \frac{1}{3}$  D 種子  $\times \frac{1}{4}$  (原圖)

私は空に白蝶の飛翔するが如く又目の錯覺で飛行機では無いかと思はしめる様なこの不思議な



種子を眺め、造化の妙を感嘆したのであった。

川の流れが次第に緩漫となり水が淀んで来た、兩岸の森はその緑の蔭を水に映じ蔭鬱な景色に變つた、此附近には魚族が多く鰐も出沒するらしい。

丸木舟は疊の上を滑るが如く川を下つた、川幅が狭くなつたと思ふ頃左手の岸に一艘の丸木舟を見た、愈々小屋に近づいたのだ、間も無く目的地に着き、舟を岸邊に寄せて上陸した、小屋は平地の森に圍まれてゐた。私達が荷物を丸木舟から陸揚して整理して居ると今朝から陸を歩いた所謂、陸上組が汗だくになつて着いた、此一行の一人は五尺ばかりの青い毒蛇を棒に括つて持ち歸つた、此毒蛇は路傍の低い樹木に巻きついて居たので危く難を免れたと云ふ、私は此蛇を括つた紐を切り、棒からはづした、蛇の背筋に白い斑點があり、相當歳を取つて居るものに違ひあるまいと想像しつゝアルコホール壘に入れた。

午後、動物標本の始末に當惑した、それには結局井上さんを煩すより外無かつた、二疋のカンガルーの皮と蛇の皮を剥いで貰つた。蛇は一疋の鼠を呑んで居た、此鼠は茶色混りの灰色で珍しい種類であらうと考へたが既に消化し始めて居るので標本には出来なんだ。

そこへ一人の苦力が川から一尾の大きな魚と二疋のスツポンを提げて小屋に歸つた。私はこの次ぎは鶴が捕れるよと豫言した、それは又どう云ふ譯ですかと尋ねるから、

「鶴は千年（この地の名がセンネン）龜は萬年、今龜が捕れたから次は千年の鶴では無いか」と答へた。

「先生、人が悪いですな」

と逆襲せられた。

夕は小屋の下の川の水が澄んで来たので水浴した。

夜に入ると雨になり烈しい雷雨が晩くまで續いた。

三月七日（センネン滞在）

早朝目が覺めると森から聞える鳥の鳴聲は喧しい程であつた。

昨夜の雨は荷物をすつかり濡めらしたらしく紐に懸けて置いたシャツやタオルはぐつしよりと濡れてゐる、下駄履きで外の草原を歩んでも山蛭が足に着いた。

小屋の裏手の森に高い立枯の樹が一本立つてゐる、この樹の梢に色々の鳥が来て止まるので射的の稽古になつた、二、三回失敗した後漸く一羽の美しい鳥が落ちた、鳥の名は不明だが剝製にして貰つた。

苦力の一人から宿の近くで火喰鳥を射止めたと云ふ報告があつた、此鳥を擔いで小屋に持つて来る光景をシネマに收めんものと田山さんは大に緊張してその歸りを待つた、やがてアナニヤス



が十貫もありそうな大きなカソワリ（火喰鳥）を肩にかけて戻つて来た。寫眞が済んで料理にとりかゝつた、私はその羽毛を集めさせ、田山さんは頭をアルコール漬として持ち歸ることにした。



No. 77 肩に擔いで持ち歸つた火喰鳥  
(金平)

陽が昇ぼるにつれて雲が晴れて来た、今日は二班に分かれ、一班はマツソイ樹の探検で田山、初島、山内の三君之れに加はり、私と井上さんとは附近の採集に出掛けた。

道は小屋の裏から森に入つた、日光も射入せぬ密林で、近くで極樂鳥の鳴聲が頻りに聞えた、行くこと一キロ餘りで小川があつた、この小川で一、二寸佇んだ時、ふと上を仰ぐと大きな黒い鸚鵡が高さ、三十米計りの枯木の頭に止まつてゐるのが目に入つた、一見して有名な黒鸚鵡、即ちラヂヤー・カガツ一なることがわかつた、ワレースはその著「馬來群島」に詳しく説明してゐる、井上さんは直に持參の單發銃を取り出し狙ひを定めたが、枯木の枝が大きく、鳥の體の大部分が隠れ、長い尾だけが見えるに過ぎぬ、暫く待つたが發

砲の機會が無い、すると間もなく今一羽の同じ黒鸚鵡が飛んで来て枝の上で互に戯れ出した。私は双眼鏡を取り此珍しい鳥の姿や動作を眺めた、細つそりした黒い體に長い尾を備へ又その頭に立てゝゐる細い羽毛の冠（まが）が一層この鳥を颯爽たる姿に見せた。

井上さんも狙ひを定めた姿勢が何時までも續く筈は無い、腕の疲れを休め様としたその瞬間、鳥は上半身を枝から外に出したので慌てゝパツンと一發を放つた、然し鳥は一聲高く鳴いて近くの樹に一旦止まつたが直ぐ又何れへか飛び去つた。

此鳥は鸚鵡のうち最大のもので特に嘴が發達し大きなグラインダーを備へてゐる、ワレースが此鳥の標本を得て無性に喜んだ記事が前記の書に出てゐる、私もそれだけこの鳥を逃したことを残念に思つた。

密林を進むとノボタン科の美しい花の外には採集すべき植物が比較的少いのに失望した、山蛭がこの密林には特に多く一寸立ち停まると必ず體に上ぼつた來た。行くこと二キロ、坂の下で小蛇を見付けた、無毒だが標本として持ち歸ることにした。

道は小川に沿ふて上ぼる、この道はパプアが稀に通るのみで兩岸の谷が次第に迫り密林は一層無氣味に見えた。私達は多少の採集をしたゞけで殆ど無爲のまゝ引き返へすことにした。

密林から小屋に着くと太陽は燦々と照つてゐた、種實標本、衣類、寢具を外に出して乾した。



三時頃、他の班が宿に歸つた、マツソヤの林で一、二本の樹を伐り倒したが花も實もなく材鑑と葉の標本だけを持ち歸つた。

小屋の下を流れる水が次第に澄んで來たので水泳した、一人のパパアが水中眼鏡をかけて水に潜り、ゴム仕掛の吹矢で魚を追ひ射止めてゐた。

太陽が西に傾く頃、私はかねて採集し度いと考へて居たヘウタンカヅラが川の向ふ岸の森の巨木に絡み、その長く垂れた澤山な實を昨日見て知つてゐるので一人の勇敢な苦力を採集の爲め遣して見た、ものゝ一時間も経つたと思ふ頃大きな音が森から響いて來た、あの巨木を伐り倒したのだと直感した。やがて苦力が持つて歸つた三個の實を見ると、何れも中の種子は脱落したあとで空虚となつて居り役に立たなんだ。

夕飯には王冠鳩のスープとウドンとが出た。今宵は苦力達と同じ床の上に寝た。

三月八日 (アイル・ジャト)

今朝も仄暗いうちに起きる、昨夜から續けて火力乾燥をした標本を整理し夫々の箱に納めた、今日は丸木舟でアイル・ジャト(瀧)まで下ることに決めた。

出立迄にはまだ時間があるので私は初島君を伴ふて昨日の夕方、向岸の森で伐り倒した樹を見に出掛けた、根元の直徑一米半にも及ぶ大木で是れを伐るため足場の櫓が組んであつたのは意外

であつた、私達はこの樹を伐り倒すことにより隣接の樹木を倒したり枝を折つたりするのでそれ等の標本を搜した、然し倒れた樹の上には蟻の類が頗る多く手や顔を刺し採集が意の如くならなんだ、がそれでも珍種を少からず見付けた。



No. 78 炎天下のグミ川下り (金平)

私達の荷物、食料、標本類を適當に配分して安全に丸木舟に積み込むことは容易では無いが井上さんの宰配で迅速に完了した。

準備した三艘の丸木舟は次から次に岸を離れて流れに出た、急流の所は矢の様に速いが川が迂廻した淀んだ淵では速力は急に鈍ぶつた、昨日の川下りに比し急湍の個處は遙に多かつた、然し苦力は巧みに舟を操り危険と思はれる所も難なく通過した、そうしてそれを切り抜ける毎に彼等は如何にも愉しさを

にパパアの歌を合唱し、調子を揃へて擢を漕いだ。

兩岸の森では陸上で採集し得なんだ植物が澤山見付かつた、その都度舟を後戻りさせたが苦力達は少しの不平の色も出さずに採集を助けて呉れた。





No. 80 アイル・ジヤトの勝景 (井上氏)

ながら中食を取った、冷い風が川の面から室に吹き入り、私達は異境にあるのを忘れて寛ろいだ。ナビレ探検旅行中此小屋ほど印象の深かつたことは無い、周囲の勝景と水の清冽とは何時迄も記憶に残った。

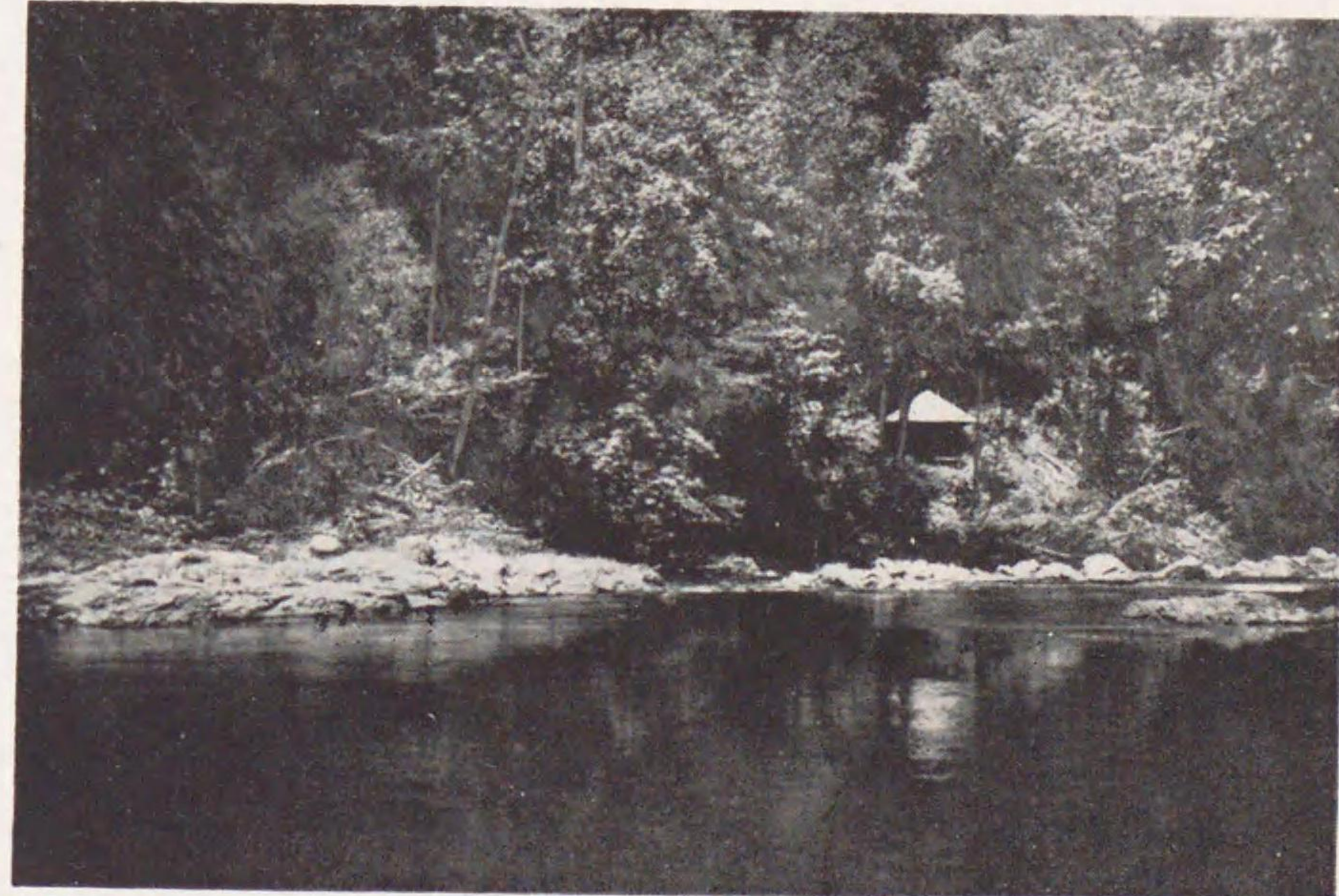
午後は種實の火力乾燥を続けた。今日も王冠鳩を得たので夕飯の膳を賑はした。

夜に入るも雨なく、嘩らぎの様な清流の音を聞きながら寝に就いた。

三月九日 (スリーベル)

朝、蚊帳をはずすとべつとり濡れ、又柱の間に張つた綱に掛けて置いたシャツや手拭もびしよびしよになつてゐた、私は土壇の水で口を漱ぎ、濡れた手拭で顔をふき洗面に代へた。

アイル・ジヤトの急湍附近に丸木舟を繋ぐこ



No. 79 アイル・ジヤトの小屋 (井上氏)

最も美しかったのは燕脂色の大輪の花を着けた *Hoya* の一種であつた、又 *Gesneraceae* の蔓莖でその燃ゆる様な深紅の花をつけた長い花序が樹の枝から垂れてゐたのは華麗であつた。

三艘の丸木舟が目的のアイル・ジヤトに着いたのはお午前であつた。「アイル」即ち「水」、「ジヤト」即ち「落下」で「瀧」の意である、然し本當の瀧では無い、茲ではすべての荷物を舟から陸揚して通過せねば危険である。

此急湍の左岸の狭い平地一杯に一軒の小屋が出来てゐた、まだ新築後間もない家で、その室の半分にはダマル入りの袋が堆高く積んであつた。私達は先づこの清流に下つて汗を洗ひ落とし、そうして床の高い、見晴のよい室に蔭を敷き白銀の泡を立て、流れる急湍を眼下に眺め



とは危険な爲め小屋の下流一キロの處に繫留してある、私達の荷物をこの舟の處まで運ぶには川



No. 81 アイル・ジヤト滞在中の植物標本乾燥 (井上氏)

の岸の傾斜地を横ぎらねばならんだ。滑り易い山道を辿つて小高い峠を越えた、舟懸りの足場が悪く、流れが急で荷物の積込みが案外手間取つた。

準備の出来るまでこの岸邊の森の中に佇立してゐると一人の苦力が満開の大きな美しい蘭の一株を持つて來た、手に取つて見るとそれは莖が螺旋状になつて樹木に絡みつく、一見ツルタコノキに似た蘭で我南洋パラオの特産と考へた *Dipodium freyneoides* FUKUYAMA であつた。

纜を杭から解き放すと舟は水と共に矢の様に流れ暫くにして緩慢な流れに出た。

私達は絶えず眼を兩岸の森に注いだ、何か見付けると舟を止めて岸に寄せた、折角近よつてもそれは然し珍種を見付けると岸に上がり、樹木を伐り倒す

既に採集の済んだ植物のことも屢々あつた、

こともあれば、樹に登つて枝を切らせたりして標本を見逃すことはしなかつた。

川の幅がせかれて倒木が之れに懸つて横はつて居ると荷物を全部陸に揚げ、舟を持ち上げて通過したこともあつた、兩岸には蔓の絡んだ森が今日も長く續いた。

空が晴れ正午に近づくと樹蔭の無い川の上では無風の一時が續き、頭上から直射する強い陽光は何物をも溶かさずには置かぬかと思はれる暑さであつた。

私達は川の岸邊に舟を寄せ、上陸して中食した、蝶が多く捕るのに忙しかつた。

午後の暑さも亦一層強い、強烈な陽さしを受けると目は自然に閉ぢ、睡氣さへ催した。

陽が西に傾きかゝつた頃、川は急に淺くなり淀ん

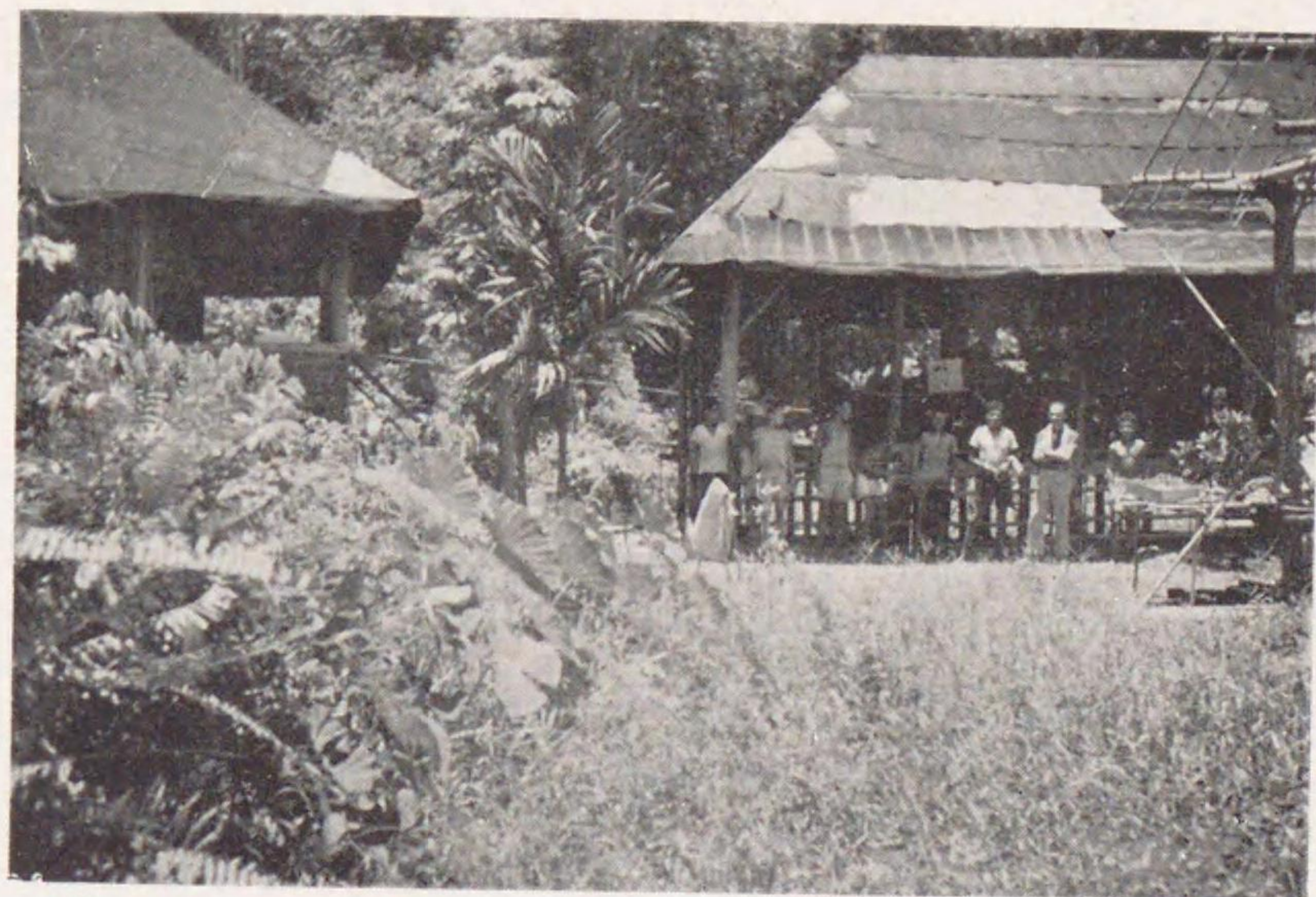


No. 82 アイル・ジヤト急漕 (金平)

だ濁水に變つた。スリールベルに着いたのだ。

今宵宿るべき小屋は川岸から二、三町も奥まつた風通しの悪い低濕地にあり、自然蒸し暑くもあつた、小屋の床は恐ろしく高く梯子で上がった、小屋の内にはダマルの袋が天井に届く迄積ま





No. 83 プミのダマル小屋 (井上氏)

れ、通風を一層妨げた。

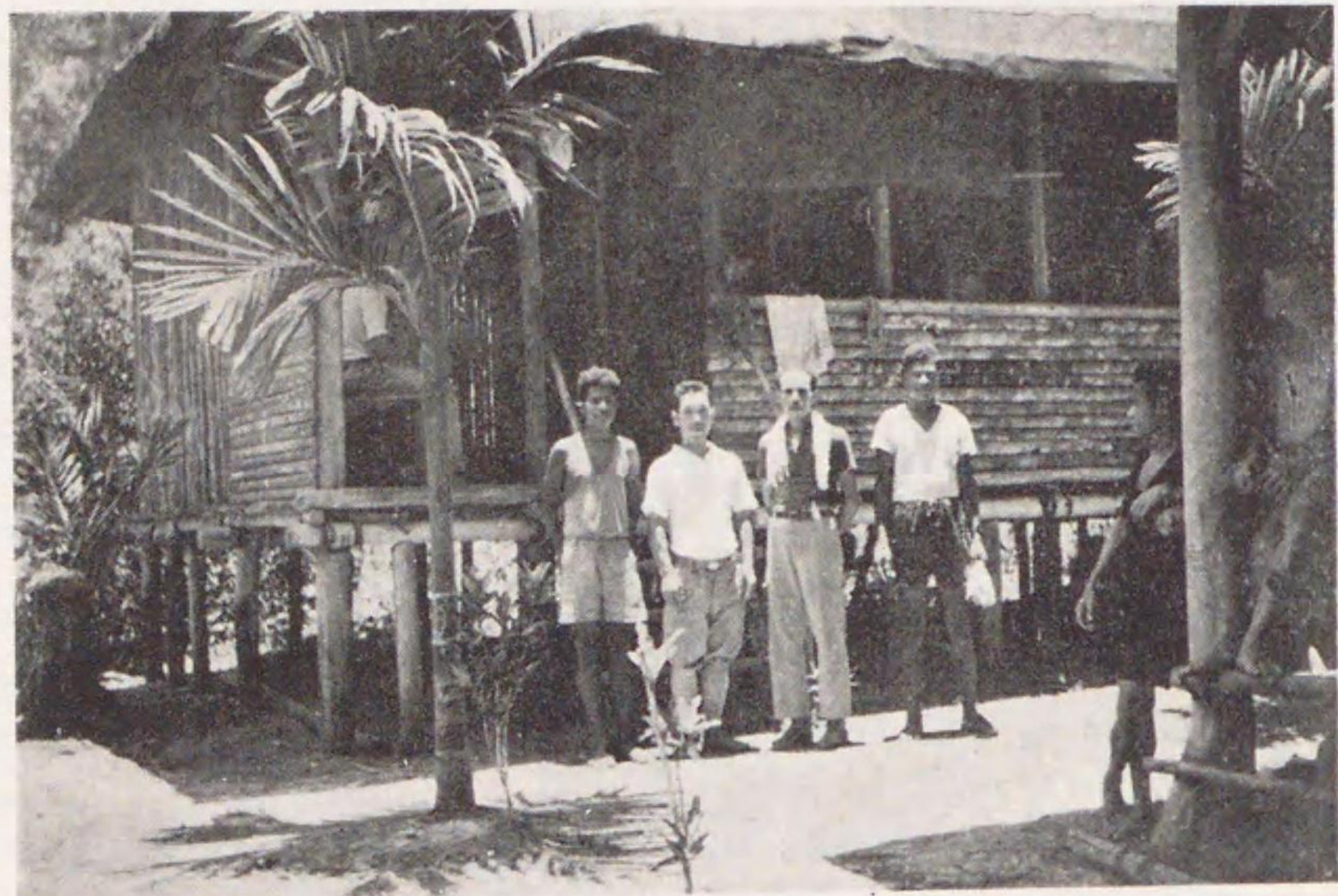
私には不思議な吊ベッドがあてがはれ、そのベッドの下と横では苦力達が晝寝した。

この小屋の裏手の森の中に深さ一尺にも足らぬさゝやかな流水がある、私達はこの水で汗を流し又一行の炊事にも使った、熱帯で水の少い程不自由なことは無い。

私は更衣後、吊床の上でこの日記を書く、炊事場では今日もバス君が打ちとめた鳩や、川で捕った魚の料理に忙しく又何處で手に入れたか大きなカボチヤが粗板の上で刻まれてゐた。

三月十日 (ビーバック・プミ)

朝ほの暗いうちに起床、今日の豫定の行程、プミまで四キロに過ぎぬ。八時に出立、暫く平地の森を過ぎ急坂を上ること二キロで尾根に出る、乾燥した礫質の土壤で第四期の初期、植相ががらりと



No. 84 同 宿 舎 (井上氏)

變りダルマン地方と同じくダマル樹が生じ、ウツボカヅラやコシダが出現した、樹性は小さいが陽當りがよい爲め、花實をつけた植物が多く、新しい植物を多数採集した、この尾根は道も平坦で風は冷く爽々しさを覺えた。

プミの小屋に間もなく着く、大きな吹き曝しのダマル倉庫の外に入夫監督の宿舎があつた、この宿舎は椰子の幹を二つ割りとして床と壁とをしつらへ窓は一つしかない、内を覗くと濕めつぽい暗い室の隅に床が出来てゐた、流石に私もこの室に寝る氣になれず、狭いヴェランダにベッドを置き休むことにした。

午後、空がからりと晴れた、私が種實の標本を箱から取り出すと僅か一日の乾燥を怠つただけなのに一面に黴が生えその一部は棄てざるを得なんだ、私

は直ぐ火力乾燥の棚をつくつて乾した。



夕方、バス君が四羽目の火喰鳥を打ち止めて歸つて來た、吾等はこの鳥に對する興味も失せたと見えて誰も振向く者が無かつた。又一人のパパアはブミ川まで出掛け長さ二尺五寸もある大きな魚を取つて來た、この魚を料理すると腹の中から四寸餘の一種の龜が出て來た、まだ消化して

居らぬ生々しいもので、田山さんはこの龜を標本に内

地迄持ち歸るため保存する様に命じた、然しその夜、

苦力達はこれを丸焼にして食べて仕舞ひ同君を失望さ

せた。七時から雷雨、雨は夜半迄烈しく續いた。

三月十一日 (ビーバック・ブラウ)

日が経つのが早くなつた、採集も既に峠を越し、あと二日でナビレに歸へれるとなると何となく軽い氣持になつた。

私は仕事に忠實なアナヤスとフランススを連れ、

附近の森に分け入り幾本となく樹木を伐り倒し標本を採集した、中にも香水として名高いラサマラ(パパア名)の花と實とを得た、この材は香氣馥郁、材質が甚だ堅い、磨くと美しい光澤を出す、恐らくは *Plundersia* 屬のもので、燻香材として利用が出来るであらう。



No. 85 標本の火力乾燥 (金平)



No. 86 珍しいツルタコを得た筆者 (井上氏)

中食をすませて一行はブラウに向け出立した、道は下り坂でグングン進んだ、途中、頭上の樹木に黄極樂鳥が一羽止まつてゐるのが目についた、後でわかつた事だがこの附近には極樂鳥の止まる樹木があると云ふ、この鳥の「止る樹木」は定まつて居り、この樹さへ見付けて置けば殆ど一羽残さず打ち止めることが出来る。昨夜泊つた宿舎にも黄極樂鳥の剝製が軒に吊してあつたが一羽の極樂鳥が喧嘩して地上に落ちた一羽を捕へたものだ云ふ。この附近に多い譯である。

坂を下ると溪流に出た、渡渉してすぐ取り付きの小山を越えるとブミ川が悠々と流れ、少しく下ると河岸に沿ふ傾斜地に建てられた小屋に着いた。

ナビレの事務所との打合はせによる

と、今日の午前迄には丸木舟がブミ川を遡江してこの小屋に到着する豫定であつた、が今、川的面を見渡すと一艘の丸木舟も見えない、或は數日前の豪雨で川が増水したので上ることが出来ないのであるまいか、若し迎への舟が來ないとする私達は何日までも茲に滞在して待たねばな



らぬ、この旅行の宰配を振つて来た井上さんが心配し出した。

小屋から見下ろすブミ川はナビレ川に比べ格段と大きい、幅は広い處で二百米もあろうか、清い水が滔々と流れ、右手の岸に突當つた川水は大きな半圓をつくつて左に曲つてゐる。私は何を置

いても川に飛び込み汗を流した、河の對岸は畑の跡らしくバナナの幾株かが續いてゐた、苦力達は何時の間にか川を泳ぎ渡つて其大きな房を持つて来た。

水浴して小屋に着くと突然、雷鳴が谷に響き森の彼方に電光が閃くかと思ふと烈しいスクオールになつた、その間髪をも入れぬ電撃的な雨は熱帯の特色である。

一同は小屋に雨を避けた、小屋にはダマルの袋が一杯積まれ、幸じてその一隅を片づけベッドを組み立て雨の止むのを待つた。

間もなく下の小屋で苦力達の喊聲が聞えて来た、舟が下流から上がつて来たらしい、何か合圖の聲がする、一同愁眉を開いた、やがて川の曲りの一角に小さい丸木舟が一艘現はれ、次ぎに又一



No. 87 ブミ川下りの準備 (金平)

艘と次第にその數を増した。八十キロの川を遡上ぼるには六日を要するのだがそれを三日でやつ

て来たのだから彼等苦力達の疲労も思ひやられた。

三月十二日 (タンジョン・パンジャン)

朝、空を眺めると雨は止んだが、空はなほどんより曇つてゐる。直ぐ出立の準備にとり掛つた、荷物全部を丸木舟に積むことは一仕事で、食料は減つたがその代り標本が次第に増えた、これを工合よく積むには相當の苦心を要した。

先發隊として井上さんの舟が出立したのは漸く八時半頃であつた、川は思つたよりも急流で倒木が行手を阻む時には苦力達は直ぐ水に飛び込んで舟を操つた、か様な急流で私達が採り度い植物を見付け、突然「ストップ」とか「待て」とかを命ずると苦力は梶を取り損ね、舟を岸や岩にぶちつける危険がある、

出立前に井上さんから嚴重な注意を受けて居たので採集には暫く目を瞑つて進んだ。



No. 88 プラウから出立せんさする一行 (井上氏)



川を下るに従つて急流の個所も減り、河身は右に左に羊腸の如く曲り、流れも緩になつた、空は晴れ、太陽が頭上にちりちりと焼き付けた、川幅は廣く、水は岸邊に沿ふて流れ採集には便利であつた。會々ニクヅクモドキ (*Horsfieldia*) の實のある標本を取る爲めその枝に採集棒を引き掛けんとしたところ、その枝の付根に毒蛇がドロクロを巻き小鳥や木鼠の來るのをヂット待つて居るではないか、土人はこれを見付けると大聲で「アワス！」(危い!)と叫んだ。この蛇は叩き落すは易々たることだが丸木舟の上に着ると危険であるから舟を岸から避けた。

正午、河岸の小石原に上がり椰子の葉を敷き、いつもの飯盒の辨當を開き水筒のお茶を飲んだ。

舟は再び川を下つた、陽差しの熱は一層酷しかつた。密林は次第に疎開した、氾濫地帯であらう、孤立した樹冠には色々のツルが全く覆ひ被さるまで絡まつてゐた、中にも大きな蘭が幹に着生し、その葉は幅一尺もあるうか、日本婦人の帯を垂らした様で、舟を止めて樹に登らせ花を捜させたが時期が既に過ぎて居たのは残念であつた。

舟が下流に進むに連れ、流れは緩となり岸邊の植物は單純となつた、所々の砂洲には野生の甘蔗が一面に茂つて居た、採集すべき植物が少くなると人間の我儘が出て舟の進みも遅緩しく「漕<sup>モトカ</sup>げ! 漕<sup>ガム</sup>げ!」と急がせた。

大きな馬蹄形状に曲がつたタンジョン・パンジャン(長岬)の廣い河原に着いたのは太陽のま

だ高い頃であつた。今宵一行の露營する地點で川の縁に廣い洲があつた。

先着の井上さんはパプアを指揮して河原の奥まつた森を切り開いて小さい小屋<sup>ビバツク</sup>を建て、鶴に似た名も知れぬ大きな水鳥を射止めて吾等を待つて居た。

私達は荷物を丸木舟から河原に揚げ食事の準備にとりかゝつた、今宵は最後の夕餉なので高橋、山内兩君が日頃の腕を振ふた、河原に座席をつくり、蔭蔭の上にはトマト・スープ、王冠鳩の焼肉、水鳥のバター焼が列べられ、一同は祝杯を擧げた。

日が西に没すると空は全く晴れ、星は煌めき、涼しい風が川の上から吹いて來た、誠に愉しい夕べであつた。

私達は懷中電燈を便りに新らしく出來た小屋のベッドに入り、金巾の蚊帳を吊した、蛙が頻りに鳴きコウロギが何時までも是れに和した、それに河原に露營する苦力達の騒々しい話聲が止まず、暫くの間目が冴え、寝つかれなかつた。

三月十三日 (ナビレ宿舎)

朝、河原の苦力の話聲と森の鳥の鳴聲で目を覺し蚊帳を排して外を眺めると、星は森の隙間になほ微かに瞬いてゐた。夜の明けのを待ちかねて川邊に行き口を漱ぎ顔を洗ふた。

荷物を整理して一杯の珈琲を飲んでみると太陽は森の隙間から強い光で小屋を照した、この小



屋は私を記念する爲め「ビーバック・カネヒラ」と名づけられ、そのまま保存することになった。  
井上さんは私達をナビレ川の河口にペンタ（發動機のある小舟）で迎へる爲め一足先きに丸木舟で下つた。



No 89 ブミ川の岸に野宿した一行、その後方が急造の小屋（金平）

達を喜ばせた。

私達は河岸の日陰を見付けて上陸、中食を攝ることになった、枯葉の落下したヂメヂメした場所、私は靴を脱ぎゲートルを取つて莫藪の上に胡坐で食事した。後で氣付いたが兩脚全部、赤虫

私達は記念の撮影後、二艘の舟に荷物を全部積んで愈々出立した、天氣は好晴、川の水は益々緩漫、兩岸の樹木も平凡化し、明かに第二期森林に變つた、この岸で螺旋狀の實のなるツルタコを採集した外は格別の收穫は無かつた。

河幅が段々廣く、水は靜止して湖水の様、苦力は例の即興のパプアの歌を歌ひ始め、その都度、彼等は櫂を揃えて水を掻いた、中でも私の舟のフランシスは一番の美聲でその歌は川の面を傳はり他の苦力

の攻撃を受けその夜は勿論、痒みは數日間も續き、後には化膿して永いこと苦しめられた。

この河岸から更に川を下ると潮の香を持つた川風が鼻を打ち、海岸に近いことを知らせた。

左岸に黄色の實を結ぶ黄色タコノキ (*Pandanus*

*Lauterbachii* SCHUM. et WARB.) や分布の廣く矮生の赤い

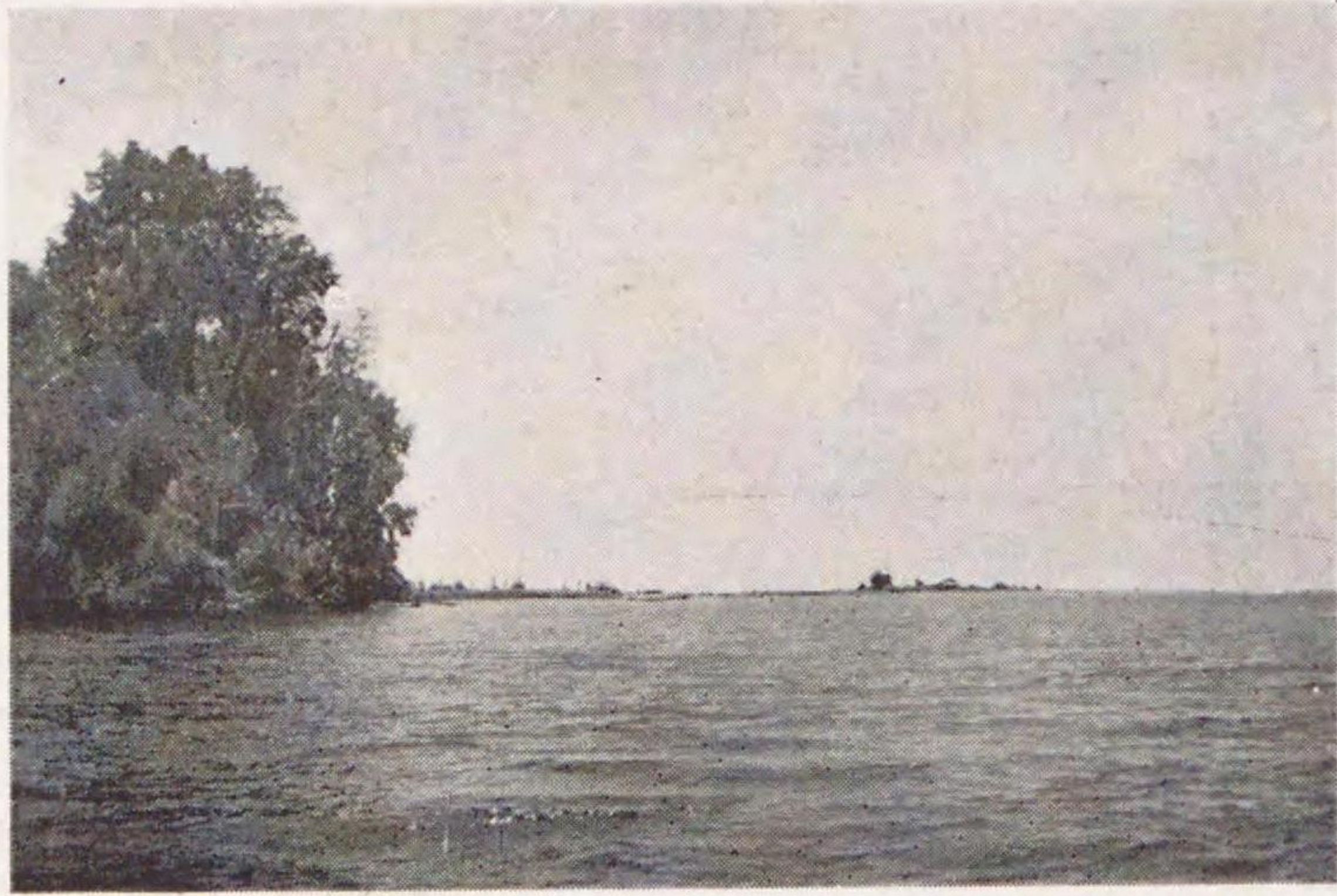
鶏卵大の實を結ぶ太平洋ウミタコノキ (*Pandanus poly-*

*cephalus* LAM.) があり又紅樹林のトヤフシキ (*Sonneratia*)

やニツパ椰子が出て來た。

舟は廣い川を二三回迂曲し遂に河口に出た。十六日間の密林の生活を脱出して廣漠たるヘールフィンク灣を望み、潮の風に吹かれた時は春を迎へた氣分であつた。

川口では豫期した迎へのペンタはまだ來て居なかつた、暫く待つたがその影も見せない、そこで私達は丸木舟をヘールフィンク灣の沖に出し海岸傳ひにナビレに行く計畫を立てた。



No. 90 密林生活を終へてブミ川の河口に出た（金平）

川口の波のうねりは山の様に見えたが巧みに切り抜け大洋に出た。沖に出ると小さい波も丸木



舟には大浪であつた、この大きな浪に飛沫を上げて漕ぐ苦力達は相當難儀であつたらしい、一時間も進んだ頃、遙か前方から白波を蹴つてペンタが進んで来た。私達は津久土氏が島民を連れて迎へに來たそのボートに乗り移つてナビレに向ひ、無事宿舎に歸つた。

私達はこの地を出立以來、始めて温浴を取つた、又心づくしの夕餉も特においしかつた、食堂から私の宿舎に歸ると空には鎌の様な月が出てゐた。

## (六) 再びナビレ滞在

三月十四日

昨夜は赤虫の爲め安眠が出來なんだ。

朝、ビスチュールから十時に役所<sup>カントル</sup>に出頭して呉れとの傳言があつた、私達は井上さんと共に掛けた。

私達のナビレ旅行にはマヌコワリ支廳の許可證を持つて居らぬ筈だ、一應取調べをして呉れと

茲のビスチュールに通知があつたらしい。實を云へば私達がマヌコワリに寄港した時間は僅に半日であり、ナビレ行を決めたのは夜半に近い頃で支廳の許可證を貰ふ暇は無かつた、又どここの官廳でも官吏に會へば何でも便宜を計ると云ふのを信頼して許可證は敢て氣に留めなかつた。兎に角、蘭印で旅行するにはすべての形式を備へて置かねば種々の不便が出来るであらう。

三月十五日 (滞在)

赤虫の痒みが次第に薄らいで來たらしい。

朝、標本の火力乾燥をなす爲、庭の一隅に四本の丸太を立てその上に鐵板を置き、下から薪を焚いた、鐵板の上の標本は天日と同時に下から熱せられて乾燥するから早く仕上げることが出来る、私は毎日之れを繰り返した。

午後、苦力にヘウタンカヅラの標本を取りにやる、これで三回目である、第一回目は時期が少しく過ぎ種子が脱出した後であり、第二回目は未熟であつた。このカヅラは何十米もある大木に絡つてゐる、是を伐り倒して採るのは簡單に行かない、今日は先づ成功したと云へやう。

三月十六日 (滞在)

未明、大東丸入港、この船で長谷川、加藤兩君がこの地視察の爲上陸した。







上がり海岸を散歩した。

ものゝ五分も立たぬと思ふ頃、土人の巡警が吾々の後から近づき一寸役所<sup>カント</sup>に来て呉れと云ふ、一同は云ふがまゝ役所に立ち寄つた。役所と云ふても椰子の葉で屋根と壁の出来た型通りの小屋、内部は二室に仕切り、一室に和蘭女王殿下と皇儲妃殿下の大きな寫眞額が掲げられ、その下で執務中の若い役人の言ふには

「大東丸に乗りモミに歸る日本人一行はこの地に上陸させてはならぬと云ふ通知（多分電報か）がマヌコワリから來てゐるから船まで引返して貰ひ度い」

吾々は一旦上陸した以上、このまゝ引返すも引返さぬも同じであるが、マヌコワリから豫め吾々の上陸を禁止する電報を打つと云ふことはおかしな話であつた。

大東丸は六時出帆、突堤には出稼の人達を見送る多勢の土人は船が港から影を隠すまで去らな

(八) モミ 滞在

三月十九日（滞在）

昨夜の海は静であつたが風がなく蒸し暑いこと此上もない、夜半二、三度目が覺め、一度は甲板に出て暫く涼を入れた。

朝まだ明けやらぬに汽笛が鳴る、船がワーレンに着いた合圖である。

東の空が白みかかつた頃上陸、黒山の様に海岸に集まる苦力達の群を抜けて農場<sup>ルマニデ</sup>の白家に入つた。

今日は好晴に恵まれ、陸揚げした荷物の整理、植物の乾燥、すべて仕事が捗取つた。

夜は大東丸でマヌコワリに出發する長谷川、加藤兩氏の爲め送別の會食が社宅のホールに開かれた。

食前のアペタイザーが濟んで準備が出来たと云ふ案内にテーブルに就くと大きな深目の白い皿が各自の前に置かれ數々の料理を盛つた鉢が机の中央に列べてある、各自はその欲する料理を自由に皿にとつて食べる、御飯<sup>ナシ</sup>は給仕人が金屬製の器に入れ西洋式に左の肩越しに勧めに廻る、こ



の食事法は西洋と支那の折衷で合理的である、卓上に食べ餘りの料理が残らず、又皿が亂れない、

我々日常の食事や會食に試むべきであらう。

夜九時半大東丸は兩君の外小杉部長を載せ出帆した。

三月二十日 (滞在)

私のベッド・ルームは社宅の客室で二個のベッドの外に衣服戸棚、机が置かれてある、私は一個不用のベッドを片づけ室内の大掃除をして貰った、前後の扉戸と二個の窓を開け放ち、室の隅に巢喰ふ澤山な蚊を室外に追ひ出した、私のスーツ・ケースはベッドの下に置き、書類、寫眞用品、薬品を衣服戸棚に納めて大體の整理を終った。又倉庫を清掃して私達の採った標本の收納所となし整理したものを順次に茲に入れることにした。

又家の周圍に散亂した空罐や反古紙、木片などを片づけた。



No. 92

モミ農場入口

(井上氏)

三月二十一日 (滞在)

春季皇靈祭、内地は次第に春めいて來たであらうが常夏の熱帯では寒さ暖さの想像がつかぬ。

初島君はモミ最初の採集に出掛け、主に農場の周圍の林縁と丘陵地帯とを歩いて來た、その報告によるとナビレの植物とは大分違ひ大部分は初めて見る植物であるとの事であつた。

三月二十二日 (滞在)

教會の祭典日で苦力は休日。終日雨、農場には慈雨、私達は火力で標本を乾燥した。

私はかねてアンギ湖行を計畫しその旅行の許可證をマヌコワリ駐在のA・R(副理事官)から貰へるものと考へて居たがA・Rは一應バダビヤ政府の許可が必要であるとの理由で確答を與へず、その手続きも遅れ勝になり、果して行けるのかどうかと危ぶんだ。

そこで領事官の長谷川君を煩はし、直接バダビヤ政府に打電し速に許可になる様懇請したがその後何等の音沙汰がなかつた、そこで同氏は三月廿一日、大東丸でマヌコワリに着くと直ちに役所を訪ねてA・Rに面會しその後の成行に就て訊ねた、同君の通信によるとA・Rの説明は次の通り。

「昨夜(三月廿日夜)バタビヤから返電があつた、日本總領事の正式の申出には金平博士はモミを調査するとある、今是れを變更して最初の申出と異なる行動を許可することは日本總領事に對し工合が悪い、博士も亦最初の計畫と違つた行動をとることは總領事へ申出たことに反する



から責任を感じるであらう。又この申出は日本總領事を経由して欲しかった、然し今回は元よりその行動を援助する意思であるから是れを許可する」

「又ホランジャとサルミとは K・P・M 汽船で旅行することは差支へ無いが歐人官吏の駐在せざる地には上陸を禁止する」

私がバタビヤで總領事に對しモミだけの調査を申出たと云ふことはあり得無い事で辻褄が會はぬ、何等かの間違であらう。

蘭印の旅行には豫め出来るだけ精しい地域と日程とを作製してその許可を受けて置けば問題は起らない、この點私の手ぬかりであつたと云ふ外は無い。

三月二十三日 (滞在)

赤虫による脚部の化膿が段々と廣がり仲々癒らない、初島君は附近を採集、同君の報告によると海拔の高いダルマン地方の植物が平地に相當出現してゐると云ふ、或は硫黄泉の爲ではあるまいかと想像した。

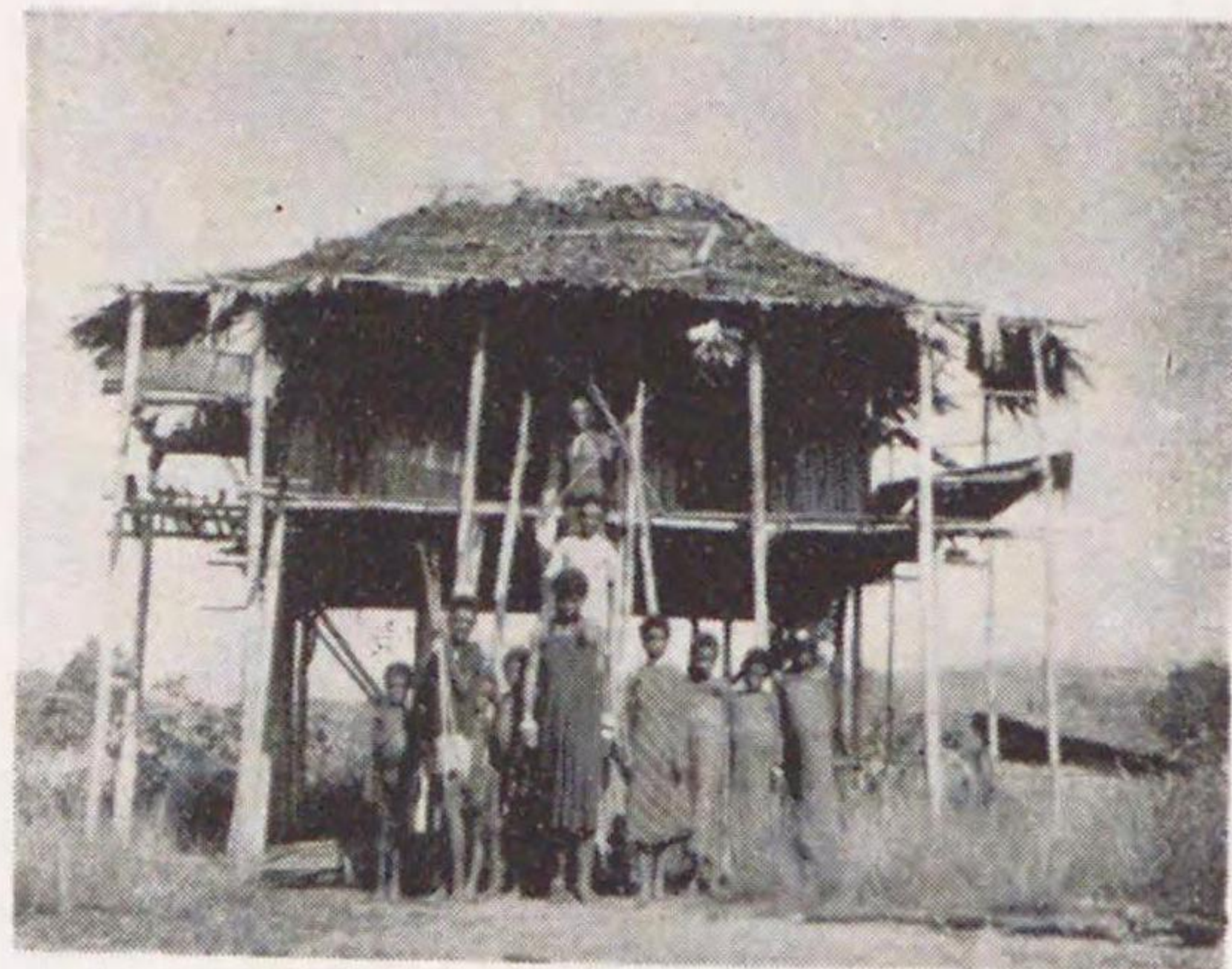
三月二十四日 (滞在)

日曜日、朝から天氣よく、冷い微風が吹き爽々しさを覺えた、午後、農場職員の野球試合、初島君が投手として活躍したが途中驟雨の爲めドロン・ゲームとなつた。

三月二十五日 (滞在)

今日も苦力の休日らしい、家居して植物を乾燥した。

三月二十六日 (滞在)



No. 93 マネキオン家族(其一) (金平)

田山、初島兩君は一泊の豫定で、近くの山に採集に出掛けた、私は脚部の化膿のため静養した。

午後マヌコワリから入電、「アング湖行の案内としてコントリール、大東丸にてそちらに行く」とある、だが大東丸の日程が不明なので、どう仕様もない。

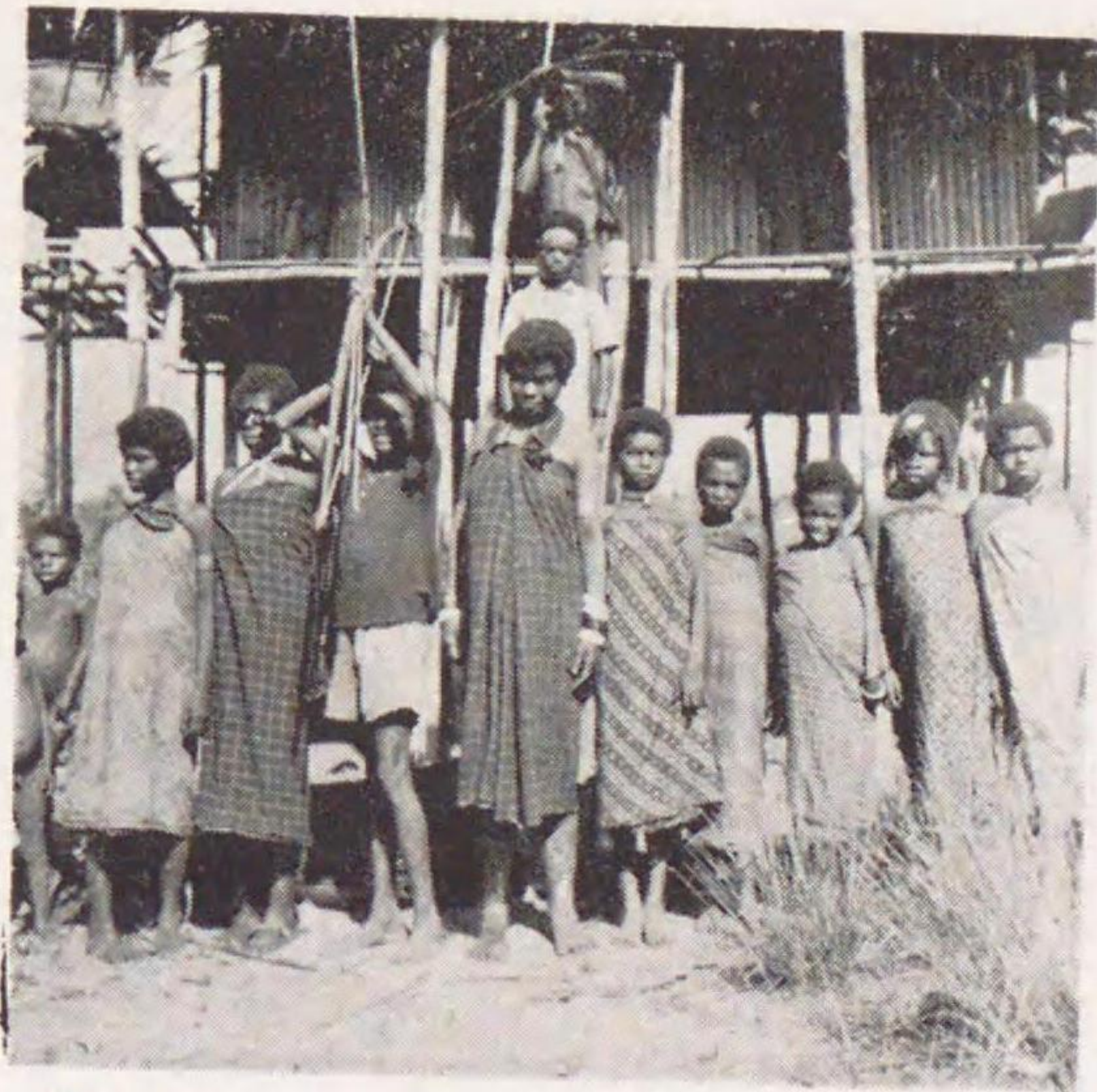
三月二十七日

ナビレからモミに上陸して以來、脚部の化膿で一度も外出出来なんだ、今日は久し振りに農場とマネキオン族の部落を見ることにした。

朝、案内の爲め農場の岩田君が私を迎へに來た、私達は農場内の碁盤の如き畑の道路を過ぎ之れに接する密林の中に入り、暫く雨水の溜つた泥土の中を進むと切り開いた叢林中に二軒の床の高い土人の家が見えた、マネキオン族の部落で近くなほ二、三軒あり、何れも一軒の中に土人



が十數乃至數十人も同居してゐると云ふ、私達はその一つの小屋を訪れた。  
家は高い丸太の支柱で床を造り椰子の葉で壁と屋根とが出来てゐる、「カパラ」即ち「村の頭」は  
見かけた處三十歳にもならぬ若者で外に多勢の家族が居た、私は來意を告げ寫眞を取らせて呉れ



No. 94 同上 (其二) (金平)

まいかと頼むとカパラは森に向ひ大きな聲で叫んだ、  
何の意味かと案内の岩田君に訊くと、寫眞を撮るから  
皆んな早く歸へれと云ふのだつた。山仕事に出てゐた  
者が十餘人も歸つて來た、私はカパラを中心に彼等を  
家の前に立たせた。

一體、マネキオンはこの附近の山地に住む種族で猛  
悪な性質を持つてゐる、然し今私が相手にしてゐるこ  
のカパラと其一族とは山から移住した者で常に平地の  
土人と接觸して居るから何等の特色が無い、着物もチ  
ヤンと着てゐる、私は出来るなら彼等の原始の姿を寫眞に撮り度い、そこで列んで待つてゐる婦  
人に「その着物を除つて呉れまいか」と告げるとカパラは「不可! 不可!」と云ふ、私は「ではよろし  
い」と答へて直に一列に並んだ家族の寫眞を撮り彼等一人、一人にシガレット一本宛を與へた。



No. 95 原始姿のマネキオン婦 (金平)

私は今度は煙草の包を示し「その着物を除つて寫眞を撮らせるならこれを一包やるがどうだ」と宣言した、そうして同時に適當な婦を物色して手招したら眞ぐ飛んで來てカインを取つた、寫眞が済んで私は約束の煙草一包を彼女に與へた、之れを羨しそうに見て居た他の婦達は「私もカインを取るから寫して下さい」と申出た、私は「モ  
ー澤山」と手を横に振つた、マネキオンも懸引が要  
る。

部落を辭した私は元の道に引返して農場に出た、  
大きなカタピラーが動いてゐた、日蔭一本もない畑  
の道をとぼとぼと歩き、大きな鐵木の切株の上に作  
つた休小屋に上り涼を入れた。

歸途、第二農場の事務所立ち寄り、裏手の畑にキ  
ヤベツ、ネギ、セロリ、ナスビ、トマトなどが植え  
られ相當の出來榮えである、熱帯生活に一番不自由なのはこの野菜類で、都會地ならばその附近  
の高原地に菜園を經營し供給するのが普通であるが、田舎ではそんな譯に行かぬ、この農場では  
流石にお手のものでこれだけあれば農場員の需要を充すに足りるであらう。



冷したおいしいパパヤの御馳走になつた後、この事務所に近い製材所を見た、据付けて間もない新しい帯鋸で鐵木の角物と板材とが挽かれてゐた。又工場に接してジュートの栽培畑があつた、このジュートは印度のガンニー袋の原料である、試験が好成绩なので今年は大規模の栽培が



No. 96 モミ農場のカタビラー (金平)



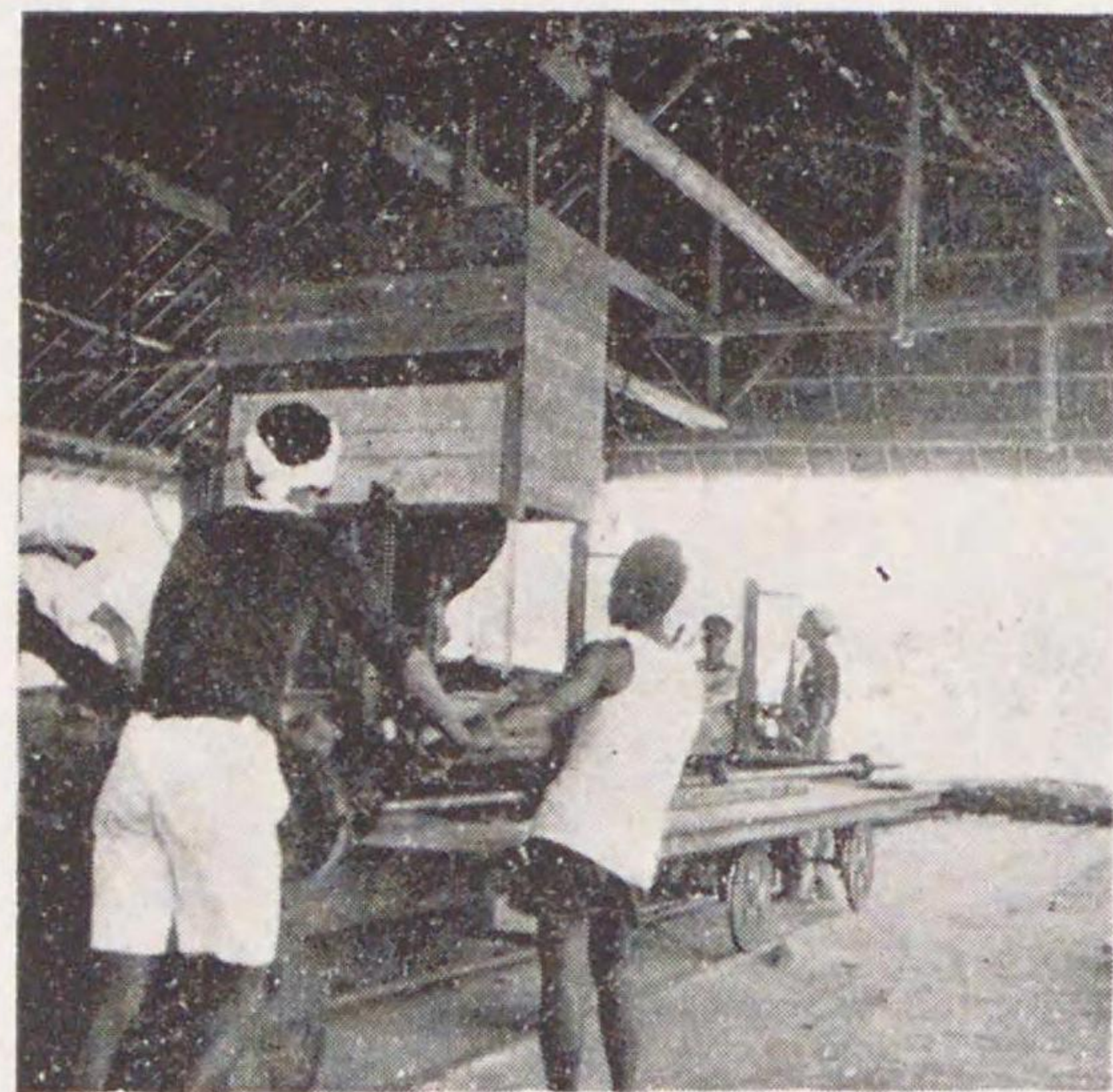
No. 97 同 菜園のキヤベツ (金平)

計畫せられてゐる。

午後一時に宿舍に歸つた。

三月二十八日 (ランシキ官營ゴム農場見學)

今私達の居るワーレン農場の西にアンギ湖から流出して海に注ぐランシキ川がある。この川の氾濫地帯である平地は丘陵に圍まれた緩傾斜の沖積層で茲に爪哇政府のゴム栽培試験場がある。



No. 98 同 鋸工場 (金平)

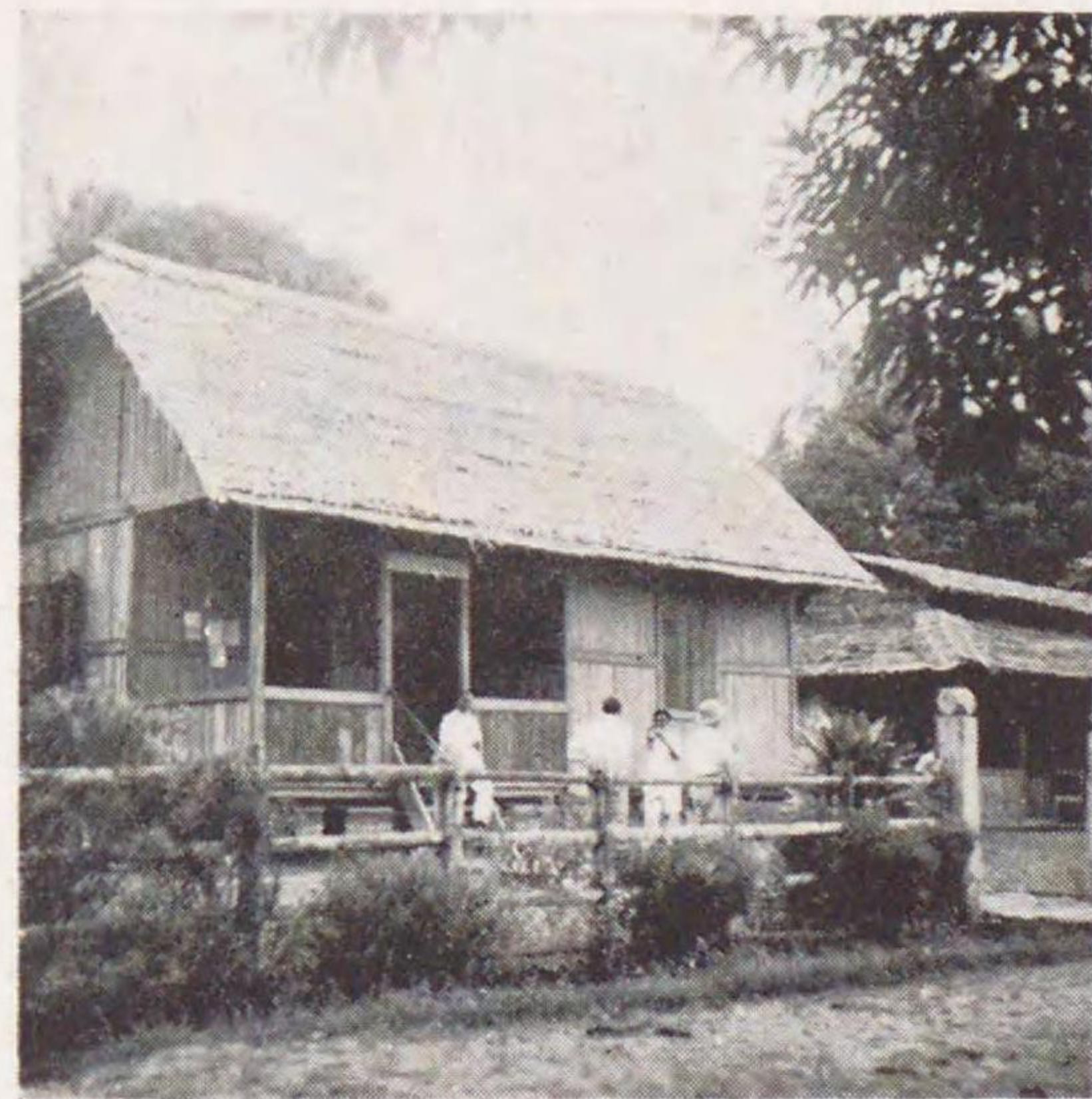


No. 99 同 ジュートの栽培と害虫を取るパプア婦 (金平)

私達は朝、六時半、五臺の自轉車を列ねて出立、農場を抜けて一旦海岸に出で、茲に立ち列ぶ苦力小屋を左に見て、濱邊傳ひに西に進むと華僑の店が幾つかあつた、興發會社が農場を開いた當時、僅に一軒の店があつたのみだが今はその數も増え何れも有福にやつてゐると云ふ。



走ること五キロ、モミの役所<sup>カントル</sup>に着く、ビスチュールの駐在地である、役所の前にはランシキ農場から来た自動車が我等を待つて居た、私達は広い道を驀地に走つた、一キロ毎に立てた鉄木の標柱には素朴な人形の彫刻があつた、これは土人の作に違無いが雅趣があり又微笑ましくもあつた。



No. 100 モミ役所 (金平)

道の両側の森には種々の椰子科植物が見え、高い



No. 101 キロメートル  
ポスト (金平)

樹には蔓が一面に絡み、茲でも例の黒い<sup>ブロンクラン</sup>歳鳥が群

をなして空を横切つた。

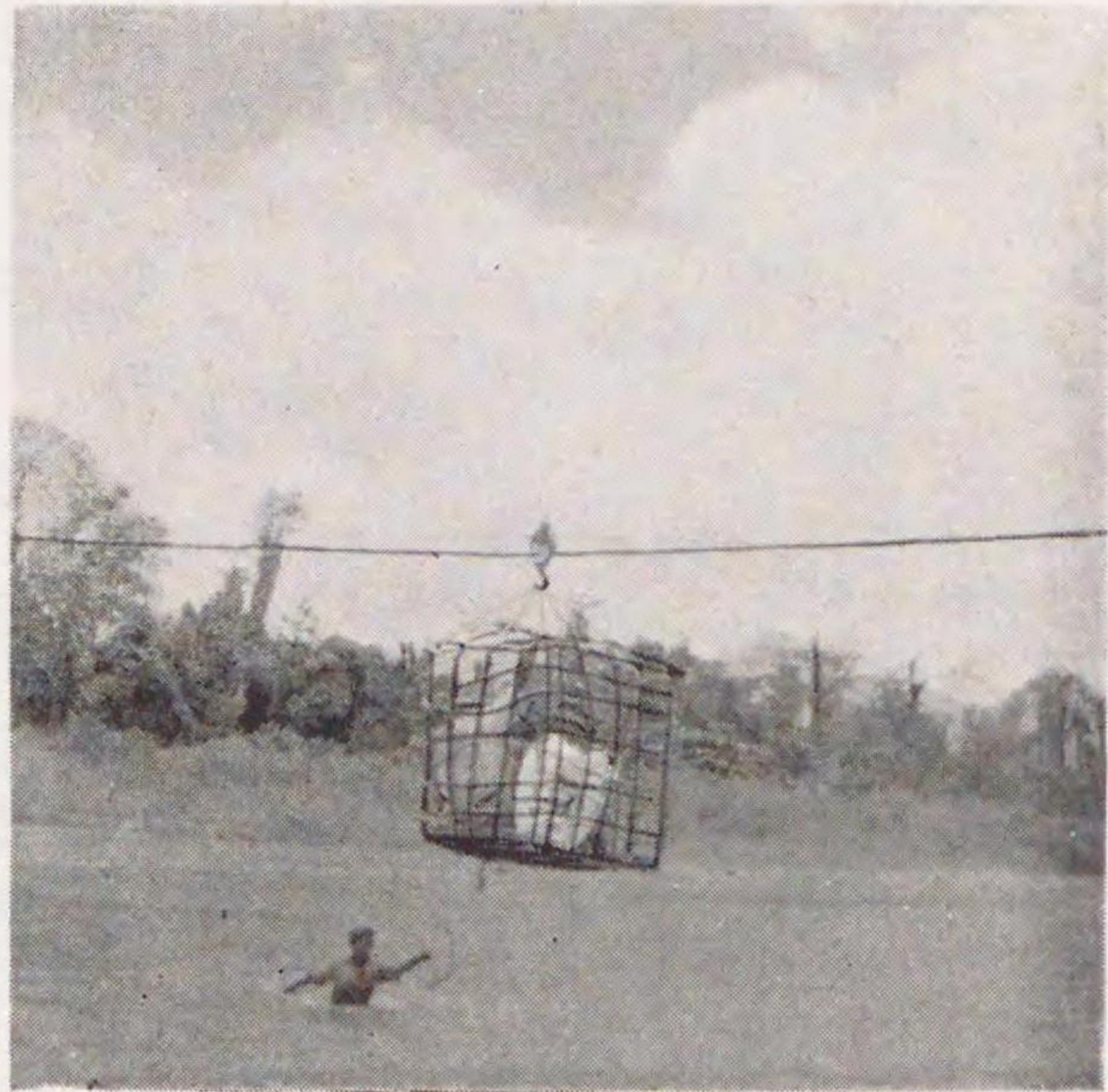
走ること五キロ、ランシキ川につき當つた、川幅三十米計り、濁つた急流、橋の代りに二本の太い鐵索が兩岸から架けられ、籐製の籠の中に人を乗せた儘、この鐵索に吊して河を渡した。

川を渡ると又別の自動車が我等を待つて居た、走ること更に四キロ、農場に着いた。

此農場はゴムの生産制限令以前の開設に係り、ニューギニヤ唯一のゴム園である、場長フオルスター君が吾等を迎へ、同氏の案内で農場に出ると廣々としたゴム園が眼前に展開した。

先づ優良品種の芽接苗床に行く、一ヘクタール二、四〇〇kgを産出する爪哇の有名な、一三二〇號の苗木があつた、長さ三米計りの苗で、長さ一米につき四盾、一本の苗木代十二盾であると説明した。

此苗の莖に出来た一つ一つの幼芽を中心に、短冊形の切目を入れ、樹皮を剥ぎ取り接芽にする。他方、接臺にはその臺木の根元に接芽と同形の



No. 102 籠に乗つて川を渡る (金平)

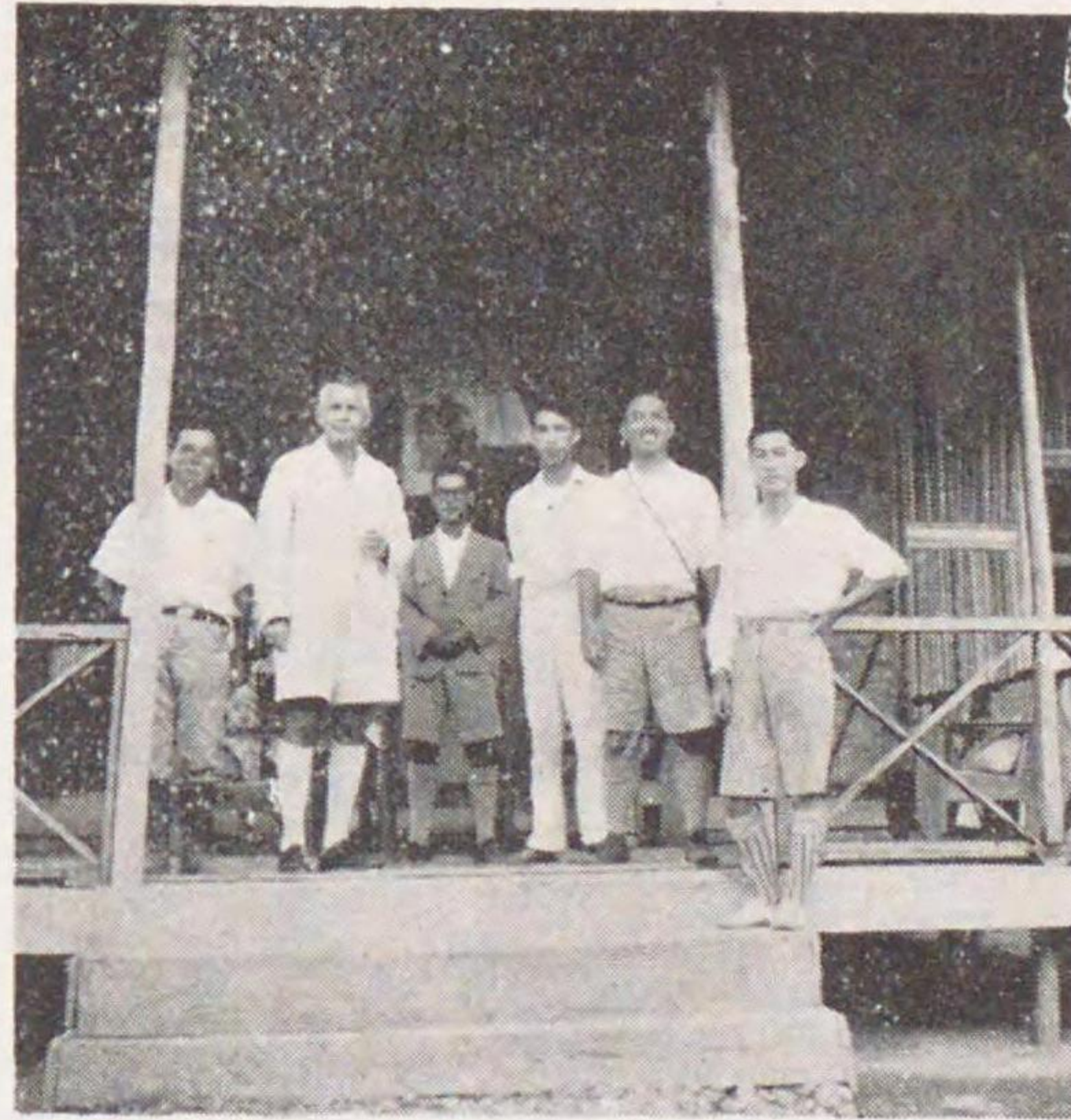
短冊形の切付けをなし前の接芽を是れに嵌め込み、樹脂に浸したバンドで巻きつける。

接芽が活着すると臺木の上部を切り取る、そうしてこの接芽が新に萌芽を始める迄が苗木の休眠期でその時掘取りと輸送とが出来来る。



とかう説明した。

此試験場にはゴム苗圃二十ヘクタール、六十萬本の苗木が養成せられ、四百ヘクタールの栽培地一面には *Centrosema* のカヴァー・クロツプが植えられてゐた。



No. 103 ランシキ・ゴム農場を訪れた一行 (金平)

場長は炎天下に無帽で熱心に説明した、そうして此の広いゴム園に植えた一本、一本の樹に無限の愛着を持つかの如く、道を歩きながらも傾いた苗は起し、絡まつたツル草は除いてやる、如何にも大切にこれを愛護する様子を見て、何事をするにもこの熱意と真心とがなくてはならぬと感じた。

場の一隅に製材所があつた、框鋸の一種、舊式で堅牢そうな機械、鐵木を板に挽いてゐた。

場長は私達を新築して間も無い苦力の「百人小屋」に案内した、場長自慢の小屋らしい、内部を見たが清潔でもあり又整頓してゐた。

最後に彼はその宿舎に案内した、途中三色旗の翻る事務所、無電所、倉庫の一部を通り抜けた、美しい花壇が道の兩側にあつた。

場長の宿舎は例のアダツプ葺の粗末な家、玄關の広いヴェランダから應接間に入ると厚い絨氈が室一杯に敷かれ、革張りの椅子、美事な書棚やラデオが備へられ、珍しい土俗品が棚や壁に飾つてあつた、その高級な調度品に一同は目を瞠つた。

場長はもう相當の年配でその温顔は誰れにも親しみを持たせた、大きな椅子にゆつたり腰を下ろし葉巻を銜へながら一同に、煙草や、ウキスキー・ソーダを勧め、靜かに會談した。

歸路は往路と同じで、宿舎に着いたのは午後一時。午後小雨があつた。

三月二十九日 (滞在)

朝十時、大東丸がナビレから入港した、ナビレの宿舎を引き上げる爲、同地に迎へに行つた井上さんが夫人を伴ふて歸着した。



No. 104 ルンバルボン行のランチで朝食をさる一行 (金平)

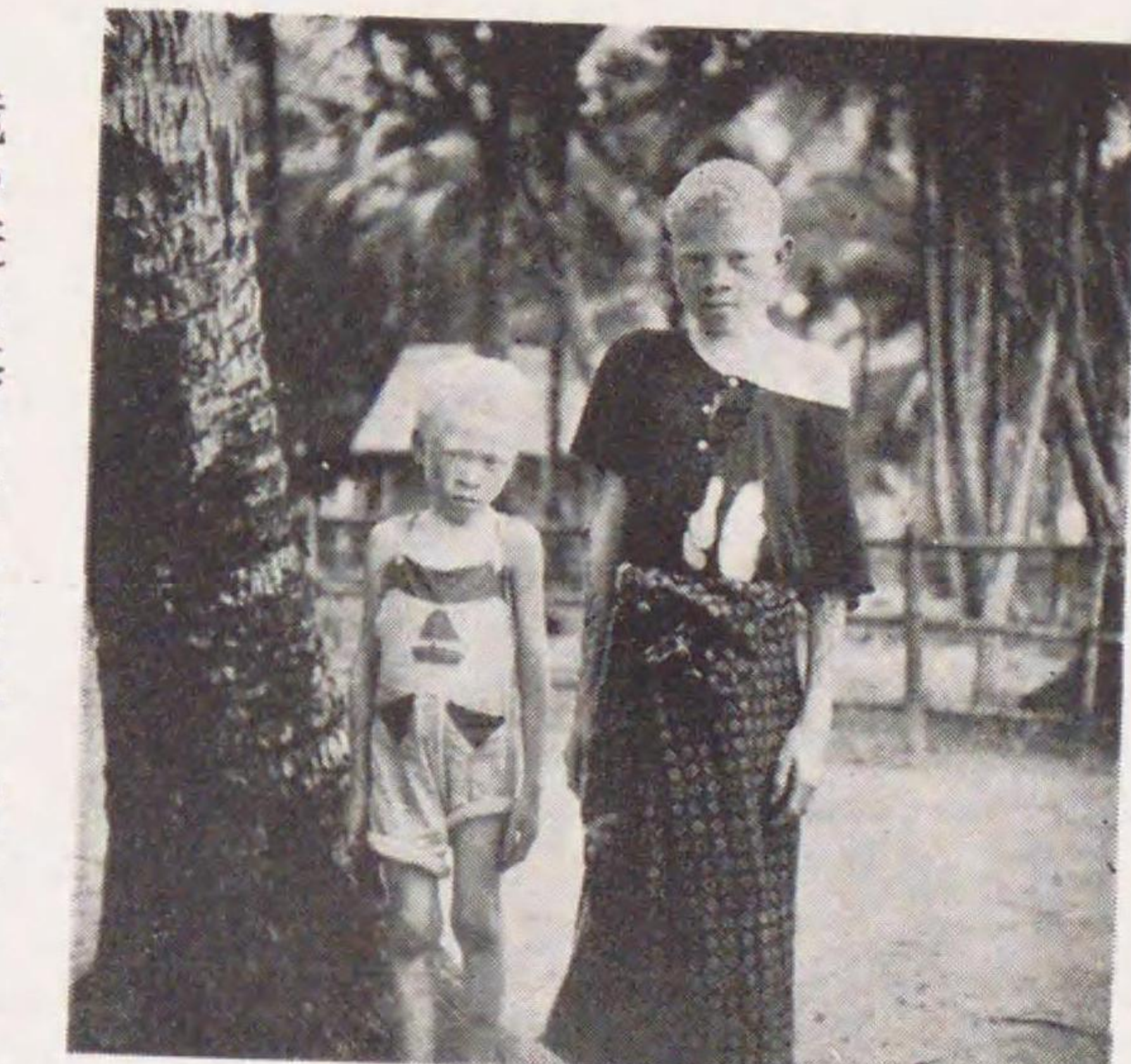
三月三十日 (滞在)

朝、食事をしてゐると屋根の上の方で飛行機の爆音が聞えて來た、ヴェランダに出て空を仰ぐ



と大型の水上げ機が農場の上を低空で飛び、一周して何れかに去つた。  
午前、田山、初島の兩君は場員の二、三を伴ひ附近の温泉地帯を採集に出掛けた、この温泉は農場から凡七キロ計りの地にある溪谷に湧出し、卅五、六度の透明な炭酸泉だと云ふ。

私は宿舎に居残り土人相手に植物の乾燥を手傳つた。  
三月卅一日 (ルンベルボン島視察)



No. 105 パプアの白子 (金平)

鏡の様な海に白い飛沫を蹴立て、沖に進むと、すぐ目の前に鱻の群が物でも轉ばす様にその脊中を水面に出没させた、幾度もカメラのレンズを向けたが失敗した。  
一八哩の海上を一時間で走り、島の一角に到着、入江の砂濱に上陸した、人の氣配の全く無い叢

林が續き、珊瑚礁にはクチナシモドキ (Rikbia) の大輪の白花が咲き亂れてゐた、この砂濱で多少の採集をしたが思はしくなかつた。そこで舟を沖に廻してこの島の南面にあるヘンホベキリと云ふ部落に着け砂濱に上陸した。パプア土人の家が十數戸、海岸と平行して規則正しく並び、道路もよく清掃せられ、椰子林が一面に茂つてゐた。我南洋群島の離島と變りはない、村長を始め土人、子供が周圍に群がつて來た、うちに白子の小供が二人混じて居るのが目立つた。

村長の家を訪れると軒下に長さ二尺もある大きなヒラアジの燻製が澤山吊され、蠅がたかつてゐた、その一尾を幾何かの金を出して譲つて貰ひ、外に一個一仙と云ふ若い椰子の實、二十五個を求めてボートに戻つた。

ボートはこの島の對岸、即ちニューギニヤ本土の一部の濱邊に進み白い細砂の岸に上がった。森蔭にマネキオンの家が一、二軒見えた。

濱邊に椰子の葉を敷き、持參した辨當を開き囊のヒラアジを炙つて齧り、椰子の實の水で渴を醫した。

No. 106 發火器



竹製の發火筒中に瀬戸の破片とホクチが入れてある (原圖)

眞裸の黒いマネキオン二人が何時の間にか私達の傍に來た、二人のうち



一人は竹筒の發火器を持つてゐる、煙草一包みと交換した、瀬戸かげにホクチを添え筒にうちつけ發火させるのだ、私は竹筒の中の引火物即ちホクチは何であるかと尋ねて見た、馬來語を僅に知つて居る彼れの説明によると一種の椰子の葉柄の基部にある絨毛であるらしい、又この竹筒の木栓は「漂流する輕軟材」即ち *Alstonia spatulata* で作られてゐた。

歸途は本土の海岸に沿ふてボートを走らせ一時間半で歸着した。

四月一日 (滞在)

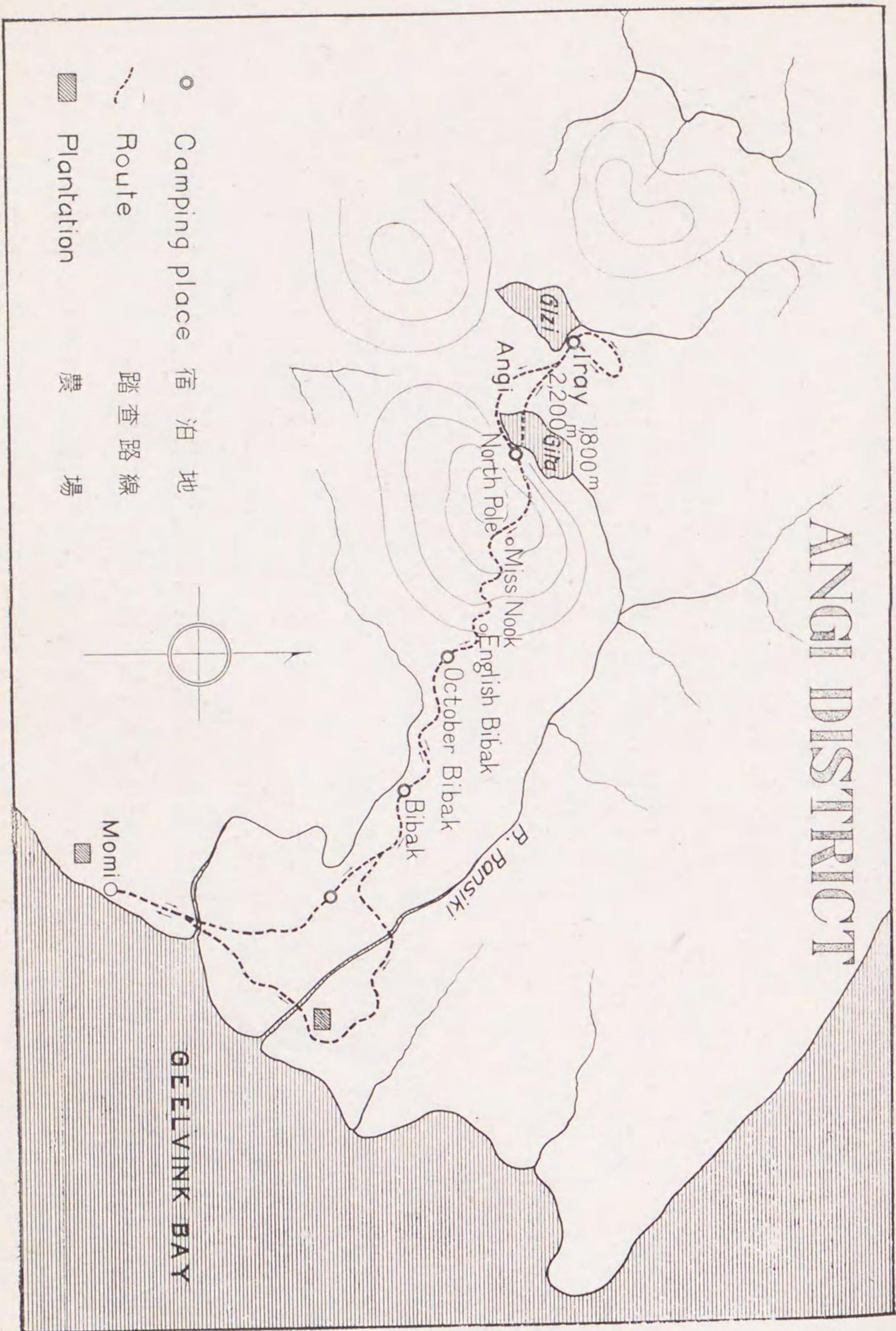
新年度に入つたかと思ふと歸心が募つた、

終日アンギ湖行の準備をした。

### (九) アンギ湖探検

四月二日 (滞在)

早朝、私達のアンギ湖行の案内としてコントリールが兵士十二名を引率し、マヌコワリから大東丸でモミに上陸したことが同船した小杉部長の歸場によつてわかつた。そうして同氏を経て



No. 107 アンギ湖地方略圖：Gita (女) 湖と Gigi (男) 湖を合してアンギ湖と云ふ。(原圖)



「今日午前十一時、ランシキより直ちにアンギ湖に出立し度いから、その準備をせられ度し」との傳言がコントリールから通ぜられた。

私達は豫て出立の準備はしてゐたが、此の急な出立には少しく慌てざるを得なんだ、然し直ちに旅装を整へ必要の品を荷造りし、四十一人の苦力に配分し、井上さんを宰配として山内、遠藤兩氏之れを助け、一同農場を出立したのは十時であつた、十一時に指定の場所に到着した。

私達の案内役としてマヌコワリから来たコントリール、ムルダー君は、私がマカツサーから同地に航海中、ソロン港から同じ船で赴任したので面識があつた、今日は大きな金の徽章を着けた白いヘルメット、カーキの正服でゲートルを履き、颯爽たる姿でツカツカと近づき私を迎へて握手した、私は同行の田山、初島兩君をム君に紹介した。

次に私は、私達一行の世話役を勤める井上さんを紹介した、ム君は私を振り向いて「井上さんとはどう云ふ人か」と尋ねた。

井上さんは私達の連れて来た苦力の監督、採集の手傳をする興發會社の社員であり、なほ外に二人の同行者があることを私は説明した、するとム君は

「自分はバタバヤからドクトル、金平、外二名の案内及び護衛の命を受けてやつて来た、従つて此三人以外の日本人に就きては何等の通知を受けて居らぬから同行を許す譯に行かぬ」

と云ふ。

私は

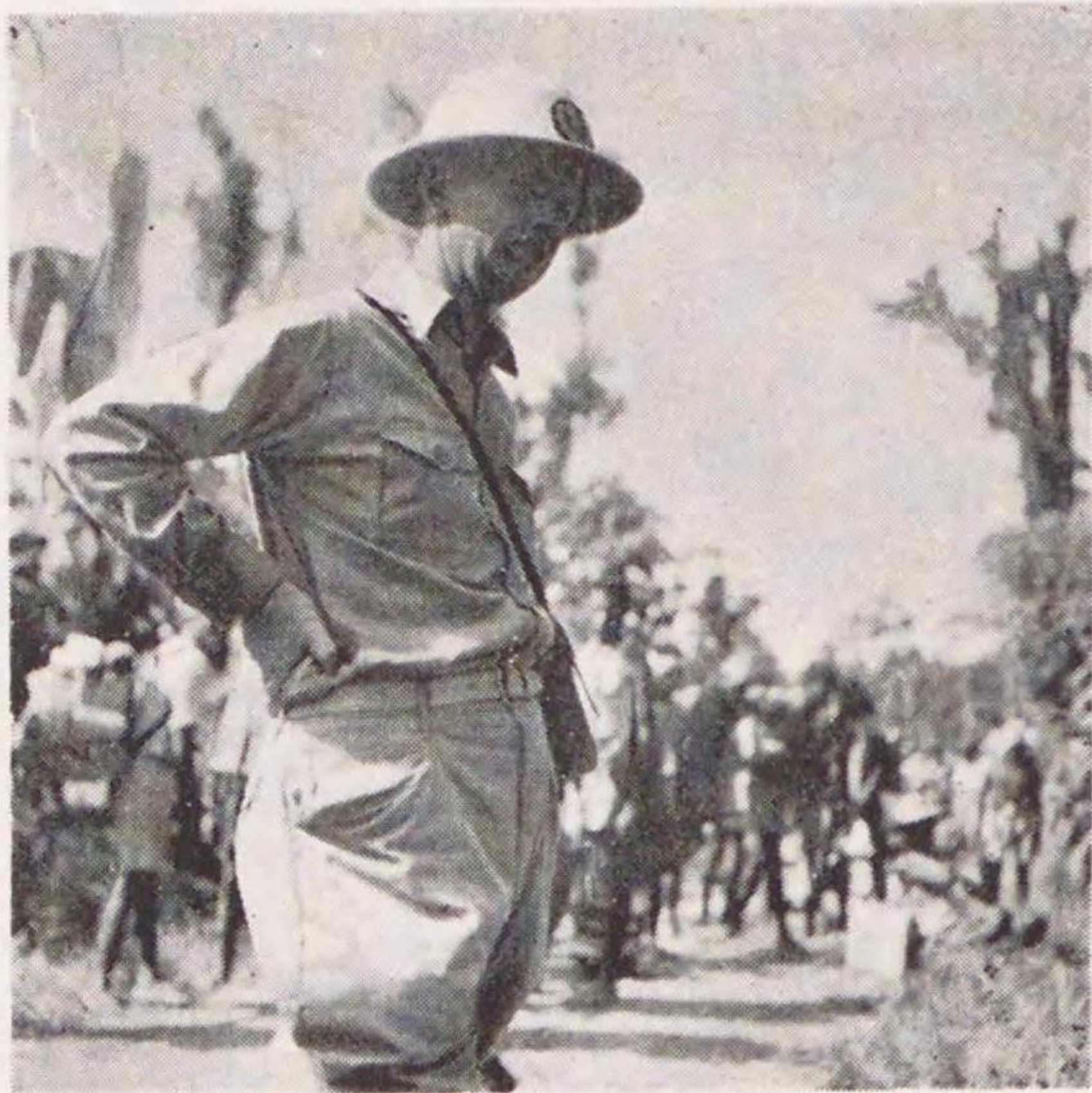
「理由はわかつた、だが私共三人は馬來語に通じない、是れだけ多くの苦力を連れてどうして彼等を統御し且つ監督が出来るであらう、是非、同行を許して貰へまいか」

と頼んだ、然しム君は頑として頭を縦に振つて呉れぬ、ム君は

「馬來語なら自分が通譯するから、何でも申出なさい、私が助けますから」

と云ふ

此光景を見て居た井上さんはム君に流暢な馬來語で「ドクトル金平は歳も取つてゐます、もし萬一、途中で一人だけで良いから同行を許して貰へんものでしやうか」



No. 108 コントリール・ムルダー君 (金平)

と重ねて頼む、ム君は



「一人でも三人でも同行は同じことだから許す譯には行きませんが、ドクトル金平が坂道で弱つたなら、私が後から押し上げてやりますから心配は要りません」とかう笑談を云ひながら遂に許して呉れなかつた。

そこで三人の随行者を連れることは断念せねばならぬとわかつた私は田山、初島兩君を呼んで、

「かうなつては仕方が無い、旅行中の不自由は勿論、採集も思ふ様に行かぬかも知れぬ、然し是は我慢することにして視察だけでもよいから元氣を出して行くことにしやう。然し今直ちに出立することは困る、第一、荷物が随行者の分と一緒に居るから是を分けねばならぬ、今夜、荷物を解いてやり直し、明日出立することにムルダー君に交渉しやう」と諮つた、二人は是れに同意した。

私はム君に理由を説明して出立を明日に延期することを提言した、ム君も異存は無かつた。

私共は一先づ宿舎に引き上げることになりム君と明日を約して訣れた。

私は暗い氣持に襲はれた、しかし考へて見ると前のナビレの山奥の探検はあんまり樂過ぎたとも云へる、異境の蕃地に入る以上、もつと不自由を忍ぶ覺悟が必要である、明日から出掛けるアング湖行はよい經驗となるであらう、とかう元氣をつけた。

是が私の氣持であつた、他の兩氏も恐らく同感であつたに違ひ無い。

ランシキから宿舎に歸る途中、支那人の店に立ち寄りヴェランダを借りて中食、雨の降る道を歩んで宿舎に歸つた、雨は夜になつてもなほ止まなんだ。

四月三日（森林に宿營）

アング湖出立の日である。

朝七時半、朝餉を濟ませ、昨日と同じ道を自轉車を列ねてモミの役所<sup>カントル</sup>まで走つた、私達は日本人の同行を許して呉れぬので農場の人夫監督、即ちマンドル一人を連れて行くことにした。

マンドルは通常アンボン人で普段、苦力を監督し腰に必ず革の鞆を下げてゐる、この鞆には苦力の勤怠を記入する帳面とか傳票が這入つてゐるらしい。

處がモミのビスチュールは私の伴れて來たマンドルのアング行を許して呉れぬ、是れには少々癢に障はつたが井上さんの説明で漸く同行を認めて呉れることになつた。

約束の九時に私達一同は指定の場所に到着した、昨夜荷物を分類して此小屋に假寝の一夜を過ぎた山内、遠藤の兩氏が迎へて呉れた、案内のムルダー君と下士官のブリーミング君はもうチャンと仕度を終り兵隊を整列して待つて居た。

苦力が擔送する荷物を適當な重さに分配してやることは容易な仕事ではない、従つて出立が出



来るまでは相當の混雑を呈した。



No. 109 アンギ出立の直前、一行4名の外兵士12人、苦力50餘人が整列した (ムルダー氏)

聽て準備が完了したらしい頃、ブリーミング君は出立用意の呼笛をビリビリツと吹いた。

先頭にはメナド人の兵隊、二名が弾を込めた五連發銃を脇に「構へ」の姿勢で進んだ、其後に下士官のブ君、次ぎに私、そうして私の後がムルダー君、是れに田山、初島兩君が續き、その次はアンギ駐在のビスチユール、パテルジャワ君、それから兵隊十名が銃を擔つて一列に並び、最後に苦力が合計五十人計りついて來た、此隊形は初めから終りまで變らなんだ。

道はランシキ道路に沿ふ倉庫の横手を左に曲り草原に這入つた。此隊形を組んで進發する吾等を見送る井上、山内、遠藤の三君は私達三人の不自由を心配しながら此壯舉に加はり得なんだことを残念に思つたに違無い。私は草原を過ぎ、愈々森に入らんとする時、未だデット私達を見送つて呉れる三氏に對し手を舉げて振りながら「行つて來ます」の

合圖をした。

始めの間、道は平坦、その幅廣く、兩側の森林に別に變つたものも無く平凡であつた。私達一行合計八十人計り、話すは私とム君か、或は下士官のブ君だけで、誰一人、物を云ふ者なく沈黙の行列が續いた。

ム君は私に

「ドクトル、カネヒーラ、疲れて休み度い時は何時でも云つて下さい」

と云ふ、私が一寸立停つて涼を入れると一行全部がバツタリ止まつた、私は成るべく、一行の邪魔にならぬ様に、採集は一切初島君に委ね、特別の場合の外は手を出さなんだ、然し初島君が植物を採る毎に兵隊以下、苦力の全部が行進をやめて待つて呉れた。

この調子で行進するなら採集も容易ならぬわいと心配した、然し後になつて杞憂に過ぎなかつたことを知つた。

私達が出立後、二キロも平地の森の中を進んだと思ふ頃一つの事件が生じた。

私達は森の道を進むうち、さゝやかな小川を横ぎつた、この小川は森の奥から湧出する水が低地に流れ來たものであらう、溜水の様な川になつて居たに過ぎぬ、田山さんがこの川を横ぎる時立停り、野帳を出して何か記入した、すると田山さんの後に續く部隊が全部停止したのでム君が



一寸後方を振りかへる途端、その野帳に目が留まつた、ム君はその野帳を一寸拜見と云ひつゝ、手にとるや、バラツバラツと頁を開いた、先きに進んで居た私を呼び

「ドクター・カネヒラ、この野帳は何ですか、これはトポグラフィではありませんか、植物とどんな関係があるんですか」と尋ねた。

私は

「植物と直接の関係はないが林相とか植生の研究には参考になる、然しそれよりも、田山さんはその専門とする學術上の参考資料にするんです」

と答へた、然しム君は何か疑惑の目を以て見たらしく、兎に角この野帳は茲で御返へしする、後でマヌコワリ支廳に提出して貰い度いかどうか、と諮くから私は無論差支へないと答へた。

ム君がバタバヤから受け取つた電報にはどうして間違へたか「ドクトル金平の外に助手二名」としてあつた、だから田山さんを植物の助手と考へたので何か疑を持つたのであらう、私は田山さんの専門と経歴や業績を述べ、爪哇政府には入國の際、通知が済んで居り、又マヌコワリに着いた時、旅券の査問にも職業を明にしてあることを説明した。

それにしても御互が不愉快の思ひをしたことは遺憾であつた、且つ又田山さんの立場は少しの疚しいことは無いに拘らず一時とは云へ色目で見られたことは心外であつた。後でわかつたこと

だが、その時ム君は竊に使者をランシキに派し無電をマヌコワリに打つた。尤もこの旅行中ム君と吾々とは段々親しみを増し、疑は全く晴れた、そうして一度取り上げた野帳は我々が歸朝後、返却して來た。

この森を抜けると丈の高いカヤの草原に出た、陽は既に高く、蒸される様な暑さを堪えながら進んだ、前のナビレの経験からするとこんな場合には苦力とはかく落伍したり、不平を云ひ出すに定まつて居る、然し今度は落伍すれば周圍に住んで居るマネキオンの襲撃が心配になり、又不平を云へば兵隊が恐ろしい、彼等は従順にならざるを得なんだ。

それにしてもナビレの探検以來、行を共にした苦力のうちには、私の片言交りの馬來語で親しくなり、時には「大人、煙草カシ、タバコ下さい」とか洗濯させたシャツやズボンを「日本に歸る時には下さい」と強請ねだつたこともあつたが、今、自分達の前に一番恐い兵隊と白人の官吏に尊敬せられながら旅行する大人トアンは一體何者であらうかと考へたに違無い、彼等は所謂その認識を改めざるを得ない譯でその態度は一變した。私は何もパプアから尊敬を受けても、又受けなくても何等の痛痒は無いが、蘭印政府からそれだけの保護と又援助とを受けつゝこの探検を爲すことの出来るのは、詰る處、日本帝國の御蔭に外ならないのだと考へた。

爪先き上りの森が暫く續いた、右手の小さい谷の平地に道路の工事中、轉石の爲め不慮の死を



遂げた人の墓があつた、樹林は次第に深くなり、道は何時の間にか川の左岸に沿ふて登つてゐることがわかつた。暫く進むと左手の低地に一軒のビーバツク（小屋）があり、昨日豫定の時間でランシキを出立して居たなら此小屋に泊るべきであつた。



No. 110 中食する一行 (金平)

私達はこの小屋の前にある芝生や岩に腰を下ろして休息した、ム君は爪哇人の料理人に命じて朝餉をとつた。道が少しづつ急坂となり森の樹木は愈々巨大となつて来た、この附近の森林はアング旅行中最も美事のものであつた。

左の谷に大きな水音を立て、流る、川水は、岸の森が餘り深く見ることが出来ぬ、何時の間にか水音から遠ざかつて急坂を上りつめると平たい樹林地に達した、時計は十一時半である、私達は樹の根に腰を掛け、持参の辨當を開いて食べた。兵隊達の食事の時間は自由で思ひ思ひに食べた、その食物は日本と同じ米飯でアルミ製の圓い浅い皿に菜を振りかけスプーンで食べてゐた。

食後ブ君の吹く笛の合圖で兵隊が立ち上り私達も出立の準備をした。

ものゝ一時間も歩いた頃天候が何んとなく怪しくなり、そのうち雨の雫がポツポツと落ちて来た、今宵の宿泊場所を早く決めねばならぬので心が焦つた。

行くこと暫くで道路を横ぎる細い小川があつた、この小川に沿ふて僅に平地がある、茲を今夜の宿泊地と決めた。

雨が段々強くなつた、私は樹の根に腰を掛け宿泊の準備をデツと眺めて居た、兵隊は劍を抜き苦力は山刀を携へ森の中に這入つた、と思ふ間もなく各自が小さい丸太を切つて歸つた、丸太を長短、一定の長さに切り揃へ、長い丸太は前に、短い方は後方に各一列に地中に立て、屋根は丸太を蔓で縛つた、此小屋の骨組の上には携帶して居た青いゴム引布、二巻を取り出し屋根の一端に置き、クルクルと轉ばせながら廣げた、小屋の壁は椰子の葉を立て雨を防いだ。

小屋が出来ると中に組立ベッドを置き私達を内に招じて呉れた、私はこの操作の迅速なのに感心した。私達が内地から持参した厚地のテントは雨の多いニューギニヤでは特別の場合の外は役に立たぬ、テントは空しく内地に持ち歸るより外無かつた。

此急造の小屋は長さ七間計り、ベッドは縦に工合よく列んだ、ベッドの無い場所には草を布き兵隊達の寢床とした。

私達の夕餉の仕度には携帶した荷物の中からその材料の入れてある袋や箱を見つけるのに骨が



折れ、又はれを見附け出してもその料理にハタと困つた、然し初島君は料理には自信があるから自分でやりますと申出たので意を強ふした、成程、出来上つたライス・カレーと吸物とは迎もおいしい、これなら明日から、食事の心配は要らぬと安心した。



No. 111 一休みする苦力(マネキオン族) (金平)

私は小屋の前の小川で行水した後、床の中に這入つて休んだ、急に兩脚や腹部に痒みを感じた、又赤虫に食はれたらしい。又茲の森は海拔が低くアノフェレスが多い、日本から持參の蚊取線香を出して焚いた。

私の隣のベッドにはム君が並んで寝た。

四月四日

四時半に目が覺め、小屋の外を眺めると兵隊が一人、歩哨に立つてゐた、夜中交代で見張つたものと見える。

昨夜、六時半出立と、ム君が傳へた、ナビレでの經驗からすれば餘程早く出立の準備をせねばなるまいと早目に起き六時に朝飯を食べた、然るにム君以下兵隊達は既に出立の準備が出来、その合圖の笛を待つばかりであつた、私はその迅速な仕度に驚いた。

森の中の朝六時半は夜の明けかゝる頃で空にはなほ星が残り、森の樹木は特に壯大に見えた。

行くこと暫くで手摺を設けてある急坂に差しかかつた、この坂はどこ迄も長く続き、或時は草

原又或時は竹林の中を抜けた、陽が間もなく高く昇り、汗は顔から瀧の様に流れた、私は時々停止したまゝ、生氣を入れ、その都度下界を振り返つた、モミの海岸を遙に望み、ランシキの平野を包む山の中腹にはマネキオンの部落が指呼の間に見えた。

此坂道では重い荷物を運ぶ苦力の勞苦も思ひやられたが遂に落伍者が出来た、一行は誰云ふとなく急坂で思ひ／＼に腰を下ろして仕舞つた、それほど一行は疲れて仕舞つた、

急坂がなほ續く、私も次第に空腹を感じ、疲れても來た、草の茂る土手に腰をかけ、辨當を出させ、飯盒の飯をその蓋に盛り罐詰を開け水筒の水で食事した。



No. 112 喘ぎながら急坂を登る筆者(ムルダ-氏)

漸く元氣が出たので又坂道を登つた、海拔千二、三百米も來たかと思ふ頃、一帯が霧に包ま



れ、この霧は細雨となり次第に雨となつた来た、私は洋傘を所持して居たので一時を凌いだ。他の人達は頭から濡れるに委せ、ズンズン進んだ、道が尾根に出て来た時、ム君は宿泊準備の命令を下した、茲は「十月ビーバツク」と名づけた小屋の跡で水の便は悪いが土地は平であつた。

兵隊や苦力は土砂降りの最中を昨日と同じ様に丸太を切て柱を立て小屋を作つた、私は豪雨の間、小屋の出来るのを待ちながら樹の下に佇んで居るうち、汗と雨とで濡れた體が急に寒さに震へて来た、小屋が出来たのを待ち兼ねて冬シャツを取り出して着替へた。

兵士や苦力達は荷物の整理と衣類の乾燥とで忙しく、それに朝から食事を取らぬ彼等は濡れた薪で炊事をせねばならんだ。

夕刻には雨は小止みとなり、兵隊も苦力も段々落ちつき、夫々の所を得たと見え、なごやかな氣持ちが彼等の間に漂ひ歌も聞えて来た。

私はベツドの上に胡坐をかき日記を書く、夕の食事も簡単に済ませ、持參のウイスキーをム君

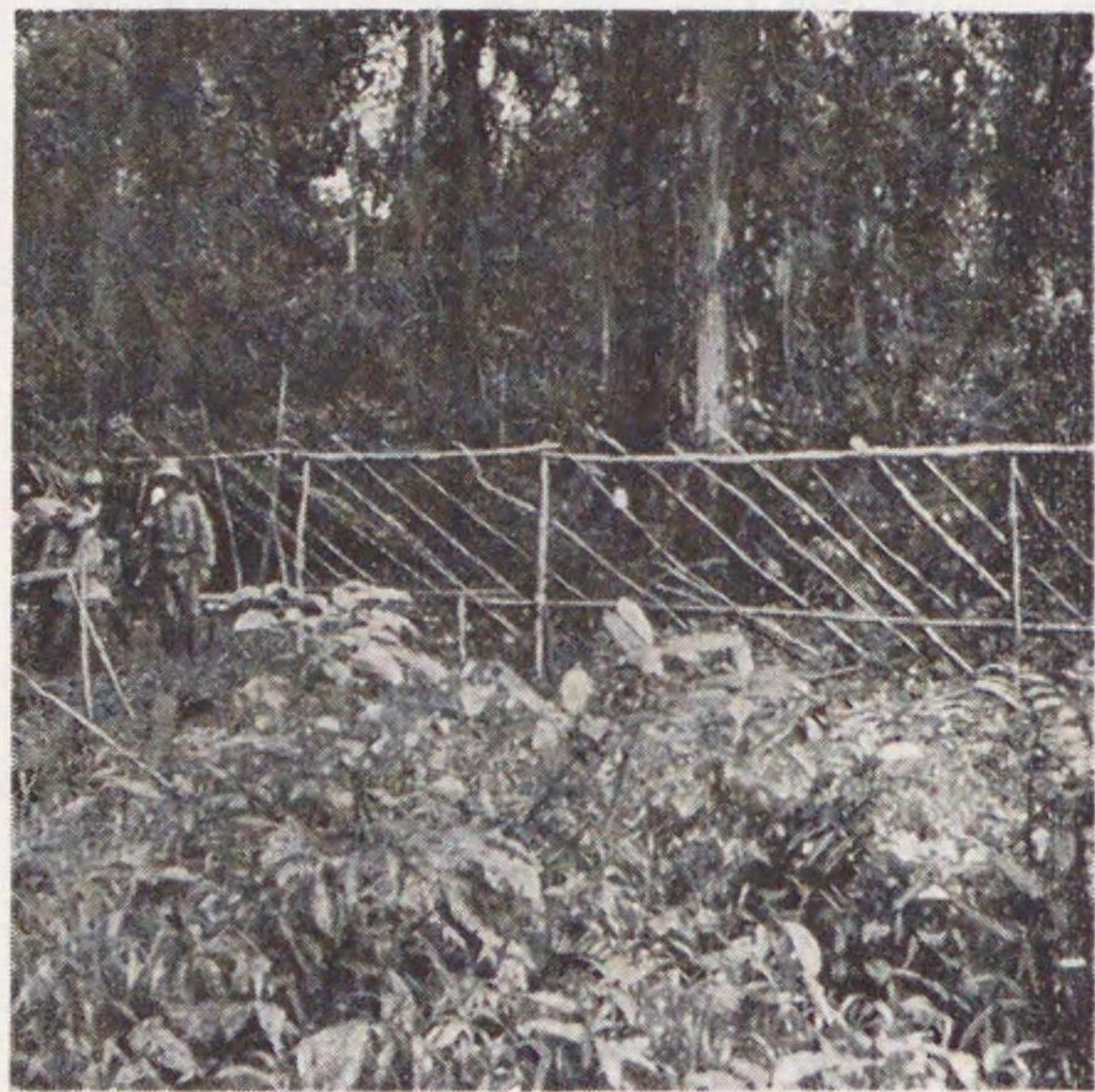


No. 113 急坂を上つた後、一休みする一行 (金平)

とブ君とに勧めた。

夜に入ると雨が再び激しく降り突風をも伴ふた、蚊帳も着物も濡れたらしい。

四月五日



No. 114 宿營小屋の骨組 (金平)

五時半、兵隊が一行を起して歩いた、朝飯は一杯の熱い珈琲に代へ出立の準備を早くした。六時半の出立時間は正確に、ブ君の笛の合圖で行進を始めた。道は下り坂と上り坂とが交互に暫く続いた、林相が次第に變化し高地性の木性シダ、ツルタコが目につく、二時間餘りでイングリッシュ・ビーバツクに達した、馬脊の平地で、左手の谷には清水が流れ野宿には理想の場所である、イングリッシュ・ビーバツクの名は一九一三年登山した英國のギツブス嬢の

宿泊したのに因んだものかも知れぬ。

私達は茲で朝食を済ませ更に急坂にかゝつた、左の崖に新しいタコノキを發見、採集した、樹林の幹に蘚苔類が増し、樹木にはカシヤシヤクナゲが出現した。



坂は長く続く、然し気温は次第に下り風も涼しく、昨日よりもズツト樂であつた。途中、路傍の樹木に異様の長い實が澤山ぶら下つてゐた、初島君は採集棒で枝を引懸け、是を取ろうとする、それはパパアが食べ残したタウモロコシの殻を幾つも丹念に枝に括りつけたものであつた、



No. 115 ツリフネサウ (*Impatiens Hawkeri*) (金平)



No. 116 ギタ(女)湖の濕原を進む一行 (金平)

この光景を見て居た兵士や苦力はドツと哄笑した。

朝から曇つた空が次第に晴れてワレーンやランシキ農場の畑も見え、その眺めが一步一步と廣がつて來た、道が恐ろしく急坂になつたのは頂上に近いことを思はしめ、一氣に登り詰めると果

して頂の平地に出た、冷い風が暑さを忘れさせた、更に苔に覆はれた樹林を抜けると海拔一千八百米のミス・ヌツクと名づくる峠に達し、始めて眼下にアンギ湖の一つ女湖<sup>ギタ</sup>を見た、吾々はその風光の美に打たれて快哉を叫んだ、私は幾枚かの寫眞を収めた。



No. 117 ミス・ヌツクから見下ろすギタ湖 (金平)



No. 118 ギタ湖で水浴と洗濯する兵隊達 (金平)

私達はこの峠の附近を採集した後、湖面まで文字通り一直線の急坂を下つた。湖畔は思つたよりも廣い濕原地帯で、その周圍の森林にはナンヤウスギ (*Arctocarya*)、トリバ<sup>マキ</sup> (*Dacrydium*)、セウナンボク (*Libocedrus*) 類の針葉樹を混じた林が連り、日蔭の濕地には桃



色のツリフネサウが咲き亂れてゐた。

湖畔の濕原を岸に沿ふて一キロばかり進んだ、珍しい大きな蝶が只一つ空を飛んでゐた。此湖畔の稍々凹入した岸邊にノース・ポールと名づくる地點がある、日當りがよく風當りが少いので



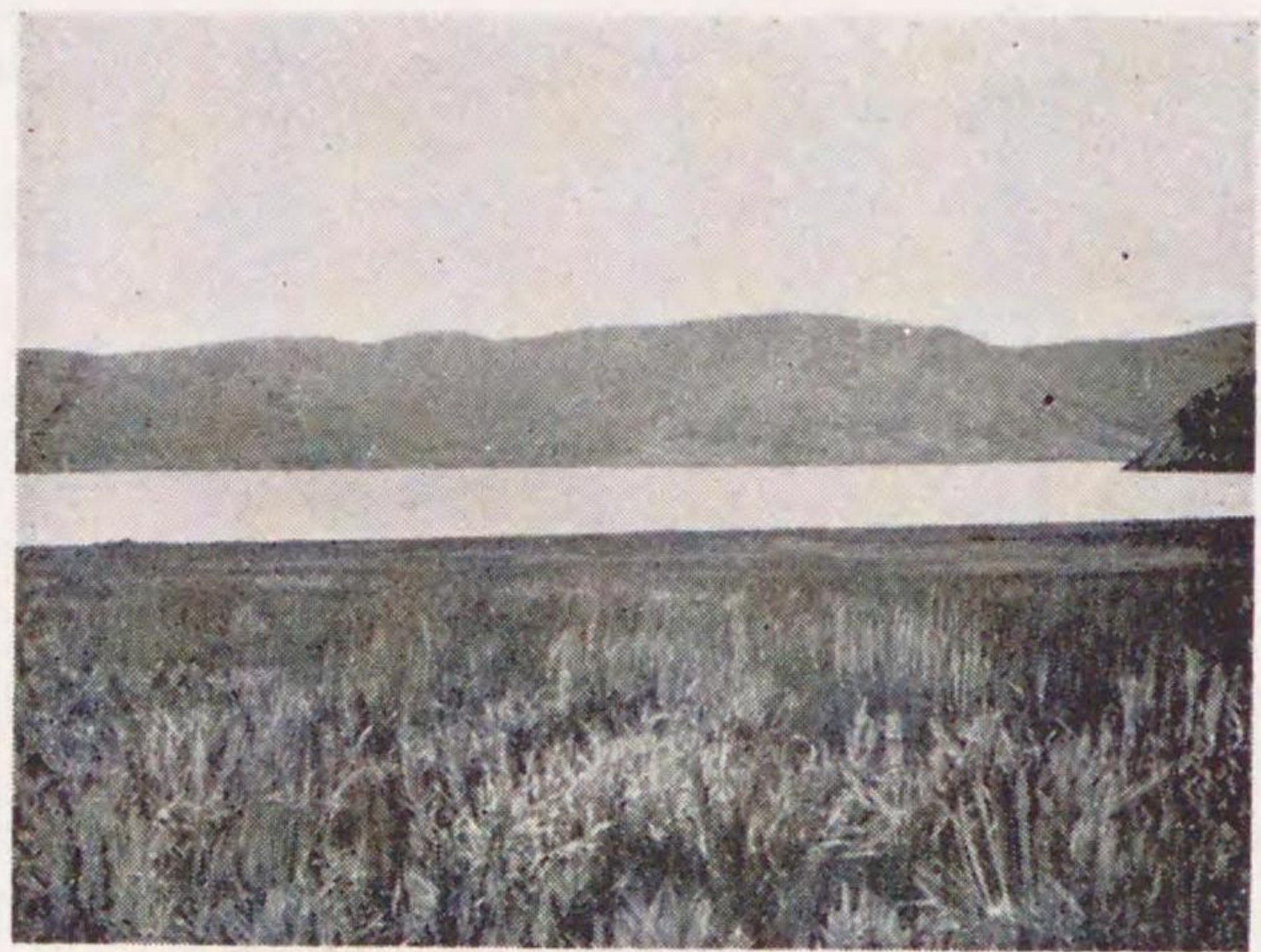
No. 119 湖畔に到達した一行は先づ 渴を醫した (金平)



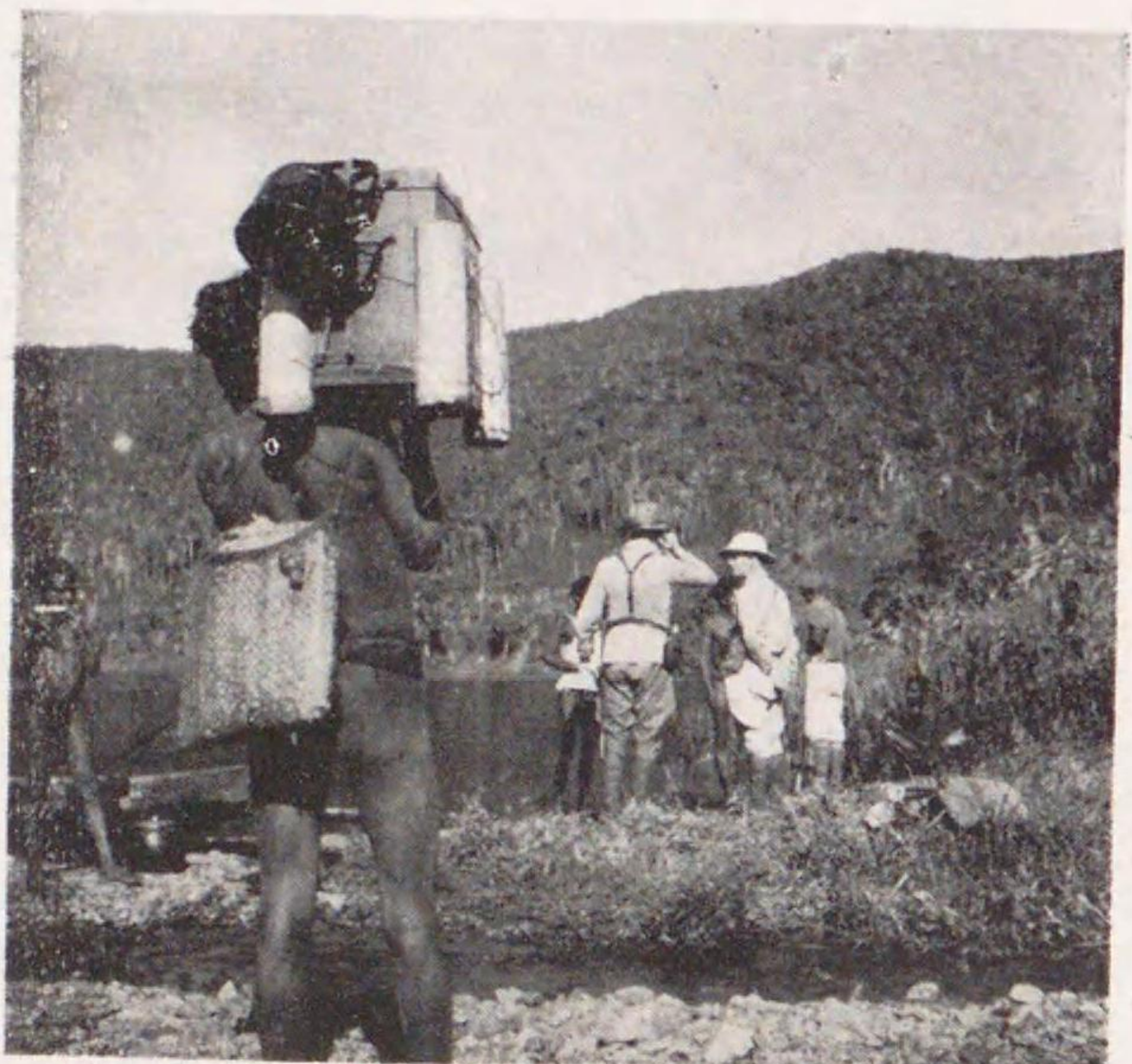
No. 120 日が傾く頃採集に出かける (金平)

屢々キャンプの場所となり、さゝやかな苦力小屋が一軒あつた、私達は先づ茲に腰を下し今日の 疲れを休めた。

此女湖<sup>ギタ</sup>は陥没作用で出来、水深百五十米、長さ九キロ、幅四キロ、水は清澄、鰻以外の魚族が棲息せぬと云ふ、周囲の山々の緑が湖に映じ神秘的の感じを起させるが、さりとて日本で見える様な暗い影が無いのは熱帯の陽光が強い爲であらうか。



No. 121 鏡の様に静なギタ湖 (金平)



No. 122 荷物を丸木舟に積み込む苦力 (金平)

荷物を擔いで長い坂を越えて来た苦力達は、大分疲勞してゐた、然し彼等は荷物を肩から下ろすと兵隊達と小屋

作りに忙しかつた。

昨夜の雨に濡れた毛布や、衣類を草原に擴げて陽に乾かせた後、私はタオルを下げて樹蔭の湖



邊に冷水浴をした、岸は眞白い御影石の小砂利で水は透通つて見えた。兵士達も裸になつて湖水に入り汗を流し洗濯に餘念なく、ブリーミング軍曹は水筒の水をラツパ飲みにして渴を醫した。

下士官のブ君は二發の砲聲を湖面に響かせ、對岸のマネキオンに一行が到着した合圖となし丸木舟を呼んだ。初島君は足の疲れを忘れた如くすぐ湖畔の採集を始めた。

小屋の仕度が出来たので私はベッドの上に脚を延して休んだ、湖面から吹く風は秋を思はせる程冷い、私は毛のシヤツを着て脚を毛布で包んだ。

夕方、マネキオン族の丸木舟が野菜を積んで對岸から着いた、是れを岸に上げると今度は私達一行の荷物を載せて間もなく引返して行つた。

夜の帷が下りると太古の様な静けさで、鳥の鳴聲一つ聞えなかつた、然し夜半に風起り湖面には相當高い波が出た。

四月六日

拂曉、岸邊の小屋のベッドから這出ると朝の湖水は鏡の様な静けさである、朝のいつもの熱い



No. 123 ギタ湖を丸木舟で渡る (金平)

一杯の珈琲をすませ出立の準備をした、苦力達も各自、分擔の仕事に段々慣れて來た。

七時半、三艘の丸木舟で湖水を渡つた、私の舟にはム君の外、田山、初島の兩君が乗り、ム君は櫂を取つて漕ぐ、沖に出ると水は瑠璃色に見え、四圍の山々には低い雲がたなびいてゐるが左手のリナ山(海拔二千餘米)はその高峯をクツキリと空に現はしてゐた。

舟が對岸に着いたのは正午過ぎであつた、マネキオンの男女數十人、我等を迎へた、男は禪一つの裸體、婦は衣服を着け、顔には黒い墨の化粧をして居た。

苦力達の擔送の準備が出来るまで私達は草原の上で朝餉を攝つた。

準備が完了するとブ君は兵隊に彈丸の込め方を



(*Rhododendron Devriesianum* KDS.)  
No. 124 尾根に咲くシヤクナギ (金平)

命じ、いつもの隊形で進んだ。

坂は昨日よりも更に急で胸を突いた、手摺があつたのは助かつた、セウナンボクの樹林が現はれシヤクナギ、シヤンポ類が多くなつた。



此急坂は、私には登るのが精一杯で、隊形も亂れ勝ちになつたが、出来るだけ歩調をゆつくり保ちながら進んだ、ム君は逆も健脚で私の前をトントン飛ぶ様に上ぼつた、然し曲り角に來ると



No. 125 尾根からギタ(男)湖を望む(その一) (金平)



No. 126 同上 (その二) (金平)

必ず私を振り返つて私の異状の有無を確め、然る後又進んだ、私はム君の職務に忠實で又親切であるのに感謝した。

この急坂を上ぼり詰めると、樹木の無い饅頭形の丘に出た、丘は兩湖の分水嶺の中腹に當り、

ミス・ヌツクよりも眼界が廣く湖邊の白い砂の汀がハッキリと見えた。

此丘の草原に叢林が散在し、大輪のシヤクナギや美しい地上蘭があつた。荷物を喘ぎながら擔いで上がつて來る苦力達の到着を待つた後、再び前進を續けた、丘陵状をな



No. 127 樹上に着生した蟻植物 (金平)



No. 128 同上 縦斷 (金平)

した尾根には灌木性の樹木が多く又地上と樹幹に着生する蟻植物 *Myrmedoma arfakiana* BECC. が目を惹いた。



此蟻植物はアリノスダマ（蟻巢玉）と云ひラツキヨウに似た莖を持ち、太い莖の内部がラビリンスの様な室からなり、この室には多数の蟻が棲んでゐる、蟻と共棲すると云ふ説と、蟻が單に室を占有するに過ぎぬと云ふ説とがある、何れにしても特異な形態を持つて居る。樹上に着生す

るスダマはパプアが矢を射る練習の的で大概二、三本の矢が刺されたまゝ下がつてゐた。

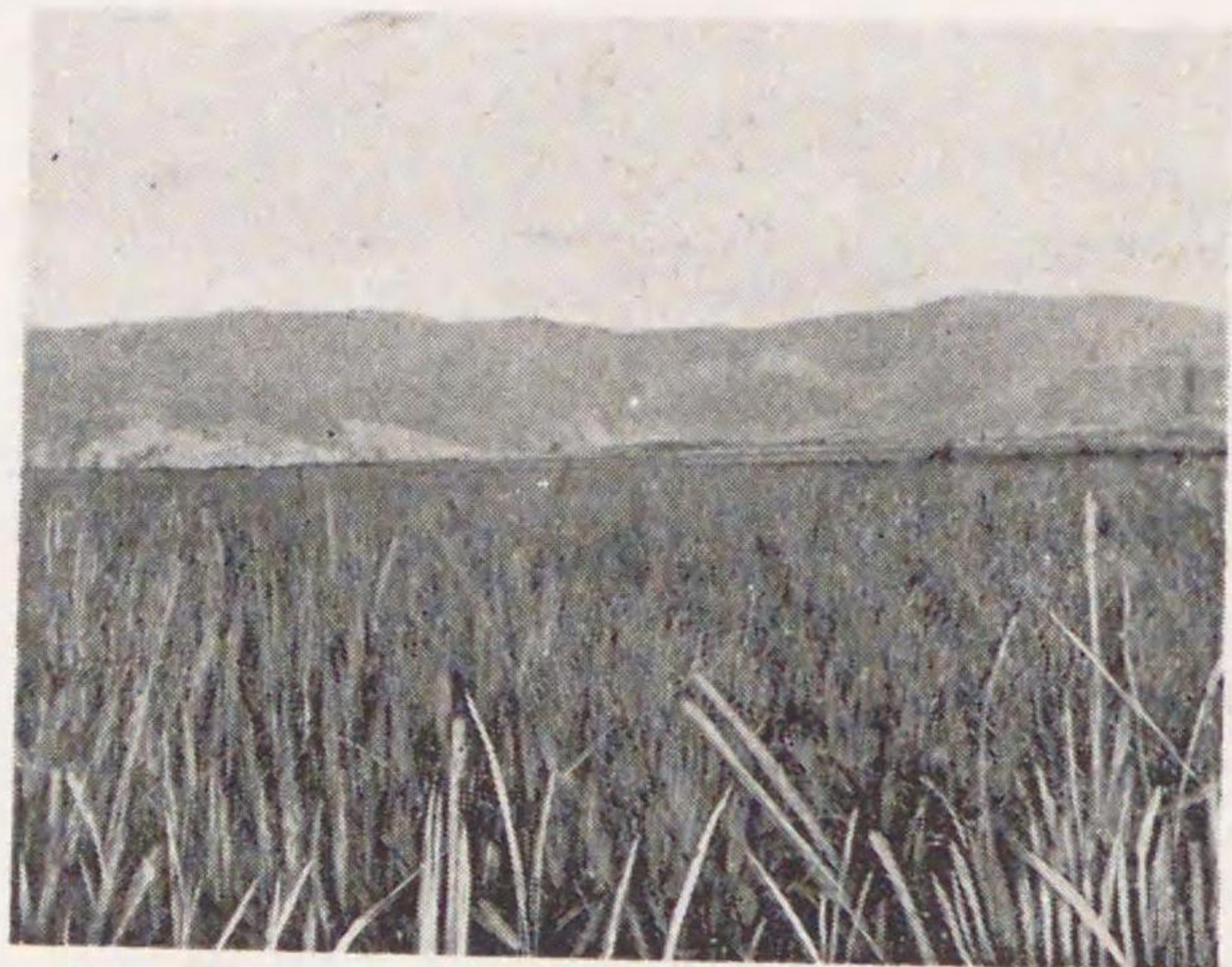
海拔二、四〇〇米、最高分水嶺に達した時始めて兩アンギ湖を俯瞰することが出来た。此峯から道は下り、ギタ（女湖）が隠れると共にギジ（男湖）が次第に廣く現はれて來た、此ギジ湖畔の北の岸に沿ふて廣い平らな草原地を貫通する小川に沿ふて何軒かの家が幽に見える、この部落こそ我等の目的地イライ村なのである。



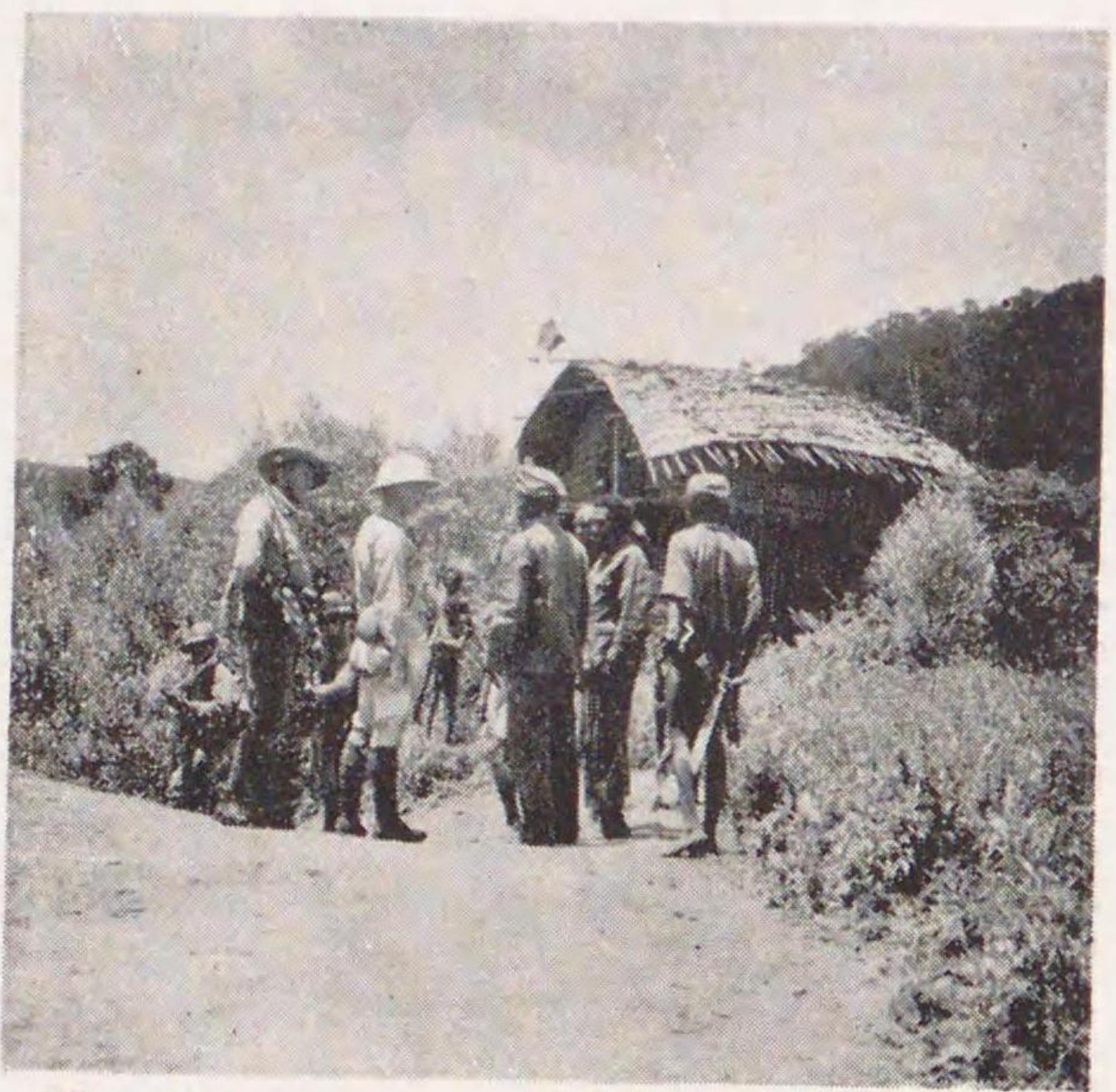
No. 129 イライ村入口に疲れた體を休める一行 (金平)

苦力達は茲で枯木を集めて燧火を上げ、村人に我等の到着を合圖した。暫く休んで出立すると坂は灌木の叢林地をすぎ密林に入つた、垂直にも近いと思はれる急坂を恰も階段でも降りる様に樹の根を掴まへながら下つた。

山の上から見えた草原は大濕原でアシが深く茂り、これを直通する道は靴を没する溜水と泥土の連続であつた。この難路を克服して漸く廣い道に出ると目的のイライ村の入口で、一同は暫く休憩した。此廣い道を行くこと暫で三色旗を屋根の上に掲げたマネキオンの家が右手に見え、近



No. 130 ギジ湖畔の濕原 (金平)



No. 131 キン・コンの家には三色旗を立て一行を迎へた (金平)

づくとかーキーの正服を着けた酋長と數名の土人が整列して一行を迎へた、此酋長こそキンコンの綽名を有する酋長その人であつた。



ム君は豫てイライ村に着いたら「尾のないキンコン」を紹介すると私に話したが合點が行かないだ。茲に来て始めてシネマで名高い吾々のキング・コングなることを知った。誰れが名付けた

綽名か、若い時には度々人を殺したのであらうその容貌は人間離れがして居る、彼自身はその名の由来を知る筈なく今は本名の如くに用ひてゐる。

我等はこの家を右に見て少しく進むと清い流れの岸に出た、川には籐で出来た吊橋が懸つて居た、橋を渡ると眞向ふに頑丈な柵を圍らした一廓があり、この中に兵士の駐屯所の外に村の役所や留置場などが建つて居た。

私達三人はこの一廓の中のパツサハン・グラ

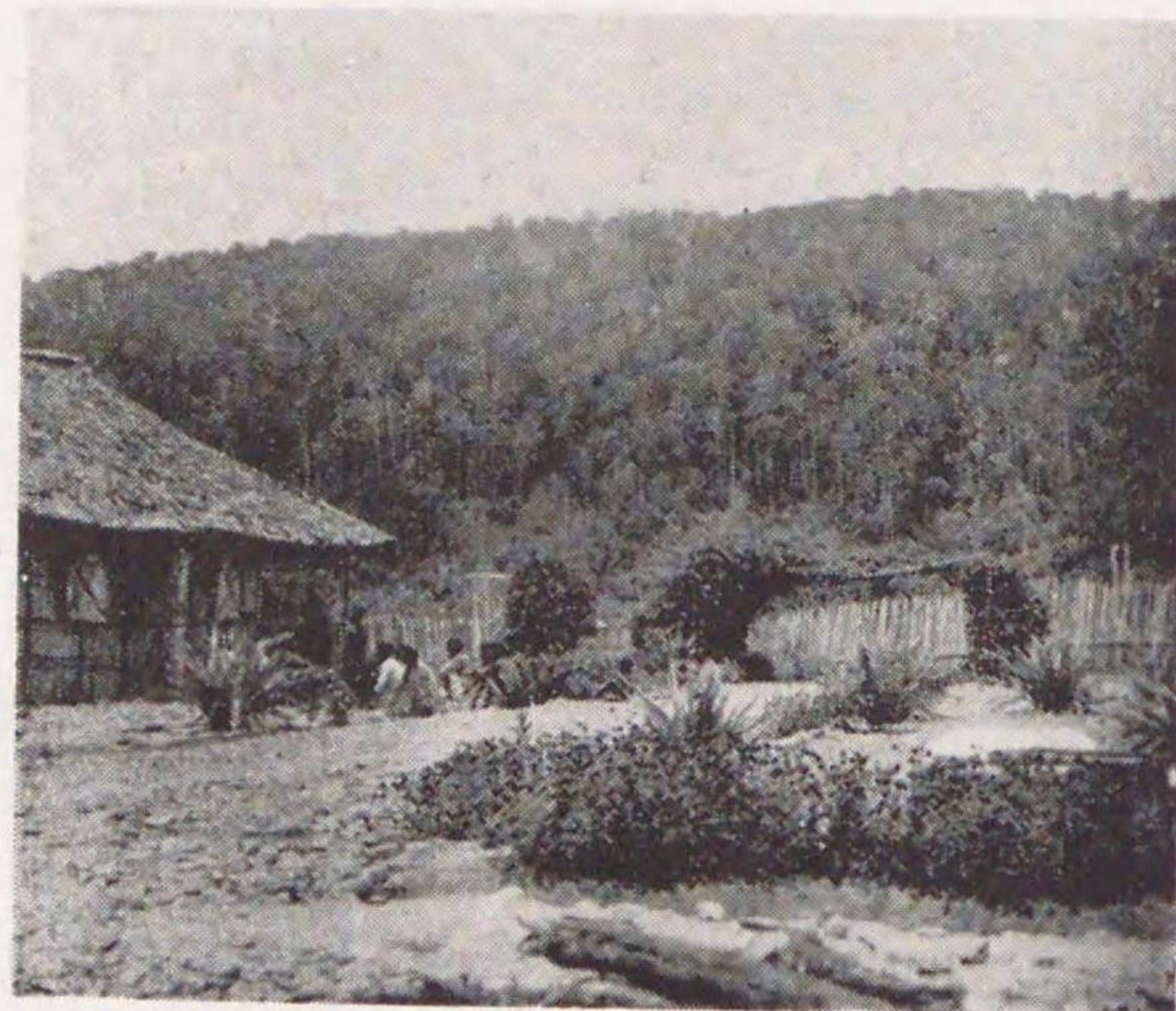
ハン即ち官營宿舎に案内せられた、間もなく後續の荷物を脊中に擔つた苦力達が疲れ切つて到着した。



No. 132 難路を突破してイライ村に到着した苦力達 (金平)

此宿舎は平家の天井の低い堀立小屋で四つに仕切られてゐた、私達はその一つを占領した、床

は砂の土間、家具一つない、只、室の隅に石油の空罐で出来た薪ストーヴがあつた、二つの小さい窓から僅に光線が入るのみで晝間でも暗かつた。然し軒下のヴェランダが稍々廣く粗末な卓子と机とがあり、茲で食事すれば仕事もした。



No. 133 イライ村宿舎の一隅に立つ役所 (金平)

イライ村は海拔一千九百米、氣候が涼しく兵隊は兵舎の横手の廣い畑で菜園を作つてゐた、ジャガ芋、トマト、インゲン、ネギ、大根等何れも上等の出来ばえで是等の野菜を貰つた私達は大に喜んだ。

夜になるとストーヴに兵隊が火を焚き付けて呉れた、丸太が赤々と燃へ、三人はベッドに腰をかけ、なつかしい火を圍み歡談に時を過した。

そこへム君がやつて來た。

「プロフェサツ・カネヒーラ(時々プロフェサツ

とも云ふ)明日は土人の踊りをさせる、活動寫眞を撮つてはどうですか、それから殺人事件があつたんで明後日、その方の仕事を片付け度いからそれ迄滞在し度いですがどうでしやう」と云ふ。



今回の旅行は私達の都合こそ大切なので、案内のム君は自分の都合で日程を變へることを遠慮したので態々やつて來たのだ、

私は

「それは結構、してその殺人事件と云ふのは一體どんなことなんです」

私は好奇心から尋ねて見た。

「ほんのつまらんことなんです、一人の男が妻君を貫つたんです、ところが嫁の両親の方で贈物（結納品に相當するもの）が少いから嫁を返せと云ふて無理に連れて歸つたんです、すると嫁に逃げられた婿が怒つて先方の親爺を殺したんです、で私とその裁判をやるんです。」



No. 134 イライ村で兵士達のつくる菜園 (金平)

世間にさらにありさうな事件で別に興味を惹くものでも無かつた。

四月七日

朝の気温は室内で十五度を示してゐた、私が廓の外を流れてゐる川で朝の口を漱ぎ、ヴェラン

ダで珈琲を飲んでゐると三人の垢に汚れた裸の囚人が一人の兵隊に繩で牽かれ、寒さに震へながら目の前の道を過ぎ便所に行つた、何れも殺人罪を犯し、私達の小屋の裏の留置所に繋がれて居るが、その憐な姿は此世の者とも思へなかつた。



No. 135 キング・コング (右から三人目) (金平)



No. 136 キング・コング (金平)

朝食後、初島君は苦力三名の外に、兵隊二名を護衛として小屋の背後の森に採集に出かけた。私はキング・コングの寫眞を撮り度いので兵隊の案内を頼んだ、宿から近い道の傍にある床の高い彼れの家の外に來ると、兵隊は、



「キン・コン！ マッ  
出て来い」  
と呼んだ、

キング・コングは入口に裸體を半分覗かせたが又引込め、着物を着け、丸太の梯子を降りて來



No. 137 マネキオンの凱旋踊 (金平)



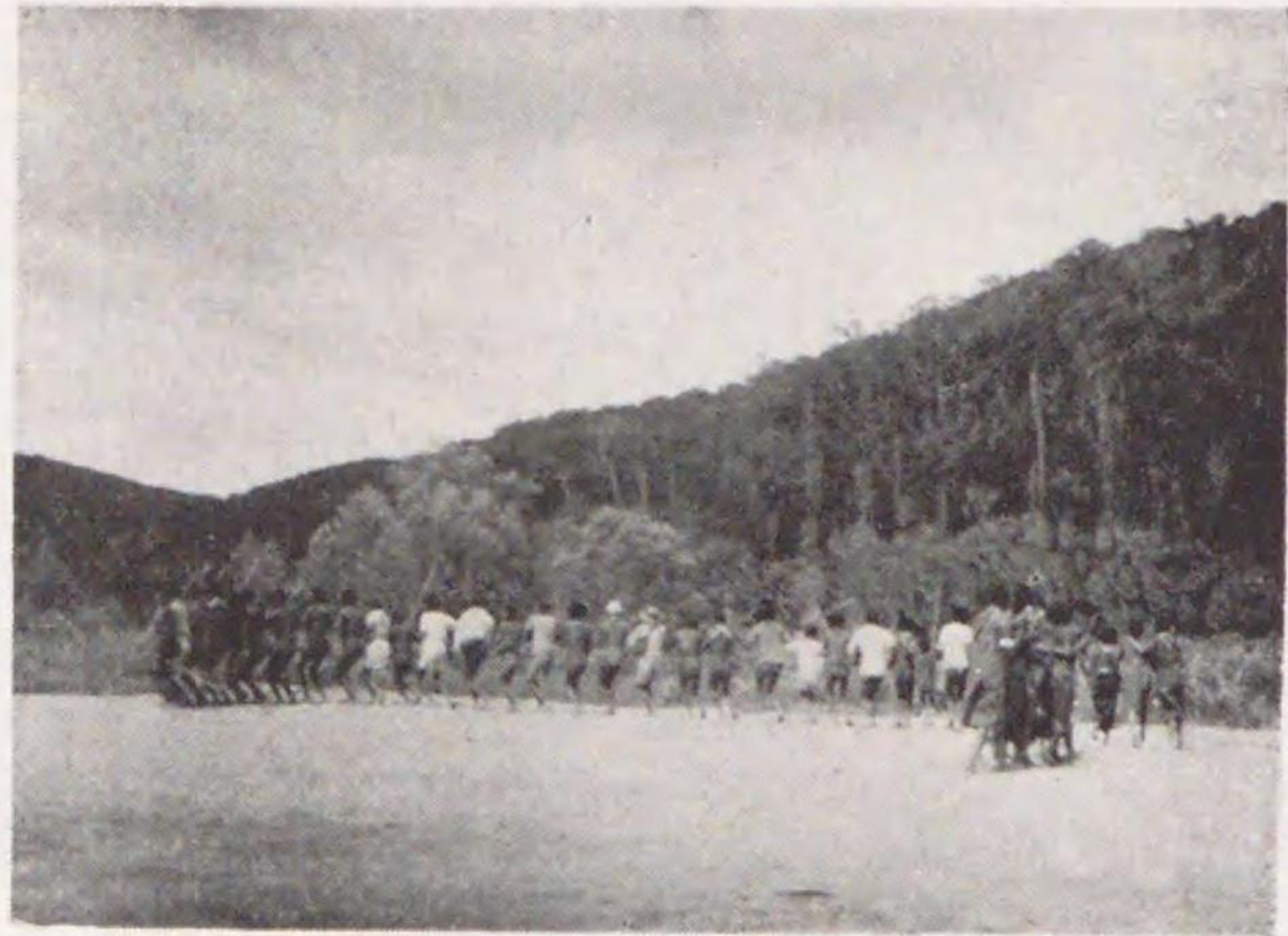
No. 138 命令を下すキング・コング(金平)

た、私は二、三枚の寫眞を撮つた後、若干のシガレットをやつた、善良そうな笑顔に白い齒を見せた。今こそ好々爺になつてゐるが昔は獐惡であつたに違ひ無い。

初島君が採集から歸つて來た、モクレン科、マンサク科、クス科等の樹木の珍種の外、多數の

美しい蘭科植物を採つて來た。

午後ベッドに假睡してゐると喊聲が遠くから聞えて來た、昨日約束したパプアの踊りが始まるんだなと直感し、室外に出るとマネキオンの男と女とが七、八十名も籐の吊橋を渡つて來た、村



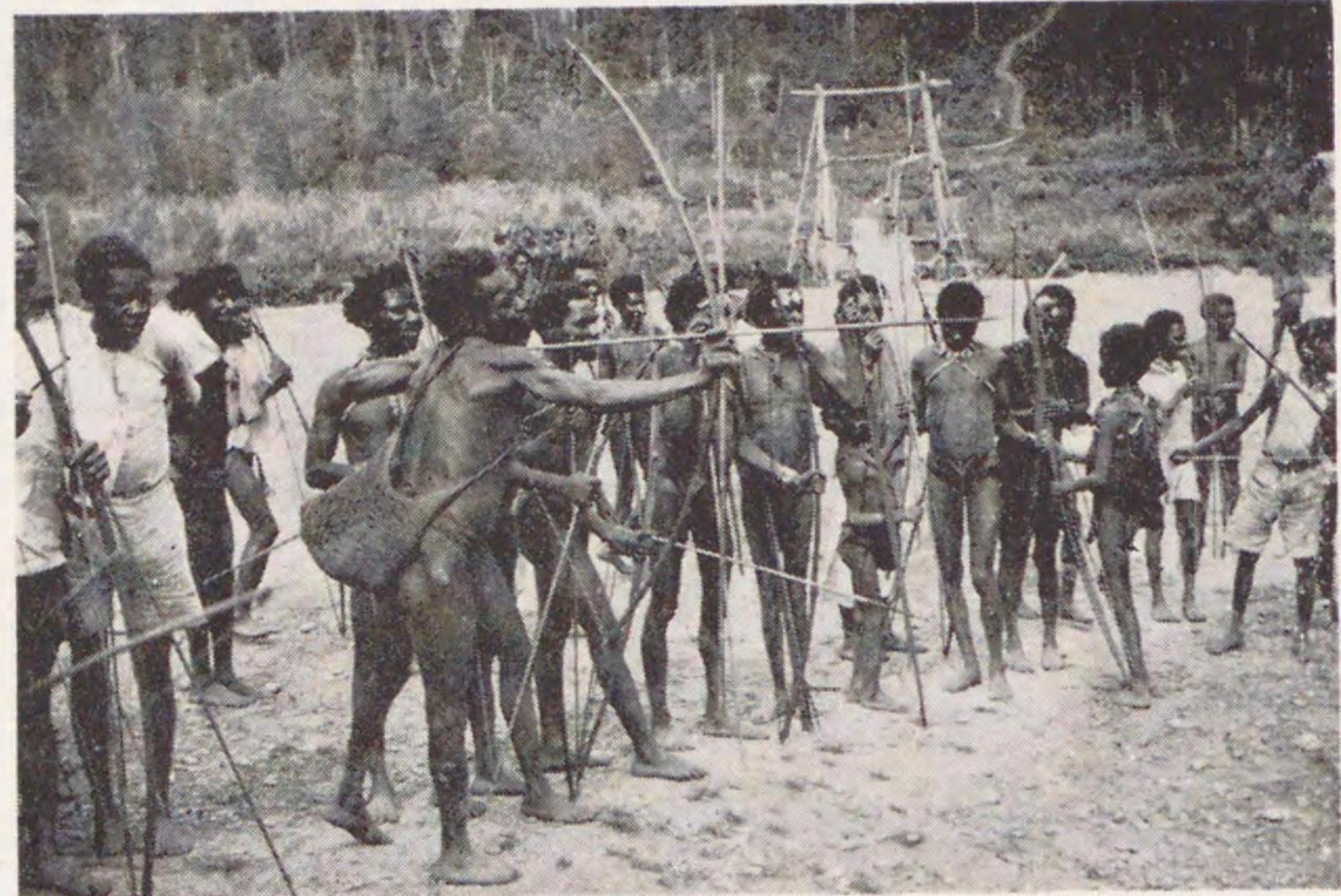
No. 139 一列横隊で踊る男女 (金平)

毎に隊を組んで來てゐるらしい。柵外の廣場に集合したパプアは武器と農具を携へながら喊聲を上げて突撃して吾等に迫つて來た、これはパプアの凱歌の踊りであることがわかつた。これが濟むと一列横隊になり古老の音頭につれて一同は足並揃へて合唱しながら踊つた、周圍に立つて居た若い婦は無論、母らしい老婆も次第に列の端に加はつて手をつないだ、だがこの一列を輪にすれば一層踊りよいので兩端の男と女との手を繋ぐ様に勧めた、しかし、それは男女間の嚴しい御法度であるから此勧めには斷然従はない、そこでアングの村長が飛び出し右手に男、左手に女の手を

とつて輪にした、ムルダ一君も飛び出し輪の列に加はつた、觀衆は喜び拍手した。

踊りが濟むと彼等の勞を犒ふ爲、私は持參の「嚙み煙草」を一同に分配してやつた。





No. 141 マネキオンの競射 (ムルダ-氏)

ア語で「出て来い」と叫んだ、中々應じさうもない、煙草をやるからと告げると漸く妻君が子供

ふて林の中を進み、屢々川を渡渉した、イライの役所に出頭するのであらう、男女のマネキオン

に度々出會つた、昨日の踊りで私達の顔を知つて居るから怖れたり、逃げ隠れはせなんだ。ハウチハノキが一面に生へてゐる河岸をヅンヅン奥に進むと森が茂り、ナギの一種で葉の極めて小さな *Podocarpus imbricatus* Br. を見付けた。又シヤシヤンポ、モクベンケイ、トベラ、ノボタンなどがあつた、然し多くは現地で鑑定しかねる種類が多かつた。

川をどこまでも上れば谷が狭まり、前進が出来なくなつた、道を左の森に取つて坂を上ぼると開墾地に出た、畑の中央に一軒の Papua の小屋があつた、一人の老婆と若い妻君が高い床の室の入口に立て眺めて居たが私達が近づくともう怯えて室の中に這入つて仕舞つた。護衛の兵隊の一人が片言らしい Papua



No. 140 パプア同士は男女が手を取らぬ、一行は中に入り女の手を取つた (金平)

来た。

私は一人の Papua を呼んで携帯の竹筒で發火をやらせて見た、モミ附近で道具だけは手に入れてゐる、瀬戸のかけらでこの竹筒に二、三回打ちつけると、火花が出てホクチに引火した、このホクチは椰子の葉柄に附着する絨毛であることモミの海岸で調べたものと同じであつた。

夕餉は初島君が腕を振つて料理したハム・ライス、若布とカマボコの吸物、バタで痛めたス

クワツシユ・ポテト、それに生大根の鹽もみがつけてあつた。

四月八日 (滞在)

今日の天気も乗々、四人の護衛兵を連れ採集に出掛けた、道はギジ湖(男)に注ぐイライ川に沿



を抱いて梯子を降りて来た、恐怖に驅られた様子、寫眞も一枚しか撮れず、すぐ室に引込んだ。私達は山に出で働いてゐるパプアを招きサツマ芋の畑を抜けて森に入り、採集を続けながら元の道路まで案内させた、この森では相當の收穫があつた。



No. 142 竹筒に瀬戸かけらを叩きつけて發火するマネキオン (金平)



No. 143 マネキオンの母性愛 (金平)

私達は往路に辿つた川に出た、そのまゝ川を下ればイライ村に行けるのに案内の兵隊が、近道をする爲め横の森を掻き分け、樹林を潜ぐりつゝ進んだ、幾度か小川や泥濘の水溜を渡つたが失敗した、再び元の道に引き返して漸く宿舎に歸着した。

午後はムルダ一君も役所の用事が済み暇になつた、私の希望でギジ湖に丸木舟を浮べ此湖水唯

一の魚族であると云ふ鰻を捕獲して標本にするプランが立てられた。

私達はム君の外に、護衛の鐵砲を携へた下士官のブ君と二人のパプアを連れ宿舎から眞直ぐに大濕地帯を横ぎる立派な道路を湖邊まで歩んだ。湖邊には莎草が茂り湖に注ぐ川の入口に丸木舟が待つてゐた。

全員はこの丸木舟に乗り權を取つて川を進み湖の方へ向つた、しかし、出立してもものゝ五分もたぬうちに舟の割目から水がどんどん漏れ、次第にそれが勢よく噴出して来た、此水の浸入には防ぎ様がなく、ノアの土舟の様に危険が迫つて来た、大急ぎで後に引き返すより外無かつた。

せめて湖の水面でも眺めて歸へろうと叢原を分け濕地帯の岸邊に出た、このギジ湖は女湖メダに比



No. 144 ギジ湖、高き莎草は藺、浮いてゐるのはガガブタ (ムルダ一氏)



べると、どこか陰鬱に見え、水際には白い水蓮に似たガガブタが咲いて居た。

歸途、左手にマネキオンの大きな家があり、小供達が戸口に遊んで居た、ム君は「プロフエツサー・カネヒーラ、一つ家が上がって見ませんか」

と云ふ。丸太の梯子を登つて室に這入つた、外の強い光に慣れた眼には眞暗で、暫くしてから人のうごめきがわかり、内部の構造が次第に明かになつて來た。

窓一つ無い室の前と後に向き合つて戸口があり、室の割合にその戸は小さい。右側には土を盛つた床の上には焚火の燃えさしが微かに残り、この上に二段の棚があつた、海拔の高い湖畔では夜の氣温も十度を下ることもあるから衣服の無いパプアが震へながらこの棚の様な床に横たはり、下から燻ぶる火に暖を取ることであらう。

此室の左手には椰子の葉で出來た仕切りが二つ、三つあり、仕切り毎に焚火の薪があり、その廻りには女の寢床があつた、此男と女の住み場所の區別をつけるに前後の出入口の通路の兩側に丸太が置かれてゐた、右側の丸太を婦が越えてはならぬジグフリード線とすれば左の丸太は男の越えてはならぬマデノ線である、この戒律は嚴重に守られてゐるとム君が説明して呉れた。従つて夫婦生活は室内ではない、是は日本の南洋の島にも見る處である。

四月九日 (ノース・ポール)



No. 145 尾根の林相、前方の樹は *Baeckea frutescens* L. 枝にサルオガセが風によぐ (金平)

イライ村の滞在僅に三日間で日々の收穫も多い、モット居り度いのは山々なれど下から連れて來た苦力の中には寒さに弱つて居る者があり、又食料も減つて來たので出立することになつた。

七時には出立の用意が完了し、苦力達も嬉々として出立の命令を待つて居た、七時半、兵隊は型の如く整列し「行進！」の命が下ると出立した、兵隊や苦力達は何故か村の入口の吊橋を渡らず川を渡渉した。

歸路は濕原地帯の通過をやめて山手を辿つた、坂の下までアンギのビスチュール、パテルジャワ君が見送つて呉れた、パ君はランシキから同行した人柄のよい青年、多分アンボン人であらう。

坂の手摺りを握りながら一步一步と登つた、四百米もある一直線の道を上りつめると分水嶺に出でアンギ兩湖を足下に俯瞰した。周囲の山には雲が低く垂れ、俄に冷い風が肌を通した。尾根にはトリバマキノキや *Baeckea frutescens* L. の疎林があり、枝に長いサルヲガセが絡んで、風



に揺られてゐた、ム君は和蘭の風光に似てゐると頻りに繰り返した。

往路の様に女湖<sup>メウ</sup>を丸木舟で渡るのは近道に違ひ無いが數十人の一行と荷物とを三艘しか無い丸木舟で渡るには一日中往復しても運び切れるものでは無い、そこで尾根傳ひに湖水の南側を廻つて陸行することに計畫が決められた。

二千米内外の高地では、流石に熱帯地の日盛りでも暑い程ではなく、一行の歩調が可なり早い割合に汗も出ず、グングン幾つかの山を越し又坂を下つた。

尾根の樹林で休んでゐるうち私は地上に生へてゐる蟻の巢玉を山刀で兩斷した、内部の迷宮状の室に棲息する幾千と云ふ大きな蟻は此突然の出来事に周章して大活動を始めた、私はこれを寫眞に収めた、ム君も此不思議な蟻を凝視するから私は蟻と植物の共棲<sup>シンレオシゼ</sup>であり、爪哇のボ植物園長として有名であつたトロイブ博士がこの植物の専門家であることを説明した、するとム君はトロイブの



No. 146 地上に生へた蟻植物  
*Myrmedoma arfakiana* BECC. (金平)

三人兄弟は學者揃で長兄は植物學者、次弟は經濟學者、末弟は藥學者であつたことを教へて呉れた。

尾根は長く續いた、景色はよく、涼しくもあり、疲れを忘れて歩いたが、一旦樹林地に入ると道は悪く、それに曇つた空が雨模様になり空腹が迫つて來た、隊形も次第に亂れ、兵隊も苦力も遅れ勝になつた、良い場所に休んで午の食事を取り度いが雨の降るにつれ、急に寒くなつては休むと風を引くのは必定、私はム君に引摺られながら前進を續けるより外無かつた。



No. 147 同上 縦斷 (金平)

尾根から湖畔に下る坂は迎も急峻で樹の根に擱りながら雨に濡れた樹の枝を掻き分けつゝ、滑り易い道を一步一步踏み締めて降つた、然し幾ら下つても湖水が見えぬ、植物を採集する餘裕のあり様なく足元を守るのが精一杯であつた、そのうち雨が激しく降りかゝつて來たが全身は濡れるに任せた。

樹林が次第に茂り樹も亦大木が増え、だいぶん下つたと思ふ頃、湖の水が樹の隙間から見え出